

# SAOIF ～剣魔録～

刻殲の剣師

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2021年 11月16日 13:00

あるダンジョンで1人の青年がとある少女をダンジョンボスの攻撃から庇い、意識を失った後、目を覚ましたら：：ステータスや装備、所有スキルが「初期化」、リセット「されていたのだ。

それは、とある少女も同じだが「互いの名前以外の記憶がない状態」だった・・・しかし、ある情報屋によれば、「例のギルド」のリーダーがこの出来事の黒幕だという。

失ったものを「取り戻す」ために1人の呪祓師は少女と共に突き進む！

# 目次

第1章―1 『不信の呪祓師と純粹無垢な少女』	
第0話 設定	1
第1話 仮想世界に潜みし呪いと呪祓師	11
第2話 有象無象の人の情、すれ違う思い	24
第3話 最凶のオレンジ《殺人者》と怨恨の殲滅者	36
第4話 不信の呪祓師、少女との約束	50
第5話 竜使いの少女と呪いの殲滅	50
者・前編	64
第6話 呪いの殲滅者・後編	79
第7話 デイジー・ヒート 暴食の華（ぼうしよくのはな）とホープ・オブ・マナ 命の希望（いのちのきぼう）	88
第1章―2 『万事屋編』	
第8話 心霊現象が起きるとどうなるか？	95
第9話 とある男を暗殺しようとした少女の末路・・・	105
ストーリー編 第1話 『常闇の出会い』	115

	第10話 『夏期・合同合宿』	1   1	SAOIF〜剣魔録〜『アンパンマン 夜空に輝くふたつの星〜中編〜』
	└─┘	123	
	第11話 『夏期・合同強化合宿』	1	192
	└─┘	134	SAOIF〜剣魔録〜『アンパンマン 夜空に輝くふたつの星〜後編〜』
	第12話 『夏期・合同強化合宿』	2	224
	└─┘	145	
	第13話 『夏期・合同強化合宿』	2	SAOIF〜剣魔録〜第15話
	└─┘	156	
	第14話 『モノの価値と好きの形』		241
168	SAOIF〜剣魔録〜『アンパンマン 夜空に輝くふたつの星〜前編〜』		
181			

# 第1章―1 『不信の呪祓師と純粹無垢な少女』

## 第0話 設定

主な登場人物

Ryo / 怜

ショートヘアの髪型にレンズが長方形の眼鏡を掛けた20歳の青年。

別の次元の11月6日にイベントダンジョンの攻略中、ボスの攻撃から“コハル”を庇って、今の次元に移させられた（その際にステータスの初期化に加え、力の殆どを失った状態で）。あることがきっかけで、人間を憎むようになったが、コハルと出会ってからは少しずつ心を開く。

とあるギルドを殲滅するのが目的。

《フロントランナー》でありながら、『呪祓師』《四大騎師》の1人でもある。

《掟戒聖騎師》のシヨウに『反転之呪イ』以外の力を身に付けるため、『呪殲・色災』を教わっている。

実力は『呪霊装・展解三武（呪転刻装符3枚装備）』で、キリトを圧倒する強さ

コハル／小春

セミロングのストレートヘアの髪型にエメラルドの瞳を持つ17歳の少女。

純粹無垢な性格で、正義感が強い。

デスクゲームが始まってからRyoのことを支えている。

《フロントランナー》の1人である。

『麗煌呪殲』の力の特徴をシヨウに教わり、「Ryoを守る」ため、使いこなせるようにシヨウの下で修行する。

実力は『呪転装・展解双武（呪転刻装符2枚装備）』でアスナを追い詰める程の強さを持つ。実はリヨウのことが・・・？

H a r u k a／春華

R y oと同じ、『四大騎師』の1人。

高校2年の3学期までは、常に冷静沈着で、内気な性格だったが、出会ってからは、天真爛漫な性格へと変わった。

髪型は通常のセミロングより少し長め。

彼女もRyoのことが・・・

E i j i／影次

中学から高校2年までは地元で『不動の玄武』の異名をもつヤンキーだった。

髪型はウルフカットでRyoの良き相談相手

『四大騎師』の1人。

Miduki／美月

ロングヘアの女の子で、無気力な性格。

体術“幻華流”の使い手で『四大騎師』の1人。

シヨウ／勝

呪戒師のトップ『掟戒聖騎師』飄々としているが、明るい性格

『呪殲・色災』の使い手でRyoには『呪殲・色災』をコハルには『麗煌呪殲』を使いこなせるように修行をつけている。

実力はキリト、アスナ、ユウキの連携でも、涼しい顔で攻撃を回避しつつ、デコピンで3人を気絶させる程。

キリト／和人

シヨートヘアの髪型で黒のコートに黒の長ズボンと全身、黒の装備をしている。

《黒の剣士》と呼ばれている。

攻略組の1人で、実力は『呪転刻印符（1枚）』を使ったRyoを圧倒する。

アスナ／明日奈

ハーフクラウンの髪型で《閃光》と呼ばれている。

攻略組の1人で、実力は『呪転刻印符（1枚）』を使ったコハルより強い。  
ユウキ／木綿季

エルフの耳に紫色のアホ毛付きロングヘアで赤色のヘッドバンドと民族の衣装みたいな装備が特徴。実力は『反転之呪イ』を使ったRyoを軽く越える強さ

用語

呪祓師

強い念を持つ魂が生き物の死骸に憑依したり、姿を変えて人間に害を及ぼす者＝呪物を倒し、少しでも人を呪いから守る為の組織

呪霊装

呪祓師が使用できる「*霊装*」。

「*霊刻印*」が刻まれている『呪霊具』か『呪転刻装符』で使用できる。

霊刻印

『呪霊具』と『呪転装符』に刻まれている特殊な刻印。

「呪殲霊刻印」、「呪守霊刻印」、「身昇霊刻印」が主に使われている。

3 大禁術

使用すると歴史を狂わせる程の力がある。

その為、東京・岐阜・京都の本部と支部で厳重に保管している。



《時空操術》 文字通り、時間や空間を自在に操る力。

中部支部に保管されている。

《命境操術》 相手の生死、運命を操る力。

本部（東京都）に保管されていたが、何者かに盗まれた。

《輪廻転操術》 相手の存在を “歴史から消すこと” や別の世界に転移させる “ことが可能な力”。

関西支部に保管されているが、何者かに盗まれた。

四神之加護

Ryo, Haruka, Eiji, Midukiが使う力

『虚空之炎鳥』

Midukiが使う力

身に纏う紫の炎は触れた相手のあらゆる力を無効にする。

虚砲惨羽 “こほうざんぱ” （呪力で構成した翼をはためかせることで無数の羽を飛ばす）

怨舞 “えんぶ” （虚砲斬羽と同じように翼をはためかせることで、身体能力を引き上げる。）

翼陽之転華陣 “よくようのでんかじん” （背に翼を生やしただけの見ただけが、攻撃

力と速度が極端に上がっている。呪力の炎を操ることもできる。）

『晶界之龍陣』

Harukaが使う力

靈力で結界を張ったり、回復や妨害の後方支援を得意とする。また、圧縮した靈力を纏って、攻撃することも可能。

淨耐返牙 “じようたいへんげ” （速さと防御力を引き上げることができる。靈力を操ることに長けている。）

流転舞 “るてんぶ” （攻撃力と速さを引き上げることができる。靈力を直接身に纏った接近戦に特化している。）

晶界之龍陣 “しようかいのりゆうじん” （尻尾を生やしただけの見ただけの見た目が、攻撃力と防御力と速さが極端に引き上がったうえに靈力を自在に操ることができる。）

『闇転之亀蛇』

Eijiが使う

高い防御力を持ち、ヤンキー時代の身体能力を生かして、圧縮した呪力で攻撃する。当てれば当てる程、相手を弱体化させ、自分の呪力や身体能力を引き上げる。

還全霧甲 “かんぜんむこう” （速度と防御力が極端に上がるが相手に攻撃を当てれば当てるほど、一撃の威力が高くなる特性のお陰で、ある程度の攻撃力もある。）

殲転『せんてん』（攻撃力と速さを極端に引き上げる。相手に攻撃を当てるほどに威力が高くなる特性とは相性がいいため、よく使っている。）

亀蛇之忌禍神『きだのきかしん』（亀の鱗を模した、結界発生装置が左右に浮いた状態だが、攻撃力と防御力が上がっているため、かなり手強くなっている。）

『転化之怨虎』

Ryoが使う

『固有呪霊装』の『反転之呪イ』と機動力を生かした奇襲を得意とする。

獄炎術『ごくえんじゅつ』（呪力の炎を自在に操ることができる。遠近戦では武器や拳に纏って戦う。）

煌炎術『こうえんじゅつ』（遠距離からの攻撃ができるうえ、身体能力を引き上げる術を使うことで接近戦もこなせる。）

獄怨殲煌術『ごくえんせんこうじゅつ』（攻撃力や防御力、速さを極端に引き上げると同時にとある力を解放することで炎を使った強烈な技を使える。）

『想転之神装』

『五大騎神』が使う

『想転之神装』は他の呪転刻装より桁違いな威力がある。その威力は上級の呪物をたった1撃で消し飛ばす程。

『創転之加護』

〃掟戒聖騎師〃源道 勝（げんどう しょう）が使う。

『創転之加護』は一度発動すれば、特殊な結界を張ることができ、自在に操ることができ  
る。

結界のエネルギーは常に無限で、呪霊具や呪転刻装に纏うことなどが可能。

『固有呪装術』

呪祓師に秘められた〃力〃で、所持者はRyōとコハルだが、使いこなすことができる人物は源道だけだ。

色災（しきさい）・・・源道が使う。

基礎の型の「反蝕」〃たんしょく〃を始めとした4つの色（型）に応じて、様々な効果がある。

緋転・「紅霸一閃」〃ひてん・こうはいっせん〃

一瞬で相手の懐に飛び込み、強烈な一撃を叩き込む。

蒼転・「蒼電乱舞」〃そうてん・そうでんらんぶ〃

相手を錯乱させて、その隙を突いて相手を仕留める。

死黒・「刻殲烈火」〃しつこく・こくせんれつか〃

今までよりも、一撃の威力や速さが桁違いで、色災の中では最高クラスの攻撃力を誇

る。

盾白・「精錬攻転」 “じゅんぱく・せんれんこうてん”

色災の中では随一、防御と回避を主体とする型。

基本技の「反蝕」と併用して、カウンターも可能。

「反蝕」 “たんしよく” (相手の懐に飛び込み、手刀を打ち込む)

この5つの型を源道は状況に応じて使い分けている。

反転之呪イ・・・Ryoが使う。

呪力と霊力を直接、切り替えることができる他に受けた呪いをそのまま相手に反射させることや貯めた呪力や霊力を放出させて、身体能力を大幅に引き上げることができ  
る。

代償として、使用時間が5分以上10分未満の場合は著しい倦怠感が数日間続き、10分以上、使用した場合は数日間の昏睡に倦怠感が数週間続くというものがある。

本来、この力は呪転皇のもので身転 “しんてん” (意識を入れ替える術) の他、一瞬のうちに相手をバラバラにする「血触殲壊」 “けつしよくせんかい” やあらゆる状態を全て無にする「転無」 “てんむ” 等がある。

『麗煌呪殲』・・・コハルが使う。

攻撃を当てれば当てる程、霊力を味方に付与するため、Ryoの『固有呪霊装』と相

性がいい。(反転の呪いによる力の上昇を抑えることができるため)

また、相手の攻撃を受けることで、元々高い防御力と俊敏さをさらに引き上げるという特性を源道に教えられてから力を使いこなそうとレベリングで修行している。

# 第1話 仮想世界に潜みし呪いと呪祓師

—第1層 競合の草原—第1層攻略会議当日25分前

Ryo? 「コハル、スイツチっ!」

コハル? 「オツケーっ!」

僕はコハルとレベリングで「イエロー・ワイプ」を倒していた・・・が

コハル? 「・・・」

Ryo? 「コハル? 大丈夫かい?」

コハル? 「うう・・・やっぱり、虫、無理だよお」

と半泣きになっているコハルを落ち着くまで待つてる所だ。

Ryo? (それにしても、虫系がダメだとはねえ・・・)

コハル? 「・・・ねえRyo?」

突然、コハルに呼ばれた。

Ryo? 「ん? どした?」

コハル? 「私達、生き残れるかな? 無事に・・・」

1ヶ月前、始まりの街の転移広場で行われたチュートリアルで茅場に告げられた残酷

な3つの事実。

・「仮装世界での死が現実世界に直結すること」

・「その日の時点で200人前後の人が亡くなっていること」

・「アインクラッド100層をクリアするまで現実世界に帰れないこと」

このことが精神に堪えたのだろう。だが、僕を心配させなくなかったのか、今まで無理をしていたのかもしれない。

Ryo? 「・・・コハル、よく聞きな?」

僕はコハルにそう言った後、コハルの目線までしゃがみ、言葉を続けた。

Ryo? 「生き残れるかどうかなんて誰も分からない・・・だからこそ、死んでしまった人達の為にもその分、『生きるんだ』っ！生きるしかないんだよ。」

コハル? 「・・・そう、だね!」

言い終わった時には、コハルが「あの時」以来の笑顔をしていた。

Ryo? 「さつてと、もうすぐ攻略会議だし、行こっか!」

コハル? 「うん!」

そして、ツールバーナの円形劇場で攻略会議が始まったが・・・青色のロングヘアの男性、ディアベルがボスの情報を言おうとした時、

???? 「ちよお、待たんかい!」



突如として、声を張り上げた人物がディアアベルの前に降り立つ。

「ワイはキバオウつてもんや：ボスと戦う前に、言わせてもらいたい事がある：この中に！今まで死んで行った二千人に、詫び入れなアカン奴らがおるはずや！」

独特な髪型をしたキバオウがそう言ったとたん、周囲がざわつき始めた。

ディアアベル？「キバオウさん、君の言う『奴ら』はつまり、『元βテスター』のことだね？」

キバオウ？「その通りやつ！奴らはこのクソゲーが始まった日にビギナー見捨てて消えよつた！奴らは効率良い狩場を独占してボンボン強くなりよつて、その後もずっと知らんぷりやつ！今まで、死んでしまった人達の為にも『そいつらに土下座』させて溜め込んだコルやらアイテムやらを吐き出して貰わんと同じ。パーティーメンバーとして命を預けられへんし、預かれへん!!」

コハル？「・・・酷い、私達だつてβテスターだけどそんなことしてないのに・・・わ、私、ちよつと文句言いに・・・」

「やめときな、それだとあいつの思う壺だ。それに足が震えているじゃないか？」

コハルがキバオウに抗議しようとするが突然、現れたアルゴに止められてしまう。

コハル？「でも・・・つつ！」

だが、Ryoは周りが萎縮する程の呪力を放つと同時に席からキバオウの所に一瞬で

移動する。当然、周りはざわついている。

参加者A　「何だ？今の！」

参加者B　「見えなかったよ？何なの、あの子？」

Ryo　「……」

キバオウ　「なっ何や！言いたいことがあるなら言えや！」

Ryoがキバオウを睨むがキバオウに催促され、何か言おうとした時、セミロングよりも長めの髪型をした女の子に窘められた。

Haruka　「河村君、気持ちは分かるけど、私に任せて？」

Ryo　「……春華、……分かった。」

春華にそう答えるとRyoは席に戻った。

コハル　「急に気配が収まってる」

アルゴ　「……」

Ryo　「ごめんね、心配させて」

コハル　「ううん、良いよ。」

春華はRyoが席に戻ったことを確認するとキバオウに話し始めた。

Haruka　「……キバオウさん、死んでしまった2000人の中にβテスターも居るんですよ……」

キバオウ? 「だから何や?」

その発言に春華の堪忍袋の緒が切れる。

Haruka? 「つつ! 死んでしまった元βテスターの人達はっ! 望んで死を選んだ訳じゃないの! 現実世界に帰る為に皆、必死だったの! それをっ! 貴方は・・ここの中にいる・・元βテスターの人・・達に・・」

Ryo? 「・・・(春華・・)」

話の途中で泣いている春華を見て、どうしようもできないことに苛立ちを感じるRy  
oだが、スキンヘッドの筋骨隆々な黒人男性が泣いている春華に歩み寄る。

???? 「ありがとうな。後は俺に任せろ。」

そう言った後、男の人は春華の頭を撫でた。

春華? 「つつ!」

春華は感極まって、さらに泣いてしまった。

キバオウ? 「・・・」

エギル? 「さて、俺はエギルって者だ。ちよつと発言させて貰いたい方がいいか?」

キバオウ? 「なっ何や」

エギル? 「この攻略本は元βテスター達が作ったものだ。」

キバオウ? 「つつ!」

エギル? 「それに、情報は誰にでも手に入るはずだが、現に沢山のプレイヤーが死んでいる・・・俺はその失敗を踏まえて、どうボスに挑むべきなのか?それがこの場で論議されると、思ってたんだがな」

何も言い返せないキバオウは大人しく席に戻った。

その後、ディアベルがボスの情報を説明し集合場所と時間を伝え、それぞれ、パーティーを組んで解散した。

—— 帰り道 ——

コハル? 「明日、無茶はしないでね?いつでも頼ってくれて良いから。」  
人間不信なRyoは何故、コハルが関わって来るのか分からなかった。

Ryo? 「・・・何で、僕に関わろうとしてくれるの?」

コハル? 「何でって、私が貴方と関わりたいと思った。たったそれだけ、理由なんてないよ?それにね?私は——

『貴方のパートナー』だから」

—— その日の夜 ——

僕はコハルが完全に寝たのを確認した後、黙々とフィールド狩りをしていた。

Ryo? (『私は貴方のパートナーだから』いつから・・・いつからてめえのパートナーにつつ・・・なったんだよ!!!俺はてめえを信じねえっ!誰もっっ!)

そう、所詮は人間だ。

人間は相手に否があるうがなかるうが、必要以上に罵つて来る。

何かあれば、「本人」から事実を聞かずに《大人》にすぎり、相手の意見に耳を貸さない所か《大人》も意見に耳を貸さない上に一緒になつて相手を一方的に罵り、挙げ句の果てには『全校との距離感を考えよう』？・・・ざけんな・・・ふざけんな！そんな人間を信用できるか！ それに・・・

—— 47層や高校の時と同じ結果になるのだから ——

クツキー？「怜君？」

突然、声が出した方向を振り向くとショートヘアの見覚えがある人がいた。

Ryo? 「・・・山本・・・さん。」

僕はコハルのことを話した。

自分とは対照的に明るい子だと言うこと

正義感が強く、努力家なこと

趣味が自分と同じ音楽で気があつたこと

クツキー？「そつかー、怜君、遂に友達が出来たんだね！」

Ryo? 「いや、『自分が人を信じない』から友達とは言えない」

すると、クツキーさんが僕にアドバイスをくれた。

クツキー? 「それだったら、コハルさんを信じてあげれば良いじゃない? それに信じていけないことは凄く辛いはずだから、まずはコハルちゃんの長所を見つけて、それを信じて行けばいいと思うよ」と僕にアドバイスをくれた。

Ryo? 「ありがとうございます、y・y・クツキーさん」  
クツキー? 「w宜しく」

この時、Ryoは決めたのだった。

—— 『まずはコハルのことを少しずつ、信じていこう』と——

翌日、AM 10:00 トールバーナ中央広場——

コハル? 「おはようRyo!」

Ryo? 「おはよ・・・しかしやたらと眠い・・・」

??? 「同感だよお」

コハルと話しているとロングヘアを一本にした女の子が僕の隣にやって来た。

Ryo? 「美月っ!」

Miduki? 「久しぶり、河村君!」

急な話の展開について行けないコハルはおどおどしている。そこに前髪を少し長めにしたショートヘアの青年、影次がコハルの横に来て、あることを説明した。

E i j i? 「実は俺達、『呪祓師』なんや。」

コハル? 「呪祓師・・・」

困惑しているコハルに説明を続けようとした影次を手で制して春華が説明する。

H a r u k a? 「呪いは『行き過ぎた感情』その物なの。だから、その呪いが広がらないようにするための組織」

R y o? 「それが『呪祓師』。『呪物』は強い念が生き物の死骸に憑依したり、自分で肉体を作ることができる。」

美月は一枚の紙をコハルに渡す。

コハル? 「えっと、これって」

M i d u k i? 「呪祓師の組織図」

呪祓師・組織図

掟戒聖騎師（呪祓師のトップ）

五大騎神（幹部クラスの実力者）

四大騎師（十二師の最高戦力）

十二師（呪祓師の前衛）

呪祓師（上、中、下のそれぞれに一級と二級がいる）

魔聖士（呪祓師になるには資格『マスター』の試験を受ける必要がある尚、試験は3

月上旬頃に行われる。」

コハル? 「・・・そうなんだね」

Ryo? 「で、今回のフロアボス戦なんだけど・・・」

Haruka? 「呪物のことが絡んでいるから、私達が居るの。」

Miduki? 「だから、責任重大なんだよね」

と話しが終わる頃には攻略参加者が噴水の前に居た。

そして、ディアベルの演説が始まったが要約すれば「次に進む為にも必ず勝とう」と言うことだった。だが、それよりも嫌な予感がしていたので、あまり乗り気じゃなかった。

—— 第1層 迷宮区内 ボス部屋前 ——

キリト? 「最終確認だが俺達はルインコボルド・センチネル担当だ。弱点は喉元、モーションを見分けて行けば、苦戦しない相手だ。」

アスナ? 「分かったわ」

コハル? 「分かった、絶対に勝とうねっ! Ryo!」

Ryo? 「・・・」

コハル? 「Ryo?」

キリト達と最終確認を済ませた後にボスの気配の違和感に気付き、確信した。



——呪祓師にしか倒せない——と

コハル? 「もう! Ryo!」

Ryo? 「ごめん、少しだけ良い?」

コハル? 「?うん、良いけど、どうしたの?」

Ryo? 「コハル、今回のボス戦は呪物が絡んでいる。」

コハル? 「どうということ?」

Ryo? 「ツールバーナで、言い損ねたけど、生き物の死骸や自分で肉体を作り出すことができるけど・・・根本的に『気を自在に操れること』

今回のボス「イルフアングザコボルドロード」は当然、魂もなければ気もないから『簡単に自分の身体にできた』ということ。つまり、事実上『呪物』という化け物になったということ、普通の人間じゃ勝てない。」

Ryoはコハルにボス部屋からした気配の違和感は『呪物』の気配だということ、呪物は特殊な武器か『呪転装』を使わないと倒せないということを説明した。

コハル? 「そんな・・・」

Ryo? 「だから、僕と春華と影次と美月とで『ボス』を叩くから、コハルはキリトとアスナとで雑魚を引き受けてくれない?」

コハル? 「でも、そうしたらRyoが」

僕は不安そうなコハルにこう言った。

『大丈夫、信じなよ？僕はあんたのパートナーだ。そして……』

そこまで言うと、Ryoは剣を抜き、呪物となったボスへ切っ先を向ける。

『俺はあんたを死んでも守るっ！』

Ryo? 「春華！」

Haruka? 「了解！『四獣之加護』、晶界之龍陣・鎖華』っ！」

春華が手を振るうと無数の氷の鎖が地面を突き破りボスの動きを止める。

だが、ボスは鎖を引きちぎり攻略組を蹴散らして進む……そう、ボスの狙いは俺だ。

Ryo? 「つつ！（ボスに一定のダメージを喰らわせると雑魚に囲まれて、ボスに集

中できないっつ！）」

Miduki? 「一旦、退いて回復してね！その間、私が……」

と美月が俺に回復するように伝え、その後のことを伝えようとするが突然、キリトが

叫んだ。

キリト? 「全力で後ろに飛べ！」

だが、時は既に遅しだ。ボスの攻撃で攻略組の大半が吹き飛ばされ、ディアベルも吹

き飛ばされた。

ボスの装備を見ると、いつの間にか片手斧から野太刀に変わっていた。

コハルは恐怖からか動けないでいる。

コハル? 「Ryo、このままだとディアベルさんが」

Ryo? 「大丈夫だコハル、すぐに行く! 『四獣之加護』 つ!!!」

俺は「呪転装」を解放し、ディアベルとボスの間へ突っ込んだ。

Ryo? (間に合えつつ!)

ちようどディアベルの近くだった為、何とか攻撃を防ぐことができたが、ボスが武器に力を込める為、押し返せない。

Ryo? 「つつ! があぁあつつ! 吹っ飛べつつ! デブ野郎つつ!!!」

俺は『反転之呪イ』を発動し、ボスの武器を弾くが前のめりに倒れた。そのあとは、エギルやキリト、アスナが一系乱れぬ猛攻をボスに仕掛け、キリトの『バーチカル・アーク』でボスは四散した。

そのあとボスRyoは『反転之呪イ』の代償で3日間、昏睡状態になったが目覚めた後、僕はコハルの折檻を受けた。もうコハル怒らせるのヤメヨ・・・(小1時間も折檻されたんだから) ( ; 皿 ) ( ) ガクガクブルブル

でも、『初めて信頼できる人』が「コハル」で良かったと思う。

## 第2話 有象無象の人の情、すれ違う思い

——15層 精神の心界・清廉潔白の大都市——

「Ryo!」

Ryo? 「・・・ユウキ」

転移門の前にはいたRyoの所へユウキがやってくる。

ユウキ? 「・・・Ryo、コハルと何かあったの?」

とユウキは聞いて来るが、Ryoは俯いたまま答えない。

ユウキ? 「・・・そう・・・なんだね・・・」

Ryoが頷くとユウキは話し始めた。

ユウキ? 「・・・Ryoはコハルに“何でもない”って言われたんだよね?」

突然、ユウキが言い当ててきたので驚いた。

Ryo? 「うん、そうだよ・・・それに気にならない訳がない」

ユウキ? 「うん、確かにそうだね・・・」

と、ユウキが少し考えた後、Ryoの方へメッセージの通知がきた。

Ryoはメッセージウィンドウを開いてみる。メッセージの内容はギルドへの勧誘

で、送信したのは「Cookie」というプレイヤーらしい。

Ryo? 「どうして、メッセージが勧誘のメッセージが・・・」

と考えていたら人影が突然、ユウキの後ろに現れたのでユウキは驚いている。

????? 「Ryo君、久しぶり! 暫く会わないうちに変わったね?」

Ryo? 「そんなことはないですよ、1層と4層の時はありますがとうございました。」

その後、2人はCookieさんと色々なことを話しながら進む。

15層——精神の心界・佞悪醜穢の廃城——

ユウキ「・・・迷宮区まで来ちゃったなあ」

Ryo? 「このまま、突っ込むか?」

ユウキ? 「良いね! それ!」

Cookie? 「うくん、流石にこの人数では無理だと思うよ?」

と盛り上がっている二人にCookieさんが指摘する。

Ryo? 「大丈夫、ちゃんとモーションを見極めればこの人数でも十分いける!」

ユウキ? 「そうだね!」

そして、中に入って強雑魚を倒しながら、ボス部屋へ進むがボス部屋の前には五人の男女がいた。

ユウキ? 「ねえ、お兄さん達」

とユウキが金髪のロングヘアの男に声をかけると上機嫌な様子で返事をしたが、ユウキの「ボスに挑みたい」という一言で態度が変わった。

金髪の男? 「えっ? wなんだって? w」

紫のロングヘアの女? 「鳴神くんw、あからさますぎーw」

マツシユカットの男? 「そうだねw二人もそう思わないかい?」

紫のセミロングの女? 「・・・」

セミロングの女? 「・・・」

ロングヘアの女? 「ww二人とも反応なさ過ぎww」

金髪の男? 「・・・で? 何、粹ってんの? 『病人』のくせにさあ!?!知ってんだぜ?お前が元々、身体が弱かったことをよお?なのになににさあ?小4の時に学校で急にぶつ倒れて、それから病院で寝たきりになったもんなwwwそうなるくらいなら、『学校来んな』って話だわww」

そう言つて金髪の男が高笑いするとRyoが一瞬で男の前に移動して一言・・・

Ryo? 「〃オイ〃」

当然、男は首を突つ込まれたことにキレたが・・・

金髪? 「ああっつ!何sy・・・」

男が言い終わる前にRyoは裏拳で男を壁へ吹き飛ばした。

Ryo? 「・・・何が『病人』だあ? 何が『学校来んな』だあ? ユウキはっ! 俺にとつては師匠なんだよっ!」  
 〓

術〓や〓精神の強さ〓は他の誰よりもずば抜けてる! てめえらみてえな奴がユウキを馬鹿にすんじゃないやねえっ!!」

Ryoが言い終わるとメンバーは気絶した金髪のを連れて転移結晶で移動した。

ユウキ? 「ごめんね? ボクのせいで」

Ryo? 「ユウキのせいじゃないから、大丈夫・・・あーごめん、少しだけ良い?」

Ryoはユウキにじっとして貰えるように頼むとユウキは頷いた。Ryoは一枚の紙をユウキに翳し、何かを唱え始める。すると眩い光がユウキを包み込み、Ryoが唱え終わると光は徐々に弱まって消えていった。

Cookie? 「凄いな! 今のは何だったの?」

Ryo? 「ユウキが〓現実世界に帰還した後も〓健康に過ごせる〓ように術を掛けた。」

ユウキ? 「・・・ほ・・・ほんとに?・・・」

Ryo? 「ほんとだ、さっきのユウキを包み込んだ光が何よりの証拠だつて言つても証拠にならないか」

その時、後ろから40人くらいの人達がやって来た。ALS とDKB だ。

キバオウ? 「自分ら! どういうつもりや!」

Ryo? 「どういうつもりって・・・」

ユウキ? 「ボスを倒しに来たけど?」

キバオウ? 「なっ! 自分ら! それがどういうつもりか分かってんのか!」

ユウキ? 「・・・分かってるよ・・・」

キバオウ? 「だったら、さっさとどかんかいつつ!」

ユウキ? 「・・・つまり、おじさんはそこを退く気はないってことだよね?」

とユウキがキバオウに言う

???? 「そんなの当たり前じゃないかつつ!」

DKBのリーダー、リンドが答える。

ユウキ? 「そっか、おじさんはともかくそっちのお兄さんも退く気はないんだね・・・」

ユウキはそこまで言うのと背中 of 剣を抜き放ち、そして

ユウキ? 「それじゃあ、仕方ないね——『戦おう』」

ユウキがそう言った瞬間、周りがざわついた。

だが、そんな状況の中でユウキはRyoに言った。

ユウキ? 「——ねえRyo、『ぶつからなきゃ伝わらないことだってある』よ。今回

みたいになさ、お互いの意見が合わない時や別のことで色々なことで揉めることだってあ



る・・・だからこそ『自分がどういう気持ちでいるのか？自分がどれだけ、本気なのか？』っていうことを本人にぶつけないといけないんだ。」

『ぶつからなきゃ伝わらないことだってある』つか・・・そうだよな、僕は現実でも妄想でも変わらない——相手の顔色ばかり見て、自分の本当の気持ちと逆のことを言ってる『嘘をついた』・・・結局、その癖は何も変わってなかったんだ。

Ryo? 「(だつたらっ！変わる努力をするんだ！今からでも、遅くはないっ！)・・・あんたらが原因だろ・・・」

リンド? 「何だと?」

キバオウ? 「一層の時からそういう所は変わってないんやな、はっきり言えや!この、小心者っ!」

キバオウの言葉を聞いてCookieさんが口を開こうとするが、それをユウキが止める。

Ryo? 「っつ!だつたら、言つてやるよっ!あんたらのそのくだらねえ気持ちがあるが困だつっの!」

当然、ギルドメンバーがキレるが関係ない。

「うっせえっ!黙れっ!何が『他のギルドに先を越されたくない』だあ!?!『今のギルドじゃあやっつて行けない』だあ?!?挙げ句の果てに『何も変わってない?小心者!?!?てめえ

らみてえな奴に言われても、なんとも思わねえよ！」

Ryoがそこまで言うとは

メンバー？「調子乗んな、ガキいつ！」

ギルドメンバーの一人が武器で襲いかかったが、Ryoは一瞬でメンバーの背中へ回り込むと言葉を続けた。

Ryo？「リーダーさんよ？あんたら、『KOBのリーダーの方がマシだ』なんて言われてんだぞ？2大ギルドが揃いも揃って一体、何やってんだ!?何の為に存在してんだ!?そんなんだから、いつまでたつてもあんたらを信頼できないんだよっ！」

Ryoが言い終わると襲いかかった数十人のギルドメンバーが床に倒れていたが、Ryoはリンドとキバオウに謝り、リンド達もRyo達やギルドメンバー達に謝った。

その後、街に戻って攻略会議をした。

ユウキ？「まさか、本当に戦わずに済むなんて思わなかったよ。」

Cookie？「あの時のRyo君、なんだか怖かったよ・・・」

Ryo？「なんか、ごめん・・・」

ユウキ？「謝る必要はないよ、だってちゃんと『本当の気持ち』を伝える事が出来たじゃないか！」

攻略会議が終わった後、ユウキとCookieさんと話しているとコハルがRyoに

声をかけて来た。

コハル? 「今まで、どこに居たの? 心配したんだよ!」

Ryo? 「ごめんね、迷宮区に……」

コハル? 「……いつも、無理して……」

コハルがそこまで言うとうとRyoは「ボス戦が終わったら話があるから、だから絶対にボスを倒して生き残ろう!」とコハルに言った。

その後、迷宮区のボス部屋の前にALSとDKB、キリトやアスナ、Cookieさん達と向かい、最終確認をした。

キリト? 「今回のボスは「クラーケン・ザ・デッドアイ」だ。触手の攻撃は一見、シンプルに見えるけど喰らえば、スタンか麻痺のデバフがかかる。後は広範囲攻撃にも十分注意してくれ。」

キバオウ? 「そんだけ情報があれば十分やつつ! ALS、突撃っ!」

リンド? 「DKBも続け!」

ボス部屋へ入ると黒くしたダイオウイカをそのまま巨大化させた感じのボスが深紅の一つ目を開き、ボ中央に佇んでいる。

それから、10分後——ようやくボスのHPが半分を切った時、なんとボスが無数に分裂したのだ。

Ryo? 「つつ! くつつ!」

しかも、一体の強さはさっきのボスと同じで立ち回り方も同じだ。

Ryo? 「何か・・・打開策は・・・」

Ryoは斧で分身にダメージを与えるが、ボスの被弾ダメージでRyoのHPは徐々に減っていき、ついに危険域のレッドになる。距離をとる為、装備を弓に変えて『アース・ステイツチ』を射った。

すると突如、ボスの分身が消えたのだ。

Ryo「つつ! (そういうことか!) 皆、ちよつといいか? 奴の弱点は眼だ! クリティカル効果のスキルをそこに叩き込んでっ!」

Ryoは少し考えた後、気付いたことを声を張り上げて全員に伝えると装備を剣に変えて『レイジ・スパイク』のモーションをとるとコハルがRyoに駆け寄る。

コハル? 「・・・私も行くつつ!」

コハルはそこまで言う『シューティング・スター』のモーションをとった。

そして、二人の一閃がボスのHPを削り切るとボスはポリゴンとなって、四散した。

Ryoはコハルの表情を見て、コハルに言った。

Ryo? 「コハル、『ボス戦が終わったら話があるから』って言ったけどそれをなしにしたい・・・俺はコハルを疑ってたけど、やっぱり「信じたい」から」

コハル? 「ううん、大丈夫だよ? …ええっ! じゃあ、今まで私のこと信じてなかったってこと!?! そんなの酷すぎだよ!!」

Ryo? 「いや、今までつて訳じゃないけどさ… ああ〜っ! ごめんっ!」

コハル? 「ふふっ! 良いよ! 期間限定のケーキを奢るつてことで許してあげる!」

その後… ——— 14層のケーキ屋で ———

コハル? 「んー、おいしく」

Ryo? 「それは良かった…」

幸せそうにケーキを食べているコハルの前でRyoはカフェオレモドキのドリンクを啜る。

コハル? 「ねえ、Ryo? 宿の話だけどね? その… 別々だと、お金が勿体ないからさ…」

と頬を赤らめて、コハルはRyoに伝えようとする。

Ryo? 「ほんとは不本意だけど、『信頼できるパートナー』が言うなら「同じ宿」にしようか…」

Ryoはコハルの言おうとしていることを察するとそう言葉を返す。

すると、コハルは満面の笑みでRyoに言った。

コハル? 「ありがとう、Ryo! これからも宜しくね?」

因みにコハルの満面の笑みを見たRyohは暫く、コハルの顔を見ることが出来なかったそうだ。

——とあるギルドホーム——

左に8人、右に9人、そして奥にいる白髪の男が長机を囲んでいる長椅子に座っている。

そして、白髪の男の後ろに掛かっている旗は深紅の炎に交差する2つの剣というデザインだ。

静まり返った空間に白髪の男の声が響く。

白髪の男? 「今回、ここに集まってもらったのは『薔薇の聖騎士「ローズ・オブ・パラディン」』と『笑う棺「ラフィン・コフィン」』そして、『呪物』についてだ。」

今、ここにいるメンバーは『呪祓師』のトップと幹部、前衛、そして最高戦力の計18人だ。

呪祓師のトップこと『「掟戒聖騎士」・「源道 勝」』

呪祓師の五大幹部こと『「五大騎神」・「美剣 沙華」、「火野 那谷」、「比野 守

」、「泊谷 渡」、「宝城 拓也」』

呪祓師の前衛の最高戦力こと『「四大騎師」・「清水 美月」、「加藤 春華」、「黒崎

影次」、「河村 怜」』

呪祓師の前衛こと『十二師』美川 花音”、加野 深雪”、清水 美月”、  
 加藤 春華”、神川 美羽”、結城 飛鳥”、藤堂 翔”、宝城 陽太”、黒崎  
 影次”、河村 怜”、村田 祥也”、平井 武瑠”、水沢 泉都”

そして、会議が終わった時には次のように決まった。

「今後の行動としては」

・呪物祓いをしながら”ラフィン・コフィン”と”ローズ・オブ・パラディン”のメ  
 ンバーについてももう少し調べるといふ事。

・もしも上記のメンバーを見つけた場合、可能であれば『捕縛』する事。

だが、コハルは疎か、誰一人として知らない・・・

この先に想像を絶することが待ってることを――

## 第3話 最凶のオレンジ 《殺人者》と怨恨の殲滅者

—— 20層 残照の森 ——

行方不明となったリンドを探していたRyo、コハル、深雪はALSのタンク、リー  
テンに案内をしてもらいクエストダンジョンへたどり着く。

そして、ダンジョンへ入ってボス部屋へ向かう道中に月夜の黒猫団のサチと会った。

サチ? 「Ryo!」

Ryo? 「うおっ! ってサチか?」

サチ? 「驚かせてごめんね? でも、なんでRyo達がここにいるの?」

深雪? 「リンドさんって人を助けに来たんです。この先のボス部屋にいるんですけど」

コハル? 「でも全然、ボス部屋が見当たらないの」

Ryo達はサチの後ろにいたダツカー、テツオ、ササマル、ケイタに事情を話すとサ  
チ達は20層の探索中で見つけた安全地帯でクエストを受けたらボス部屋の前まで来  
れたということを教えてくれた。

Ryo? 「うっそお!?マジか!」



Ryoはそう言いながら、打開策がないかを考えたその時、深雪は思い出したかのよう  
うにRyoとコハルへ言う。

深雪? 「実は清水先輩からメッセージが来ていて、サチさんの言つてたクエストが大  
体終わっているそうなんです。」

Ryo? 「マジか!？」

深雪? 「はいっ!ですから、清水先輩が待つてるひだまりの森まで急ぎましょう!」

Ryo? 「そうだな!サチっ!ありがとうっ!」

コハル? 「分かった!それじゃ、私達はもう行くけどサチ達はどうするの?」

サチ? 「私達はもう少し、このダンジョンを探索したら下層に戻るよ」

そして、サチ達と別れたRyo達は急いでダンジョンを出たがそこへフードの男が立  
ちはだかる。

???? 「それは 困る な」

Ryo? 「(エストック使いの“ザザ”か!今回は槍を装備してるけど・・・)」

深雪? 「それは“ALS内部の過激派がDKBのリーダーを嵌める為に嘘の情報を伝  
えてこのダンジョンに閉じ込めた”ってことがバレるから困るんですか?」

ザザ? 「察し がいい な それに 中々 いい 武器 持つてる な」

Ryo? 「深雪、コハルを頼む・・・」

深雪? 「分かりました。」

Ryoは深雪へ指示をするとコハルと深雪を庇うように立ち、剣を構える。

コハル? 「Ryo・・・?まさかこの人・・・」

Ryo? 「そう、奴は『オレンジプレイヤー』だ。」

コハル? 「・・・!」

深雪? 「コハルさん、大丈夫です。先輩ならきつと・・・」

そしてRyoは一瞬でザザとの距離を詰めて袈裟斬りを仕掛けるが、槍で防がれる。

だが、すぐに低い姿勢からの横一線に左上の斬り上げと連続で攻撃してザザを追い詰める。

ザザ? 「・・・! やはり 刺突武器 エストック に 限る な 槍も 悪くは

ない が 不慣れ な 武器 は いきなり 使う ものでは ない な」

コハル? 「このまま行けば・・・」

深雪? 「先輩っっ!」

Ryo? 「深雪っっ!」

突如、茂みから現れた黒い影がRyoの方へ向かうがコハルの所から一瞬でRyoの所へ移動した深雪は間一髪でRyoを抱きしめ、右へ転がって回避した。

Ryo? 「ありがと、深雪・・・」

だが、周囲の茂みから現れたフードの男はナイフでコハルを斬りつけた。

コハル? 「・・・え? きやつ・・・!」

Ryo? 「コハルつつ!」

コハル? 「だ・・・大丈夫! ちよつとかすつただけだから」

とコハルが言った瞬間・・・

コハル? 「つ!・・・なに・・・これ・・・身体・・・が」

突然、コハルが地面に倒れた。

Ryo? 「麻痺毒かつ! (つつ! じゃあ、こいつが 毒武器使いのジョニー・ブラック

“ ということかつ! )」

ジョニー? 「正っ解ー!」

Ryo? 「・・・つつ! 深雪つ! 早まるな!」

深雪? 「くつ! あああつつ! (私のせいだつ! 私がコハルさんから離れなければつ!」

自己嫌悪に陥つた深雪はRyoの静止を聞かず、呪転装の華草風麗でジョニーへ攻撃

する。

ジョニー? 「おいおい? どうしたんだ?」

だが、すれ違い様にジョニーのカウンターを喰らつてしまい、麻痺状態で動けなく

なつてしまった。

Ryo? 「・・・四獣之加護」「反転之呪イ」つつ!!」

するとRyoは漆黒のオーラを纏い、紫色の雷を放電させる。

ジョニー? 「フツ、フツ、フハハッ! いいねえ? やってみるよ?」

ジョニーがそういうと同時に茂みから30人近いオレンジプレイヤーが出てきた。

Ryo? 「あああつつ!!!(もう、どうでもいいつつ! 身体の負荷がなんだつ! せめてつ

!コハルだけはつつ!)」

Ryoは一斉に襲いかかるオレンジプレイヤーを躲し、その隙を突いて呪力の波動を撃ち込むと一瞬で背後へまわり込み、剣で斬るということをひたすら続けた。

ジョニー「はい、注目! こつからゲームモード変更な? 今まではVSモードだったけどよ? 今からプラクティスモードに変更だぜ!」

ジョニーの言葉を見殺し、呪力を纏った剣で斬りかかろうと一瞬で距離を詰めたその

時――

ジョニー? 「つつ! こういうこつたよっ!」

コハル? 「いや・・・やめて・・・!」

ジョニーは動けないコハルを立たせるとコハルの首にナイフを当てた。

Ryo? 「つつ! くつそつ!」

Ryoは咄嗟に剣を止めた。

劍圧でコハルの髪がなびく。

ジョニー? 「はい、スタンドアップしようか? 動くなよ? この子の首をカットっちゃうからさ?」

ジョニー? 「一応言っとくけどよ? 少しでも変なまねしたら分かっているよな?」

Ryōの視界の前にはナイフを当てられたコハルがその右にはザザに槍の穂を首に当てられた深雪がいた。

Ryō? 「つつ! 深雪つ! くつそつ!!」

そう言つて、Ryōは劍を投げ捨てた。

ジョニーはコハルを他のオレンジプレイヤーへ突き飛ばすとナイフをストレージへしまい、Ryōの方へ歩み始めた。

ジョニー? 「いいねえ? 分かつてんじゃない? ああ! そうそう! 俺さあ? RPGも好きだけど、格ゲーも好きなんだよお?」

とRyōの前で止まった瞬間、ジョニーはRyōの腹へ拳を打ち込むとさらに言葉を続けた。

ジョニー? 「こんな感じで、グーパン作つてテイクバックつと、確か『閃打』つて言つたつけ? シャーっ! 光つたぜ! なあ? これ言つてみたかつたんだよ、『歯あ、食いしばれ』つつ!」

コハル? 「Ryo!」

深雪? 「先輩つつ!」

だが、彼女達の叫びを無視してジョニーは抵抗出来ないRyoへ一撃、また一撃と拳を叩き込む。

だが、Ryoは“代償”で動けず、既にあばらが何本か折れて、そのうちの一本が肺に食い込んだことで攻撃を喰らう度に血を吐き出した為、瀕死になっていた。

深雪? 「やめて・・・! やめてよお! こんな・・・ない・・・よ」

コハル? 「もういいよ・・・! Ryo!・・・私のことはいいから! そんな相手・・・本当なら苦戦なんてしないでしょ!・・・だから・・・お願い・・・たたか・・・」

深雪? 「もうつつ! 先輩はつつ! 無理・・・なんです!・・・術を使った時から・・・ポロボロだったん・・・です・・・よ・・・?」

コハル? 「つつ! それでもつつ! 嫌だよ!・・・私のせいでRyoが死んじゃうなんて嫌・・・そんなの・・・嫌だよ・・・」

——精神の心壊殿——

Ryo? 「・・・ここは?」

Ryoが目を覚ますとそこは奥にある洞窟への道、緋色の地面に果てしなく広がる紫色の空間の場所にいた。

「よお？あの時以来だなあ？」

突然、目の前の洞窟から声がしたが

「呪天皇だ、覚えているか？」

突然、右側から声がする。

Ryo? 「呪天皇・・・！あの時、倒したはずがっ！なんで！」

呪天皇『お前が俺に止めをさした時にお前が俺の血を浴びたからな？血にも俺の力がある、だから、今こうして生きている訳だ？俺は、急所に攻撃を喰らっても血を介してこの通り、生き続けることが出来るんだよ』

とRyoへ説明した後、呪天皇はこう言った。

呪天皇? 『コハルって奴を助けたいか?』

Ryo? 「・・・nの・助k(いや、待てよ?そもそも軽犯罪を4つもやらかしてその事が大事にされずに生きた奴が誰にも必要とされず、今まで嫌われてきた俺が助けた所でコハルが喜ぶのか!?必要としてくれるのか?見捨てられないのか?・・・)」

Ryoが悶々と考えていたその時、頬に痛みがきた。

呪天皇? 『もう一度だけ聞く・・・お前はコハルって奴を助けたいか?』

Ryo? 「——助けたいっつ！」

Ryoがそう言う

呪天皇？『面白い・・・但し、条件がある。俺が“身転”と唱えたら俺と入れ替わることその間の1分間は誰も殺さないと誓おう』

呪天皇がそう言った。

Ryo？「ちよつと待ってっつ！それじゃ、その後にコハルはどうなる!?それにコハルは自分が死ぬことや誰かが死ぬことは望まない！」

呪天皇？『なら、こうするか？今から戦って俺に勝てばお前と入れ替わっている時は誰も殺さないっていうことにする』

Ryo？「わかった」

Ryoはそう言うのと呪天皇へ歩き出して右手に剣を具現化させる。そして――

呪天皇？『っつ！まさかっ！』

呪天皇が気付いた時には既に遅く、目の前で剣を放し、両手をパンツ！と叩くとすぐに足払いを仕掛けて・・・呪天皇の首にナイフを当てた。

Ryo？「良いかな？」

Ryoの声で我に返った呪天皇は渋々、頷いた。

呪天皇？『約束は約束だ・・・誰も殺さない・・・んじゃ、始めるぞ』

呪天皇はそう言った後、“身転”と唱えた。

――20層 残照の森 ダンジョン前――





コハル? 「えっ?」

呪天皇? 『だつてよ? ついさつきまで怖い思いしていたのにも関わらず、コハル…: つて言つたな? コハルの後ろにいる女が震えてんに動じた様子がねえからなあ? ああ、ちなみにコハルのパートナーとさつき契約した所だからな? 何、ちゃんと戻るから…』  
 一 座り込んでいる深雪と呆然と立ち尽くすジヨニーとザザ以外のオレンジプレイヤー達が一斉に襲いかかるが

—— 『反転之呪イ「血触殲壊」』 ——

一瞬でポリゴンではなく、無数の肉片に変えた。

呪天皇? (やべえな、加減を間違つて殺しちゃったよ… 殺さないつていうことなのになあ? こうするか?)

コハル? 「R y o っつ!」

呪天皇? 『ちっ! 面倒臭くなる前に… 「反転之呪イ」 // 呪転浄快』

呪天皇が唱えた瞬間、時間が巻き戻されるかの如く、肉片となったオレンジプレイヤーが元に戻る。

コハル? 「… R y o? 大丈夫?」

呪天皇? 『大丈夫? つて、身転でR y oと入れ替わったんだよ! その間、誰も殺さないつてことも約束した上でな?』

コハル? 「そうなんだ・・・って、ええっ!」

因みに呪天皇とコハルが話し終わる頃にはオレンジプレイヤー達とジョニーとザザは逃亡したらしい。

—— 20層 迷宮区 ボス部屋前 ——

その後Ryoは無事に戻り、リンドを助けて今はALS、DKBとキリトからボスの情報と立ち回り方の説明を受けた所だ。

コハル? 「ここの攻略も大詰めだね」

Ryo? 「さっさと倒して次、行こ? (もう、しんどいしな?)」

コハル? 「うん! もちろんだよ! (Ryo・・・あなたは私が守るから)」

—— ボス討伐後 ——

ボスをALSとDKBとそしてキリト達と協力して倒し、暫く賑やかになった後、それぞれ解散してコハルとRyoだけになった時、コハルが

コハル? 「良かった・・・ホントに・・・良かった・・・Ryoが無事で」

と涙ぐみながら言った。

因みに周りが賑やかになった時からコハルはRyoの手をぎゅつと掴んだまま離さなかった。

コハル? 「・・・私・・・今回も・・・また守られてばかりだった・・・」

Ryo? 「・・・そんなことない、コハルh・・・」

声を震わせながら言うコハルにRyoがそう言った時

コハル? 「私はっ! あなたにっ! いっつもっ守られてばかりだよっ! だっつて! きっつき、オレンジプレイヤーに襲われた時になにもできなかつたっつ!」

とコハルは声を荒げて言う

コハル? 「・・・もう・・・嫌だよ・・・あなたが・・・死ぬなんて・・・どこか・・・遠くに・・・いつぢやうなんて・・・」

コハルは嗚咽しながら言い切った後、遂に泣いてしまった。

Ryo? 「・・・僕はコハルを置いて行かない・・・絶対につっ!」

コハルが泣き止んだ後、Ryoはコハルへそう言った。

コハル? 「・・・守るよ・・・今度は絶対に私が守るから」

Ryo? 「(やつぱり、こうなるかあ(???)・・・)」

・・・もう、無理だわ」

するとRyoは剣を抜き、切っ先をコハルへ向けた。

コハル? 「えっ? どういう意味?」

Ryoは剣を抜くときよんとしているコハルへ怒鳴った。

Ryo? あんたさあ? なんなの? 何が、『私はあなたのパートナー』だあ!?! ふぎけん

！あんたは俺の気持ちがあ分かってない。

コハル？「・・・ってないのは・・・わかってないのはどっちなのっ!?」  
とコハルは激昂し、レイピアを抜いてRyoへと突っ込んだ。

## 第4話 不信の呪祓師、少女との約束

——20層 ボス部屋（ボス討伐済み）——

Ryo? 「じゃあっ!」

Ryoはコハルへ一瞬で距離を詰めるとコハルの左脇腹に手を置いた。

Ryo? 「・・・言ってみろよっつ!!!」

すると、Ryoの手から放出された波動はコハルを包み込むと同時にボス部屋の壁に直撃し、めり込んだ。

コハル? 「っつ!ごはあっ!（何・・・これ・・・血?）」

Ryoは話ながら、倒れているコハルの方へ歩み寄った。

Ryo? 「あなたは自分に『否がある』ってだけで人気がない所で事実か分からんことを言われたことはある? 罵声雑言を浴びせられたことはある? 自分が否定しているのに・・・教師と相手に・・・『濡れ衣』・・・きせられたごどがあ・・・あるのがよ・・・」  
倒れているコハルの前で膝から崩れ落ちる音がしたため、コハルは顔を上げた・・・その瞬間、息を飲んだ。Ryoが『泣いていた』からだ。

コハルにしたことに対する罪悪感から

自分への怒りや悔しさから

相手への憎しみから

Ryo? 「コハル・・・ごめんな・・・ざい・・・ぼくは

・・・」

すると、コハルはRyoの頭へ手を置くとゆつくりと話した。

コハル? 「ううん・・・私もごめんなさい・・・あなたの言う通り、私はあなたのことがかたつてなかつた。あなたに迷惑を掛けたくないって・・・そのことで頭の中がいつばいで、あなたと向き合うことがなかつた・・・」

とコハルが言いかけてRyoが『迷惑なんかじゃない』と言おうとした時だった。

コハルの身体から緑色の電気が放電し、Ryoは後ろへ吹き飛ばされた・・・と思いきや、Ryoの顔の左右に赤い刻印が浮かんでいた。

Ryo? 『・・・つたく! Ryoって奴はこんだけの呪力をよく溜め込んでんな? んで、いきなりなんだ? “西天魔”?』

コハル? 『お久しぶりです・・・あの時以来ですわ・・・貴方と会うのは・・・“呪天皇” つつ!』

コハルの姿をした西天魔の顔には緑色の刻印があった。

呪天皇? 『はああ・・・良いからとつとつ、そいつの身体から出ていけつつ! “西

天魔「つつ！」

すると呪天皇は槍を手元に実体化させると西天魔に攻撃を仕掛けた。

呪天皇？ 『らあああつつ！』

西天魔？ 『つつ！調子に乗るなあつつ！』

と西天魔は間一髪、呪天皇の槍の軌道をレイピアでずらすと同時に呪天皇へ猛攻を仕掛ける。

西天魔？ 『貴方ごときn・・・つつ！なん・・・で？がああああつつ!!!このつつ！』

突如、西天魔は突然、発狂し始めた。

呪天皇？ 『・・・(？)・・・まさか・・・まだ意識が残っているとは・・・Ryoのことをここまで思っているとは

な・・・)なるほどなあ・・・お前は俺への憎悪一点だが、俺が憑依しているこいつとお前が憑依しているそいつの関係は思った以上らしいなあ？』

西天魔？ 『あああああつつ!!くそつつ!!くっそおあああつつ!!!』

コハルの身体に負荷が掛かりすぎて、毛穴という毛穴からさらには目からも血が出ている。だが、そんなことはお構い無しに西天魔は呪天皇へレイピアを心臓へ——届かなかった。

呪天皇？ 『「身転つつ！」なつつ!!Ryo!』



呪天皇と入れ替わるのが早いかRyoは西魔天の背後に移動し、素早く後ろ手にすると一瞬で床へ移動して手を放して、距離を取る。

Ryo? 「僕につっ! やらせて下さいっ! これは僕とコハルの問題なんですっ!  
『気炎万丈』っ!」

すると、Ryoは燃え盛る炎の如き呪力を纏った。

西魔天は嘲笑した後、レイピアを投げ捨て、コハルの身体を瞬時に全快させるとRyoへ距離を詰めた。

西魔天? 『お前が!? あたしにつっ! 勝てるっても!?!』

そして西天魔の一撃がRyoの左脇腹へ炸裂。Ryoはボス部屋の壁に吹き飛ばされ、呪力も解けてしまう。

Ryo? 「っっ! げほおあ!! (コハルの今までのスピードもあるせいで、攻撃が全く見えない・・・それにレイピアを放したからなのか、一撃も重いっっ!)」

西魔天はRyoがボス部屋の壁にめり込んだのにも関わらず、何度もボコボコにする。

すると西魔天はコハルの声で『こう言った』。

西魔天? 『ねえ、Ryo? 貴方はどう思う? —— 「今まで、貴方が私に対してやった『セクハラ』のことについて・・・』 ——』

Ryo? 「・・・かい・・・ってみろ・・・」

西魔天? 『ん? どうして・・・』

Ryo? 「何て言ったんだって聞いてんだあつつつ!」

とRyoは声を荒げると「気炎万丈」を発動させるが速いか、すぐさま西魔天の胸のすぐ下に呪転波を打ち込み、吹き飛ばすと瞬時に距離を詰めて追い討ちをかける。

西魔天? 『げほおあ!!ごほつ!げほつ! (このガキつつ!ついさつきと様子が!?)そんな!・・・攻撃や移動する時の速さ、威力、そして呪力の濃さが呪天皇やあたしよりも段違いなんて・・・』

Ryo? 「どうしたっ!!煽るだけ煽って、その程度かあつつつ!」

今度は西魔天が追い詰められるばんだった。

西魔天? 『こつ小癩なあ・・・がっはつつ!!!』

Ryoが一撃を放った瞬間、無数の波動が神速の如く直撃する。

Ryo? 「まだ・・・終わりじゃねえ・・・」

だが、Ryoは止まらない・・・一撃が当たるごとにコハルの全身の骨が砕け、内臓はぐしゃぐしゃになる。西魔天がその度に全快させるが、Ryoが3発目を打ち込んだ時には西魔天は体力と呪力を激しく消耗していた。

Ryo? 「次っ!次っ!次いつ!どうしたっ!」

西天魔? 『くっ! そっ! こんっ! ガクっ!! (クソっ! クソクソクソクソっ! こんなガキ風情にっ!)』

遂に西天魔は膝を付き、うつ伏せに倒れた。

Ryoはそんな西天魔を見下しながら、歩み寄る。

Ryo? 「・・・(こいつみたいなのは奴は実際にいた。ある時に先輩と話していた時に先輩が話の中で『付き合ってる人がいる』って言ったことをセンコーに『自分のこと、どう思っているの?』と言われた』と『自分に付き合ってるの?』と言われた』と告げ口してっ! センコーもセンコーで俺の言い分を聞かないっ! 前者は実際にそうだけど、後者は違う! なのに・・・ああ・・・何でだ・・・やっぱり、誰も信用出来ない・・・」  
誰一人「っ!」 ああああっ!

そして身動きが取れない西天魔に止めを刺そうとした時、

???'「Ryo?」

突然、聞き馴染みのある声が脳内に響いた・・・そう、『コハル』だ。

Ryoは堪らず、剣を落として頭を抱えて膝から崩れて踞った。

コハル? 「今ね? あなたの記憶が流れ込んだの・・・お陰で頭が凄く痛いけどね?

・・・Ryo、あなたの今までの記憶を見てね? やっちやいけないことをしていたこと、その中のことがきっかけて辛い思いをして孤立していたこともさつき、記憶が流れ

込んだ時に知ったの……

私はその記憶を見て思ったことがあったんだけど聞いてくれる？」

Ryo? 「……」

コハルがRyoへ話しかけるがRyoはあまりの激痛で言葉を発することが出来なかった。

それでも、コハルは話を続けた。

コハル? 「まず、『どんな理由があっても、“犯罪”はやつちやダメっ!』ってことでね?

あなたがどんなことをやったかはさつき、知ったけどね?

正直、驚いてるの。あなたが「そんなことをしていたんだ」ってね?

でもね? だからといって今更、あなたを責めることなんてしないよ?

だって、この世界に閉じ込められた時からあなたは私を引っ張ってくれて、いつも私を守ってくれた。

だから、私はそんなあなたを今のあなたを私は信じているから

だから、この世界で何かあっても思い止まって?

もしも、あなたが思いとどまることが出来なくなった時は私があなたを止めるからっつ!

でも、きつとRyoなら出来るって私は信じてるからね？

それとあなたが悪口を言っていたことで後から辛い思いをしたことだけどね？

確かに、悪口を言っていたあなたが悪いけれど、あなたがそのことを改善しようとする力してたこと

他の人と関わろうとする度に散々なことを言われて、さらに辛い思いをしたこと

そのことがあって、あなたは色々と耐えてきたけどそのせいで、あなたは周りの人を自分を信じてることが出来なくなった……だからっ……！もう良いよ……？もう……無理に……心を……閉ざさなくても……だから、約束して？無理はしないって！

私は『あなたのパートナー』だから！』

刹那、コハルの身体から西天魔が弾き出される。

西天魔？ 『つくっそっ！』

西天魔はそのまま吹き飛び、ボス部屋の壁にめり込んだ。

コハルがゆつくりと起き上がり、両手でRyoの手を包み込んだその時——

Ryo？ 「……ほんとに……良いのか……？……こん……な……俺……を……信じて……くれ……る……のか？」

Ryoが顔上げ、嗚咽を交えながらコハルへ言う。

コハル？ 「……もちろんだよ？言っただでしょ？私は『あなたのパートナー』だからっ

て?」

コハルがRyoへそう伝えた瞬間だ

西天魔? 『がああつつ! …ガキが…よくもつつ!』

コハルとRyoへ距離を詰めた西天魔の鋭い爪が迫る。

コハル? 「Ryo!」

その時、コハルの背中から6枚の黄緑色の大きな翼が生え、2人を包み込むようにして攻撃から守ると西天魔を弾き飛ばした。

そしてコハルの前に現れた黄緑色の大きな6枚の翼を持つ11歳くらいの女の子とRyoと同じ身体を持ち、顔の両側に赤色の刻印がある男がいた。

コハル? 「えつと…?」

浄天? 『コハルさん、私は“浄天”です』

呪天皇? 『…やはり、お前だったか? 浄天』

浄天? 『?…?…はい、そうですね? その刻印は生まれつき? ですか?』

と翼を持ったストレートヘアの女の子、“浄天”が刻印の男、“呪天皇”へ訪ねた—

呪天皇? 『何を言ってるんだ? …当たり前だろう?』

浄天? 『そうなんですわね!』

呪天皇？ 『1つ聞くが？ 浄天と言ったな？ そのデカイ翼が6枚ある・・・ということ  
は“大天使”なのか？』

浄天？ 『はい！ 呪天皇さんのいう通りですよ？』

呪天皇？ 『・・・あと、何故？ さん付けなんだ？』

浄天？ 『へっ？ 何で・・・って、もう会ってるはずですよ？ 少なくともコハルさんと  
Ryoさんが出会った時に』

呪天皇？ 『うーん、今まで会った覚えはない。そもそもだ。そんなに親しい訳でもな  
ければ、初めてここに立って話しているだろう？』

浄天？ 『・・・むううー！！ 酷いですよっっ！』

呪天皇？ 『何がだ？』

浄天？ 『何がって？ 私は呪天皇さんと関わりたいと思ったのに、その言い方は酷くな  
いですか！』

と戦闘中なのにも関わらず、コミカルな会話をする2人を前に先ほどの雰囲気はな  
く、Ryoとコハルの目は点になる・・・が、

西天魔？ 『よくもっっ！ よくもよくもよくもよくもっっ！ てめえらといい、ガキとい  
い、あたしの邪魔をしやがってっっ！』

黒色の肌に6枚の藍色の翼、鋭利な爪を持った墮天使を思わせる姿をした、西天魔が

体を起こすと声を荒げながら、片腕を上げた。

すると次の瞬間、西天魔の前に虎やライオン、チーターにハイエナといった姿をする呪物がざっと1000体程湧いて出てくる。

コハル? 「・・・Ryo」

Ryo? 「まずいな：今まで、1000体という数を相手にしたことがないしな：」  
呪天皇? 『Ryo、それとコハルデ、アッテルノカ?、もしかしたらだが?俺と浄天の力を使えばこの状況を覆せるかもしれない』

Ryo? 「・・・その方法で行こうっつ!」

コハル? 「っつ!Ryo!・・・嫌だよ・・・わて・・・」

浄天? 『コハルさん、大丈夫ですよ?今まであなたを災いから守ってきたのは私です。今は彼を信じて下さい!』

コハル? 「・・・分かりました」

浄天? 『コハルさん、ありがとう』

Ryo? 「準備はいいか?コハルっ!」

コハル? 「うん：大丈夫だよ!（そうだっ!こんな所で弱気になっちゃダメっ!）」

Ryo? 「了解!まず、目を閉じて意識を集中させるっつ!意識を集中させたら、”身転”と唱えるんだ!」



コハル? 「う うん! (きつと大丈夫っ! 今度こそ・・・Ryoを守る!)」

コハルが身転を成功させるまでの間、Ryoは呪転装を駆使して呪物からコハルを守るが、呪物の背後からの奇襲を受け、体制が崩れてしまい、劣勢に追い込まれてしまう。

コハル? 「・・・! 『身転化』 っつ!」

コハルが唱えた瞬間、風圧がボス部屋の所々に亀裂を生じさせる。

Ryo? 「・・・成功・・・だな・・・」

そして、満身創痍のRyoは倒れそうになったが間一髪でコハルが支える。

コハル? 「・・・Ryo!・・・無茶しないで言っただのに・・・」

Ryo? 「いのででっ!? コハルっつ! ごめんってっつ! マジで痛いっつ!」

コハル? 「っつ! ごめんなさい、大丈夫?」

Ryo? 「(大丈夫もなにもあるかよお! (#。D。)ノ) まあね?・・・さつてと! 第2ラウンドと行こうかっつ! 四獣之加護、『反転之呪イ』 っつ!」

とRyoが唱えた瞬間、漆黒のオーラに紫色の雷光が無数に迸る。

コハル? 「(あれは! オレンジプレイヤーに襲われた時のっつ!) 使っちゃダメっつ! それを使ったら・・・また・・・Ryoが」

Ryo? 「大丈夫、消耗の激しい術さえ組み込まなければ良いだけのっ! 話っ! だっつ!」

悲痛な声を上げるコハルにRyoはそう答えながら、

次々と西天魔が召喚した呪物を倒していく。

コハル? 「Ryo・・・つつ! きゃ・・・!?!」

西天魔? 『油断大敵ねえ? ふふふ、どうしてやろうかしらね?』

西天魔はRyoが呪物の相手をしている隙を突いてコハルの背後を取り、鋭利な爪で首を切り裂こうとした瞬間、コハルが消えた。

西天魔? 『つつ! 消えt・・・』

コハル? 「・・・なーんてねっ!?!」

一瞬で空中に移動したコハルが空中で1回転して脳天に体術スキル“幻月”を見舞うと西天魔の断末魔の声が響いた。

その隙を見逃さず、コハルは西天魔の心臓、目掛けてレイピアの一撃を放つと西天魔の顔を踏み台に後ろへ跳んだ。

西天魔? 『この・・・小娘・・・がっ!・・・覚えt・・・』

すると西天魔は突然、消えた。

だが、その他の呪物はRyoが全て倒していた。

——余談——

あれから、呪天皇と浄天は関わるようになって、今は14層のレストランでシリカと

食事中だ。

因みにあの出来事から呪天皇と浄天はRyoとコハルが自分達の力を使いこなせるように2人を鍛えている。

シリカ? 「あのおく? 2人は何か名前はないですか?」

浄天? 『へっ?』

呪天皇? 『要は“呪天皇”とか“浄天”とかだと戦闘の際に呼びにくいってことだろう?』

シリカ? 『そうなんですよ! 連携に困ります!』

浄天? 『だから、ここで決めようってことですか?』

呪天皇? 『その通りだ・・・シリカありがとな?・・・こっからは、俺と浄天で話し合っつて決めようと思う』

シリカ? 「はい! ありがとうございますね!」

## 第5話 竜使いの少女と呪いの殲滅者・前編

—— 35層 迷いの森 陽光の林道 ——

コハル? 「・・・クォーター・ポイントからもう10個もフロアを進んで来られたんだね」

Ryo? 「・・・コハルがいてくれたから、あの時」から犠牲者を出さずにここまで来れたんだ」

コハル? 「・・・うん、そうだね! この層も頑張ろ!? Ryo!」

Ryo? 「・・・」

コハル? 「・・・Ryo?」

その後、ALSのリーテンと再開したが彼女は浮かない表情をしていた。

それもそのはず、ALSに起きた2度の悲劇の後に「ギルドメンバーの移籍」があったものだから落ち込んでも仕方ない。

因みにALSに起きた「2度の悲劇」と移籍についてはこうだ。

まず、25層のボス戦ではリーテンを除いたALSのタンク3人がボスの攻撃を喰らって即死したこと。

次が25層で犠牲者が出た根本的な理由……

——ALSに潜入していたオレンジプレイヤー「ジョニー・ブラック」が受け持ったボスクエストの情報の一部を黙認したこと——だ。

そして35層に入った後、リーテンはALSのメンバーがスムーズに移籍が出来るようにといろんなギルドへ頼み込んだ。

理由は「オレンジプレイヤーが1層の時から潜入していたこと」

「今までの競いあいには仕組みられたものであった以上、無理をしてALSにいる必要はない」

ということだ。

そして、ALSメンバーを送り出したリーテンをコハルはレベリングへ誘い、Ryo達とレベリングの場所を探し始めた。

Ryo? 「……(くっ! さっきから呪天皇と浄天の気配がどんどん減つて)」

リーテン? 「あの? Ryoさん?」

Ryo? 「っつ!」

リーテンに声を掛けられたRyoはピクリと肩を震わせる。

Ryo? 「ごめん……(クッ! どうしてだっ! どうしてっつ! 呪天皇と浄天を何としても助けたいのに!)」

コハル? 「・・・Ryo(さつき、この層のモンスターに囲まれたときに呪天皇さんと浄天さんが私達を庇った時のことを・・・)」

そして暫く、沈黙が続く中で不意にコハルが話し始めた。

コハル? 「ところでさつきから同じ所を歩いてばかりだけど、ひよつとして? 迷ってる・・・ってことは・・・ない? よね・・・」

リーテン? 「うーん、そうかもしれないね? そもそもこの層は“迷いの森”って言われてるから」

とコハルの質問に答える。

Ryo? 「・・・(離れんようにしないとだな)」

コハル? 「・・・ねえ、Ryo」

突然、コハルがRyoへ声を掛けた。

Ryo? 「えっ? うん? どした?」

コハル? 「あの・・・さ? もし良ければ・・・だけど」

そして、Ryoへ話すうちに語尾が小さくなる。

コハル? 「えつと・・・その・・・はぐれたりしたら大変だし・・・手を・・・繋ぐ・・・とか・・・」

だが、なんとなくコハルの言おうとしていることを察したRyoは一瞬、ためらうが

意を決してコハルへ言った。

R y o? 「……んじや!手を繋ごつか!」

コハル? 「……うん!」

R y oがコハルへそういうとコハルは満面の笑みを浮かべてR y oの手を繋ごうとした時だった。

R y o? 「つつ!コハルっ!それは一旦、お預けだっ!あの所から複数の気配がするつつ!リーテンも手伝って頂けますか!」

リーテン? 「分かりました!行きましようっ!」

複数の強い気配を感じ取ったR y oはコハルとリーテンにそう伝えると気配のする方へ走り出した。

シリカ? 「……はあ……はあ……(どうしよう……次から次へと……)」

R y o? 「シリカああっ!」

シリカ? 「……R y o……さん!」

気配のする方へ着いた時にはフェザーリドラのピナとシリカがモンスターに囲まれていた。リーテンとコハルもやって来る。

R y oはレイジ・スパイクを放つが距離が届かない。

万事休すと思った時、2つの影がシリカを守るようにモンスターの集中攻撃を受け

る。

そして、影が爆発すると同時にモンスターは吹き飛んだ。

そう・・・呪天皇と浄天の『魂』がシリカとピナをモンスターの攻撃から守ったのだ

が――

Ryo? 「・・・そんな・・・そんな・・・ことって・・・」

それは呪天皇と浄天が『死んだ』ということになる。

リーテン? 「Ryoさんっ! しつかりして下さいっ! コハルさんはRyoさんとモ

ンスターの方を私はシリカさんをカバーしますからっ!」

立ち尽くすRyoへ声を掛けたリーテンはコハルに指示をするとシリカの方へ向

かった。

コハル? 「Ryo!」

Ryo? 「・・・」

コハル? 「Ryoっ! シリカちゃん達が立て直すまで・・・」

コハルがRyoへ必死に話すも声は届かず、コハルはモンスターの攻撃を徐々に劣勢

に追い込まれる。

コハル? 「つつ! くっ! えっ!」

コハルは足を滑らしてしりもちを付いた。



そして――

Ryo? 「・・・くも・・・!よくもっ!よくもよくもよくもつつ!!  
!!!あああつつ

!!

コハルへ攻撃が届くことはなかった。

Ryoは喉が張り裂ける程の声をあげるとどす黒い呪力を周囲へ放つ。

シリカ? 「Ryoさん?」

リーテン? 「・・・」

Ryo? 「コイ・・・一体ズツ、一撃で『殺シテヤル』」

Ryoのその一言でコハルと一部のモンスター以外が気を失う。

コハル? 「えっ? 一体何が? ってRyoっ! そっちは・・・」

コハルの声も聞こえていないのかRyoは瞬く間に密林の中へ移動すると消え、別の所に現れてはまた消えた。

コハル? 「速すぎて、見えない・・・うん、少しだけ見える・・・」

Ryoが気配を放った瞬間、モンスター達はRyoを追いかけたが、Ryoはそれよりも速く移動して錯乱させる。

コハル? 「・・・モンスターが追い付く寸前で消えてる・・・つつ!」

気配を感じ取ったコハルが空を見上げるとそこには、呪力を纏った剣を持つRyoが

いた。

Ryo? 「クタバレ」

そして、1ヶ所にいるモンスター達へRyoが剣を振り下ろすと衝撃波が轟音を響かせ、密林ごと地面を抉るとそこに先程のモンスター達はいなかった。

シリカやリーテンが起き上がった時、1体の毒蜂がシリカを襲う。

ピナ? 「きゆる!!」

間一髪でシリカを守ったピナはその後、力なく倒れた。

シリカ? 「ピナああっ! 嫌・・・あたしを・・・1人にしないで・・・」

ぐったりとしているピナを抱き抱えてその場で座り込み泣き崩れているシリカへ毒蜂が止めを刺そうとした。

Ryo? 「ク・・・タバ・・・レ・・・」

Ryoのレイジ・スパイクで毒蜂は倒される。

ピナ? 「・・・きゅ・・・る・・・きゅ・・・」

シリカ? 「ピナっつ! もういいよっつ! これじゃxって? Ryoさんっつ!!?」

だが、ピナが回復しようとする。しかし、Ryoも倒れてしまった。

その後、春華と影次と美月がピナとRyoを介抱している間、コハルとシリカは沙華と『右道の良薬』というクエストを進めていた。

—— 13:00頃 とある薬屋の一室 ——

Ryo? 「・・・つつ! コハルとシリカはつつ! ついつてつつ!」

Ryoがベットから勢いよく飛び起きた瞬間、Ryoの身体に激痛が走る。

美月? 「ちよつとつつ! 動かないの! でも、良かった」

春華? 「河村君つ! 良かった・・・」

影次? 「目が覚めて、良かったわあ・・・」

四大騎師の同期が安吐の声を口にする。

すると必死に身体を動かそうともがくピナへRyoはベットから立ち上がって、一歩ずつ歩くが途中で倒れてしまい、影次とベットへ戻る。

そして、影次がピナをRyoのベットへ連れようとするがピナに噛まれてしまった。

再び、Ryoがピナの所へ歩むがまた倒れてしまう。

Ryo? 「・・・ピナ、ごめんな? 僕はこの様だ」

ピナ? 「・・・きゆるる!」

だが、ピナは自力で倒れているRyoの方へ飛ぶと力尽きてRyoの膝元へ落ちる。

Ryo? 「つと! 間一髪だな・・・ピナ、どうしてそこ・・・まで・・・」

そこでRyoは目を閉じたが、ピナは何故か気持ち良さそうに目を閉じた。

春華がRyoのベットへピナとRyoを運ぶと影次は不満そうに話した。

影次? 「なんでなん? 嘯まれることしてないのに!」

美月? 「ピナは河村君のことを信じてるからね? 信じてるから “必死に守ろう” としたのかもね?」

と美月が答えると影次は絶叫し、春華は微笑む。

そして、18:00頃にコハルとシリカと沙華が帰ってきた。

Ryo? 「つつ! いったつつ!!」

メデイカ? 「なにやってんのさ! さっさと・熱つつ!」

ピナ? 「きゆるくく!!!」

Ryoを叩き起こしたメデイカへピナが炎のプレスを浴びせるが

ピナ? 「つつ! ・ ・ ・ きゆ ・ ・ ・ る ・ ・ ・」

Ryo? 「今度は倒れずに済んだな? お互いに ・ ・ ・ ピナ、ありがとう」

Ryoは空中でふらついたピナを抱えるとピナがRyoを不安そうに見上げる。

Ryo? 「ピナ、僕はもう大丈夫! だから、ここで休んでて?」

とベットにピナを寝かせたあとこう言った。

Ryo? 「ピナ、あんたが死んだらシリカは悲しむ。それだけあんたが “大切な存在

“ ということだ、シリカを “支える” 存在ということだ。だから、僕はあんたを必ず助ける!」

沙華? 「じゃあ、メデイカ先生、次の素材を教えてちよ」

そしてメデイカから説明を受けたRyo達は一旦、夕食へ向かった。

—— 35層 飲食店 ——

Ryo? 「・・・ピナ、大丈夫かな?」

シリカ? 「きつと大丈夫です! あたしのパートナーですから!」

Ryo? 「それもそっか・・・」

コハル? 「料理来たよっ!・・・ありがとうございます。」

店員? 「ごゆっくり」

Ryoとシリカがピナのことで話し終わった頃に料理が運ばれてきた。

運ばれてきた料理を食べながら、美剣先生からこれからの行動についての説明を受けた。

だが、チームの編成の話しに移ろうとした時だった。

少女? 「あのお客さま? 良かったら、こちらのお茶はいかがですか? こちらのお茶はここの名物でして、森で取れる毒消しの薬草を “ふんだんに使用” しておりますので・・・」

9歳くらいの女の子の言葉、そして差し出してきた “それ” が止めを刺したのか? 1人を除いて、全員が硬直する。

シリカ? 「あの……そのく? あたし……このお茶はちよつと……」

春華? 「確かに……」(色がね? )

美月? 「……(分からなくもないなあ? )」

影次? 「……(色もそうやけど味もキツそうやなあ? )」

Ryo? 「……匂い、ドギツそう(色もそうだし、味もドギツイ気がする)」

コハル? 「ねえ……あの子、泣きそうだよ? 」

沙華? 「なーに、薬茶も普通のお茶と変わらないさ」

美剣先生はそう言つてがぶ飲みしたが突然、机に突つ伏した。

その時に現れた和服の女の子のお陰で美剣先生以外は飲まずに済んだ。

因みに和服の女の子は「千藤 比奈」で関西支部「呪祓共同院」の生徒だ。

そして、彼女はコハルと同じ年でありながら、呪祓師の「五大騎神」と互角に渡り合

える程の実力者だ。

——35層 迷い森 月光の林道 ——

Ryo達はクエストの最終段階で必要な素材、『混獣の生き血』を手に入れた後、町へ戻る為にダンジョンを出るがそこにいたのはフード姿の集団だった。

沙華? 「ちっ! ……」

春華? 「つつ! “ラフィン・コフィン”! ?」

コハル? 「えっ?」

勝? 「そのフード姿の連中がそうだな・・・」

比奈? 「まあまあ、そんなぎよおさん居てはって大丈夫なん?」

すると1つの影がRyoへ迫った。

コハル? 「Ryoっつ!」

Ryo? 「っつ! へえ?・・・噂のアイドルさんか?」

かろうじて攻撃を捌いたRyoは攻撃を仕掛けた人物の顔を見るなり、言い放った。

コハル? 「Ryoっつ!・・・ゴハア! (今のは・・・な・・・に?)・・・友理奈・

ちゃん?」

コハルが掠れた声でその人物の名前を言うと突然、地面へ倒れる。

Ryo? 「コハルっつ! しっかりしろっ!」

Ryoが気づいた頃にはコハルの倒れた所に血溜まりが広がっていたが友理奈は平

然と話し始める。

友理奈? 「あゝあ! 折角、コハルちゃんと再開できたのに! Ryoっつ!」なんて

言うから・・・」

だが、友理奈が言い終わる頃には春華が鬼の形相でソードスキルの『バーチカル』を

放ち、友理奈の後ろにいたオレンジプレイヤーもろとも吹き飛ばした。

春華? 「・・・あなたが抱いていたのは『所有欲』なの! コハルはコハルの意志があるのっ! それに河村君にとってコハルがどれだけ『大切』なのか・・・私は絶対にあんたを許さない!」

沙華? 「春華っ! 落ち着けっっ!」

勝? 「早まるな! 一旦、戻れっ!」

先生達の静止を聞かず、春華は友理奈へ斬りかかる。

だが、オレンジプレイヤーに行き先を阻まれ、先に進めなくなってしまった。

一方、Ryoはコハルの傷口を見た瞬間に顔を青ざめた。そう、コハルの腹がバツサリと切り裂かれていた為だ。

Ryo? 「反転之呪イ・「転無」!・・・そんな・・・俺のせいだ・・・」

コハル? 「Ryo・・・今・・・まで・・・あり・・・が・・・と・・・ね?」

Ryo? 「そんなっ! 最期みたいなこと言うなよ!! 俺・・・は・・・」

コハル? 「私・・・ね?・・・こほっ!!」

Ryo? 「もういいから・・・これ以上・・・喋ったら・・・ほんと・・・に」

Ryoは反転之呪イを使って傷の回復を試みるもコハルの傷口は塞がらず、コハルがRyoへ話そうとすると血を吐き出した。

沙華? 「コハルはあたしに任せて早く行け・・・」



そして、美剣先生が倒れているコハルをゆっくりと仰向けにするとその場にしゃがんで真言を唱える。

Ryo? 「: : rす: : 殺す! 友理奈つつ!!! てめえだけはつつ! てめえだけはああつつ! 絶対二殺スツツ!!!」

友理奈? 「ちっ! 鬱陶しい: : :」

Ryoは怒りに任せて剣を振るうが友理奈は煩わしそうに攻撃を捌くとRyoの脇腹へ強烈な蹴りを喰らわせ、密林へ吹き飛ばした。

Ryo? 「ガアア: : : 殺ス!! 殺ス: : : : :」

コロス

刹那、Ryoはどす黒い呪力を放つが否や友理奈を一瞬で劣勢に追い込むと他のオレンジプレイヤーに襲いかかる。

だが、1つの影がRyoとオレンジプレイヤーの間に入った。

間に入った人物は呪祓師のトップ《掟戒聖騎士》の「源道 勝」こと「シヨウ」だった。

シヨウ? 全く(ゝゝ): : : 「ちよつとだけ、眠ってね?」 『色災・「反蝕(たんしよ

く  
“ ”

とシヨウがRyoの肩に軽く手刀を落とした瞬間、Ryoの纏っていた呪力が消えて、前のめりに倒れる。

だが、シヨウが片手で受け止めた。

——第6話《竜使いの少女と呪いの殲滅者・後編》へ続く——

## 第6話 呪いの殲滅者・後編

35層のとある薬屋

シリカ?・・・そんな Ryoさんやコハルさんが・・・

ピナ?・・・きゆるる☒?

ベットに横たわるRyoとコハルの部屋でシヨウが猛毒から回復したピナとシリカにオレンジプレイヤーに待ち伏せされたこと、戦闘中、コハルが友理奈に瀕死の重傷を受けたこと(美剣先生の迅速な対応でなんとか生きてる)

そして、Ryoは反転の呪いを暴走させて酷使した代償で攻略に参加できないことを説明した。

シヨウ?さて、オレンジプレイヤーの件はどうしよか・・・(?!?)

——その夜、

Ryo:(あー!。(ゞ(≡皿≡メ)ノ)やつぱり、ダメか・・・)それにしても、こんなに「代償」がデカイなんて・・・

Ryoは迷いの森でレベリングをしていた。

だが、代償のせいでうまく避けることができず、HPも半分を切ってしまったので、休

憩をしている。

ちなみに、「代償」とは数日間の倦怠感だ。

倦怠感にも度合いがあり、『反転の呪イ』を使用する時間や放出する呪力の濃さに比例するものだ。

今は『かろうじて歩ける』レベルだが、10分以上使うと解いた瞬間から約1週間前後《昏睡》に

その後、2・3週間《著しい倦怠感》に見舞われることになる。

Ryo:・・・思ったより、しんどいなあ(T|T)

と独り言を言いながら、宿に戻るために立ち上がった時だった。

???:・・・みーつけた♪

と言う声我突然、背後からした。低めだが、女の子の声だった。

Ryo:(つく！全然気配がしなかった！)

短剣を抜こうとしたが、顎に柔らかい感触がした……つまり、《詰んだ》ということだ。

???:君が“Ryo”君だよな？

Ryo:・・・ああ、そうだよ……あんたの名前はなんだ？

警戒をしながら、Ryoは名前を聞いた。

??? : 私は「メア」、ごめんね 急にこんなことして・・・

と女の子、「メア」は Ryo 前に現れると頭を下げると顔を上げた。

腰まで伸びた白銀のロングヘアにエメラルドの瞳、肌は白く、スラツとした手足を持つ高校1年生くらいの女の子「メア」はアスナ以上にとっても美しかった。

だが、

Ryo : (つつ！逃げるなら、今だ！)

ありつただけの体力を振り絞り、その場から逃げようとしたが・・・

Ryo : があ！くそっ！

メア : ...お願い、話を聞いて？

あつという間に捕まってしまった。

メア : ...あのね？私、「友理奈」の《元・親友》なんだけど、今日、Ryo 君を見ててね？何か苦しんでそうだったから Ryo 君の「力になりたい」 n / 却下！ / えっ？

Ryo : そもそも、あのビッチの《親友》なうえに《苦しんでそう》だった？んで、「力になりたい」？すみませんけど、信用できないですよ。

とメアの言葉を遮って、Ryo ははつきりと告げたがそんなことはお構い無しと言わんばかりに話を始めた。

メア：……力になりたいっていうのはね？ Ryo君って、《「異常な程」に人間の存在を憎んでる》でしょ？ だから、人間の存在を《憎む》以外の方法を見つける為に協力したいってことなの

Ryo：……例えば、どの方法があるんですか？

とRyoに質問されたメアは少し考え込むと質問に答え始めた。

メア：……まずは《人間という存在を理解する為に色んな人達と関わって、その人達の情報を得る》方法かな？ そうすれば、いつか《人間や他の生き物が分け隔てなく平等に》過ごせる日が来ると思うよ？

とメアが話し終わるとRyoが話し始めた。

Ryo：確かに、その方法はアリだと思うけど、現実的には厳しいと思う。それに、所詮は《相手のため、誰かのため》と言って自分を正当化する奴らですよ？ だから結局は自分の為に《正義・正論》という名の棍棒をひたすらぶん回しているような奴らに《分け隔てなく》は間違いなく無理だと思えますよ。

Ryoが話し終わるとメアは困ったような表情をしながら言った。

メア：Ryo君、現実を見るのもいいけど現実を直視過ぎるとかえって、《悪い方法に事が進む》だけだよ？

Ryo：どういふことですか？

メア：《人の未来》もそうだけど、「こうだといいな」とか「ああいうことが起きたらな」という《妄想「イメージ」》が《未来》と直結するの・・・つまり、《非現実的なこと》を考へるのも大事つてこと！現実的なことをイメージしてばっかりだと《先の未来》もどんどん悪くなるから、《非現実的なこと》を考へることで《先の未来》も良い方向になるよ？

Ryo：・・・へえ、初めて聞いたな、参考になるよ

Ryoがそう言うときメアは満面の笑みを浮かべて「でしょ？」と言葉を返した。

——翌朝、薬屋の一室

メア：ねえ、ねえつて、ねえつてば・・・もうっ！起きてっ！

Ryo：h b g r b t y f k h c !!!

ベットで爆睡しているRyoを布団ごとひっぺがした、白銀のロングヘアの女の子「メア」は困ったような表情で立っていた。

そして、目を覚ましたRyoは寝ぼけ眼でメアを見上げると「おはよう」と言つて、立ち上がると薬屋の店主に挨拶を済ませて迷宮区に向かった。

——迷宮区内のボス部屋の前にはアスナ、コハル、春華、影次達がいた。

Ryo：ごめんね、待たせて（（^ | ^ ;）

コハル：ううん、いいよ Ryoが無事で良かったー

アスナ：・・・いいえ、大丈夫よ——それでは、これより「ステイグ・ザ・ステイツキーシング」の討伐を開始します！皆さんっ！集中して行きましょう！！

アスナの掛け声の後、ボス部屋に入るとゆっくりと扉がしまった。

そして、天井から紫色の粘着性の物がボタバタと落ち・・・ポケモンの『ベトベター』のような姿になった。

Ryo：・・・（反転の呪イを使えば、何とかなるが・・・“代償”がまだある・・・）  
一気に片をつけるかを考えてるうちにフロアボスのHPが半分を切った。

そのとたん、ボスの姿が“無数のムカデ”になった。

そして、ボス部屋を縦横無尽に這いずり回って次々と“毒状態”にして、攻略組の連携をペースを戦意を崩していった。

Ryo：（どうする!?このままだと、全滅だ!）

コハル：っ！Ryo！

Ryo：！しまっt・・・

コハルの声で我に返ったRyoだが、既に遅し・・・攻撃を喰らい、毒状態になってしまった。

Ryo：くっそっ！・・・

もう無理なのかと諦めかけたその時だった、



????? ピナっ！ バブル・ブレス”っつ！  
 ピナ？きゆるるっつ！

聞き覚えのある声、何かが弾ける音がした。

そう、「シリカ」と「ピナ」だ。

シリカ？皆さん！大丈夫ですか!?

Ryo：シリカ・・・（ここで勝負を決めるなら”今”しかないっ！）《反転の呪  
 イ》っつっ!!

シリカ？ピナ、”セイリック・ヒールブレス”！

ピナ？きゆるるっつ！

《セイリック・ヒール・ブレス》は「ヒールブレス」の上位互換で”あらゆる状態異常”  
 を無効にする効果と”30秒間、味方のHPを3000ポイントずつ回復”という効果  
 を持ち、さらに”30秒間、6000ポイントずつ追加ダメージを与える”効果を持つ。  
 ちなみに、《ヒール・ブレス》は相手に与えたダメージの10倍分、味方のHPを回復  
 する。

バブル・ブレスのスタンプ効果が続いている間に、ソードスキルを連続で放つがスタンプ  
 から解放されたフロアボスの攻撃を受けてしまうが

Ryo：らああああっ！・・・っ！うおおおっつっ!!! 《呪転波》っつっ!!!

剣に呪力を纏わせたレイジ・スパイクによる渾身の《呪転波》で貫くとフロアボスは断末魔の叫びをあげながら、消滅した。

—— 迷宮区前でアスナ達と解散した後、

シリカ？ピナのこと、ありがとうございます

ピナ？きゆるる！

とシリカとピナがRyoへお礼を言ってきた。

Ryo：いえいえ、礼を言われる程のことはしてないよ（\*？▽？）ノ

とRyoが言い終わった時だった。

コハル：・・・Ryo？

Ryo：ん？

コハル：もう・・・居なくならないよね？・・・これからも一緒にいてくれるよね？

とコハルが不安そうな表情で訪ねてきた。目尻にはうつつすらと涙が浮かんでいて、泣き出しそうな表情になっていた。

Ryo：ごめん、コハル“出来るだけ努力する”から・・・

と、コハルに言葉を返すと突然、コハルに寄り掛かるような形で倒れた。

—— 不動明王にて

シヨウ？コハルちゃん、落ち着いて聞いてね？Ryoは今、《昏睡》の状態なんだ。

シヨウの告白に驚くコハルに更なる事実が突き付けられた。——《毒を大量に吸ったこと》によって、《半年》しか生きられない》——

コハル：えっ？・・・それって・・・やだ・・・嫌だよおっつ！

とコハルはその場で泣き崩れた。

シヨウは

・ 今回のボス戦で反転の呪イを使い、その上に《大量の毒を吸い込んだ》。

・ ボス戦の前日に使った『反転の呪イの《代償》』が残っていた。

・ 毒が既に身体中に回っていて、さらに毒素が特殊なうえ、濃い為に手の施しようがない。

ということを説明した。

その後、シヨウはコハルが泣き止むのをただ、じっと待つことしかできなかった：

第7話 デイジー・ヒート「暴食の華（ぼうしよくのはな）」とホープ・オブ・マナ「命の希望（いのちのきぼう）」

”

——ギルド不動明王（ふどうみょうおう）の一室（いっしつ）にて

シヨウ？コハルちゃん、落ち着いて聞いてね？Ryoは今、昏睡（こんすい）の状態（じょうたい）（じょうたい）なんだ。

シヨウの告白（こくはく）に驚く（おどろく）コハルにさらなる事実（じじつ）が突き付けられた（つきつけられた）。

——「Ryoは、あと「半年」しか生きられない」——

コハル：えっ？・・・それって・・・やだ・・・嫌だよおっつ！

とコハルはその場で泣き崩（くず）れた。

シヨウは

・今回のボス戦で反転の呪イ（はんでんののろい）を使い、その上に「大量の毒を吸

い込んだ”。

・ボス戦の前日に使った反転の呪イの代償（だいしよう）が残っていた。

・毒がすでに身体中（からだじゅう）に回っていて、さらに毒素が特殊（とくしゆ）なうえに濃い（こい）ため、手の打ち（うち）ようがない。

ということを説明した。

その後、シヨウはコハルが泣き止むのをただ、じつと待つことしかできなかつた……  
ノック音？へコンコン

シヨウ??どうぞ

失礼します……

と部屋に入ってきたのは、腰までの長さのロングヘアにエメラルドの目をした16歳（さい）くらい（さい）の白銀（さい）の女の子だった。

初めまして、こんばんは（\*———）（\*———）ペコリ私は『メア』と言います。  
と16歳（さい）くらいの女の子、『メア』はそう言って敬礼（けいれい）をした。

あまりの出来事にシヨウとコハルはポツカーンとなつてしまった。

メア？……失礼します

と言うが否や、コハルとシヨウが我に返つた時にはRyoが横たわっているベットの前に移動していた。

そして・・・胸元(むなもと)のシャツのボタンを外し、Ryoの手を自分の左胸に置いた。

その光景を見た、コハルは開いた口が塞がらない(あいたくちがふさがらない)といった表情で突つ立って(つったって)しまった。

シヨウは止めようとした瞬間、半透明(はんとうめい)の結界(結界)がシヨウを弾(はじ)き飛ばして、そのまま部屋の壁に身体を打ち付けたシヨウは氣を失った。

——結果、余命を告げられた筈(はず)のRyoはこれまで通りに生きることができなくなった。

その理由は・・・

Ryo: んっああ(ーん) ゴシゴシ(ーん) おはよー

メア? おはよう・・・(ーん) よく眠れた?

Ryo: ん? ああ・・・眠れたよ? ありがとう

メア? ううん、礼を言われることはしてないよ

ちなみにRyo君の身体にあった毒、特殊でなかなか、解毒(げどく)が難しかったよ  
おー(T—T)

と、メアが嘆いていると部屋の扉(とびら)が開いてコハルとシヨウが部屋に入ってきた。

コハル：・・・Ryoのバカあつ・・・心配したんだからあ(TTT)  
 メア?・・・(そういうことかあ) 初めて、「相手のことを妬(ねた)んだ」かも?  
 ?)コハルサン?

コハル：えっ?うん、はい?

メア?これからも宜しくね?

シヨウ?・・・( ; D ) ( ) ガクガクブルブル

Ryo：・・・(ありやりやあゝ?何だか、とんでもないことになりそー)

そして、一気に修羅場(しゅらば)となったのだった。

47層迷宮区内(めいきゆうくない)、ボス部屋前

キリト?それにしても、びっくりしたよ「それだつ!」って、いきなり大声で言い出

すから

春華?確かにね? でも、このまま悶々(もんもん)としているより、さっさとクリ

アした方が良くもんね

美月?コハル、〃万が一〃のことがあつたら・・・

コハル：大丈夫ですよ!Ryoならきつと・・・大丈夫な・・・筈だから・・・

美月?・・・

Ryo?・・・〃急とはいっても、「HPが一定数、切つたら分裂(ぶんれつ)する」

と言うことしか知らないから油断は出来ない! "

メア? Ryo君、コハル、．．．今、成(な)すべきことは何? 成すべきことを成そう  
としないで、先のことやこれからのことを考えないで? 考えるなら．．． "今、成(な)  
すべきことを成(な)し遂(と)げてから" にしよつ! ．．．ねっ! ?

Ryo? ．．．そうだなっ! メア、ありがとう

メア? ううん、ほら? 扉が開くよ?

そして、47層のフロアポス「レイア・ザ・レギオンバタフライ」の討伐戦(とうば  
つせん)が始まった。

メア? Ryo君っ!

Ryo? くっ!

フロアポスのHPが半分を切ったときだった、

無数(むすう)の蝶(てつ)が次々と襲(おそ)い掛(か)かるそして、RyoのHPが0に  
な．．．らなかつた。

オリジナル・システム『不屈(ふくつ)の意志(いし)』だ。

“蘇生結晶(そせいけつしょう) (そせいけつしょう) “の使用回数(しようかいすう)が定(さだ)めら  
れること、回避率(かいひりつ)と防御力(ぼうぎよりよく)が極端(きよくたん)に  
減(へ)るかわりに攻撃(こうげき)の命中率(めいちゅうりつ)と威力(いりよく)が



あがるというものだ。

だが、フロアボスの竜巻によってHPが0になるが、また回復（かいふく）する。何度も何度も何度も何度も……

メア？……「確か、9回しか使えなかったはず……それなのに……っ！この力は……もしかして、『心鬼（しんき）なの!?!』」

Ryo? うおおおっつ!! 《呪転・心荒覇（しんこうは）》  
フロアボスのHPが1割を切ったときには分裂はしていなかった。

この隙（すき）を突く（つく）ためだったのだろうか？これを待ってたと言わんばかりにほくそ笑んだRyoは弓の弦（げん）を引つ張り、呪力（じゆりよく）を一点（いってん）に集束（しゆうそく）させた。

……そして、矢を放（はな）つ。

ひゅんっ！という風切り音（かざきりおん）のあと、轟音（ごうおん）がボス部屋に響（ひび）き渡（わた）り、煙（けむり）が立（た）ち込（こ）める。

そして、煙（けむり）がやむとそこにはフロアボスの姿（すがた）はなく、Ryoが立っていた。メアはすかさず、背後（はいご）からRyoを思い切り（おもいつきり）抱（だ）きついた。

コハルは安堵（あんど）して、Ryoの手を握（にぎ）つたままだ。

アスナとリンドの方も終わったそうだった。

迷宮区に向かう前にリンドのギルド、《ドラゴン・ブリケード》DKB（ディーケービー）《がセラビアの樹（き）の奪還（だつかん）の件（けん）》で、NPC（エヌピーシー）《アインクラッドの住人（じゅうにん）》を“見殺し（みごろし）にするか？ 助けるか？”ということ2つに別れて内部抗争（ないぶこうそう）が始まりそうになったが、それをアスナとリンドが無事（ぶじ）に阻止（そし）したということだった。

ボス攻略から、数週間後のある日・・・

呪祓師《じゅふつし》最高戦力の1人であり、攻略組《こうりやくぐみ》の1人でもあるRyoと春華、影次、美月を初めとした呪祓師の実力者達はキリト、アスナ、コハル、を初めとした攻略組《こうりやくぐみ》の“ラフィン・コフィン”の討伐に参加した。

かろうじて生き延びはしたが、力不足（ちからぶそく）だと感じたRyo、春華、影次、美月、深雪は修行で力を付けることにした。

だが、50層のフロアボス『ザ・ラストナンバー』相手に苦戦を強いられた。

最終的にキリトとアスナによって『ラストナンバー』は倒されたがRyoや春華、影次、美月、深雪は《本当の強さ》を見つけ、その強さをモノにする為に『攻略組』を“抜ける”ことにしたのだった。

## 第1章―2 『万事屋編』

## 第8話 心霊現象が起きるとどうなるか？

僕はRyo

アルゲートの一角で万事屋・清楽 “ばんじや・せいらく” をやってる。  
中々、依頼が来ないから暇を潰しにコハルと「始まりの街」に来た。

コハル？んと、これからどうする？

Ryo？ そうだなあ？

とこれから何をするかを考え始めた時だった

????  
先輩！ 久しぶりですね

と女の子の声がしたので振り返った。

腰まであるロングヘアに聞き覚えのある声・・・間違いない、深雪だ。

深雪は呪祓師の前衛部隊、《十二聖将 “じゅうにせいしよう” の1人だ。

深雪？先輩！どこ行ってたんですか!? 心配したんですよ？

コハル？Ryo？この人は？

Ryo？深雪だ

コハル? 深雪さん、初めまして（\*———）（\*———）ペコリコハルです  
・・・とりあえず、自己紹介を済ませた。

コハル? Ryo、あの人が言いたそうだよ?

とコハルがそう言つて、その人に声を掛けた。

コハル? あの? どうしたんですか?

?????  
あなたは?

コハル? コハルです

?????  
リアです

とコハルとリアの自己紹介を見ていた僕は何かが引つ掛かつていた。

深雪はキョトンと僕の方を見ている。

コハル? とところで、どうしたんですか? 何か言いたそうにしてみましたけど

リア? 実は・・・

しばらくして、コハルが戻ってきた。

コハルが言うには、ウエディングドレスの素材を集めて欲しいということだった。

Ryo? んじゃ、集めて来るか!

コハル? そうだね!

とあるダンジョン———

Ryo?何か、この年季入った遺跡みたいな所見たことあるけど、どこだっけ?  
 深雪?14層のダンジョンだと思いますよ?それにしても、所々に滝が流れているの  
 で神秘的に感じますね?

Ryo?そうだな(――)。)

コハル?こうして、3人でダンジョンに入ったのも久しぶりだね!(――)。

Ryo?あ(――)。

深雪?そうですね(――)。

といった雑談をしているうちに、巨大な扉の前に着いてしまった。

コハル?これって、ボス部屋だね?(――)。

Ryo?あ(――)。)多分、ボスを倒すタイプのものかな?これ(――)。

深雪?そうですね(――)。

Ryo?何とかなるっしょ!つか、僕らなら余裕で行けるだろ?

深雪?そうですね!(――)行きましょう!

とあたふたしているコハルを置いて、僕と深雪はボス部屋の扉を開いて、中へ入った  
 が……

コハル?も(≧≦)2人とも、置いてかないd……

コハルが中に入った瞬間、音を立てて扉が閉まった。



Ryo? つぐつあぁ!

ついには、ボスの攻撃を喰ってしまふ。

深雪? つ!先輩!

コハル? Ryo!

Ryo?・・・(どうする?ここで使うか?いや、使うしかない!)

とモコを呼び出した。

モコ?ふえっ!?!何!?

Ryo?あとで、お詫びする!!手伝ってくれないか!?

モコ?ん?え?うん、分かった。

とモコはうなずいたあと、手もとに槍を出現させてボスの攻撃をいなす。

コハル?(このままだと、Ryoが死んじゃう・・・そんな・・・やだよお・・・もう、

逃げない!)

深雪?(・・・先輩だって怖いはずなのに・・・私は・・・もう、逃げない!)

——戦うんだ!——

僕はモコにボスの攻撃をいなしてもらっている間に装備を変えたあと、モコに声をかけようとした時にボスが突然、苦し紛れな咆哮をあげた。

その先には金と白が混ざった気を纏うコハルに白銀の気を纏った深雪がいた。

コハル？ Ryo！待たせて、ごめんね！

深雪？先輩！私、もう「逃げませんから！」

Ryo??まあ、いいや！とりあえず・・・「倒すぞ！」

コハル？うん！

深雪？はい！

手始めに僕が呪力を纏った状態で下段突進系、単発ソードスキル「レイジ・スパイク」と回避突進系、3連撃ソードスキル「バックレイ・スラッシュ」でダメージを与える。そのあと、コハルが呪祓師の中でも使いこなせた人がいない特殊能力の「固有呪霊装」を使いこなして、着実にダメージを与えている。

深雪は弓で霊力を纏った矢を放って、じわじわとボスの体力を削っていた。

そして、ボスのHPが1割を切った時、ボスが咆哮をあげて僕へ剣を振り下ろす・・・

Ryo?・・・

剣が当たる直前、ボスの剣が折れた。その隙をRyoは見逃さず、猛攻を仕掛ける。

下段からの斬り上げ、後ろへ下がりが、急接近の左右と真上からの斬り下ろし、居合い、右↓左（回り込み）↓右↓（正面）↓左↓突き、横一閃に斬り下ろし、斬りあげ等を

ボスへ叩き込み、気装武転術「きそうぶてんじゆつ」の技の1つ、「気荒波」「きこうは

」（圧縮させた気を放つ技）をレイジ・スパイクに纏って・・・



Ryo?これが、俺達の“力”だっ!!

Ryoはそう言い放つと、ボスへ剣を突き刺す。

その瞬間、ボスはポリゴン片になって四散した。

その後――

ボスからドロップしたのは、純白のウエディングドレスとタキシード、白黒の糸、そして無銘の白い剣だった。

そして、リアさんに糸を渡したあとリアさんが僕達を結婚式に招待すると言い出してそのまま結婚式に参加することになった。

その日の夜 とある宿の一室――

コハル?着てもいいんですか!?

リア?いいよ?一度くらい来てみたいもんね( ^ | ^ )

コハル?ありがとうございます( ^ | ^ )

――同じ頃、ある宿の一室で

Ryo?ちよつと、いいですか?

そう言つて、僕はドアをノックしたあと声がしたので部屋に入る――

リア?本当に貰つてもいいの!?

Ryo?いいですよ( ^ | ^ )あつても、邪魔なんでむしろ、貰っていただけたらあ

りがたいです。

リアア?・・・このドレス、コハルさんに

Ryo?いいですよ( (^ | ^ ; ) そんな・・・

リアア?ううん、コハルさんにあげたら凄く喜ぶと思うわ!

Ryo?あつハイ、では

リアア?wあつ!はい!これも

とドロップしたドレスとタキシードを渡しに行つて、帰るはずが、お下がりを買うことになった。

Ryo?まあ、サプライズで渡したつもりが・・・つ!ちよつと、良いこと思い付いたぞ?

と新たに方法を思い付くと自分の部屋に戻つた・・・

そして、翌日の夕方から始まりの街の教会で行われた。

参列者?ハッピーウエディング

コハル?ハッピーウエディング (^ | ^ )

リアア?Ryoさんとコハルさん!?その服装・・・

Ryo?んあ?リアさんか・・・まあ、折角貫つたやつだし、着ないと勿体ないと思つてね?

新郎？似合ってるね！コハルさんとRyoさんだけ？様になってるよお（  
 ）

Ryo？あー（  
 ）ありがとうございます（  
 ）レオさん

リア？コハルさん、似合ってますよ（  
 ）

コハル？ありがとうございます・・・

Ryo？さてと、良かったら記念撮影します？

レオ？いいねえ〜！撮ろう！（  
 ）

——はい！チーズ！

と一枚の写真が出てきたが・・・

“そこに2人や参列者の姿がなかった”

——  
 ——  
 始まりの街 転移広場

コハル？Ryo！

Ryo？あつハイ！うん？

深雪？先輩？疲れが貯まっています？

Ryo? うん、そうかも？

コハル? …… なら、今日は「ユウキ」さんも誘って、食べ歩きしよう？  
深雪? そうですね! (^| ^)

## 第9話 とある男を暗殺しようとした少女の末路・・・

私はアイカ。

アルゲートっていう街にある《万事屋・清楽》(ぼんじや・せいらく)をRyoさんとやっている。

Ryo? その子は?

アイカ? ネピアさんです

遡ること、10分前——

アイカ? はああ・・・疲れたからちよつとだけ休憩しよ!

あぁの! すみません、万事屋・清楽の人ですか!?

と急に声でしたので、びっくりして声でした方へ向くとセミロングに上下とも赤色の服装をした女の子が切羽詰まった表情をしていた。

私、ネピアって言うんですけど、助けて下さい!

私はネピアさんに理由を聞こうとしたけど、説明出来そうな状態ではないと思って、ネピアさんを清楽へ連れて行った。

——現在、

清楽に着いたあと私はネピアさんに改めて「助けて欲しい理由」を聞いたけど、ネピアさんが「Ryoさんと2人で話がしたい」と言ってきたので理由を聞くことができなかった。

Ryo? Side

アイカに席を外してもらったあと、ネピアさんに助けて欲しい理由を聞いた。

どうやら、「例のオレンジギルド」に命を狙われていたらしく、逃げている時にアイカを見かけて助けを求めたとのことだった。

ネピア? それと武器屋に寄りたいですけど、案内してもらっても良いですか?

Ryo? ... わかった。

ネピア? お問い合わせします( ^ . ^ )

とネピアさんを武器屋に案内したあとに一応、どんな物が売ってあるのかを説明した。

Ryo? この店は武器以外にも色んな日用品や調理器具とかが売ってあるんだ。

ネピア? side

私はRyoさんに武器屋へ案内してもらったあと、店にどんな物が売ってあるのかを教えてくださいました。

ネピア?あのく?コートに何か付いてますよ?

Ryo?んあ?マジか!?教えてくれて、ありがと!後で見てみる!

ネピア?ダメです!今、拭かないとシミになります!後ろ向いて下さいね?拭きますから

とRyoさんが後ろを向いたその瞬間、腰の短剣を抜いて首を狙った。

ネピア?っ!消えた!・・・

後ろを振り返るとRyoさんがいた。

ネピア?・・・っ!お腹が・・・痛い・・・さつきまで痛かったのに・・・何で?

とお腹を触ったけど、何もなかった。

Ryo?さてと・・・大体は予想できるけど、一応、確認だ・・・『ナンデ、オレヲコロソウトシタ?』

男の人の表情を見た私はその瞬間、底知れない恐怖と罪悪感から泣き出してしまった。

Ryo?side

底知れない怒りと憎悪が煮えたぎっているとはいえ彼女を泣かせてしまったことに変わらない・・・彼女が落ち着いたあとに怖がらせたことを謝り、「殺そうとした理由」を聞いた。

オレンジギルドに襲われた原因は分からないそうだが、武器屋へ向かっている途中に「Ryoを殺せたら生かす」といったメッセージが来ていたらしく、命欲しさに実行してみたかった。

Ryo? なら、清楽に入らないか?

ネピア?!

突然の提案にキョトンとしているネピアに説明した。

Ryo? ただ単に入って欲しいんだ。理由は僕に面と向かって言っているでしょ? だから、あんたの気持ちに嘘がないってことや本気で後悔していることが分かる、だから信頼できる・・・「真正面から向き合ってくれている」から「それだけが理由なんだ」

とネピアに伝え終えるとネピアはさらに泣き出してしまった。

その日の夜――

ネピア? あのく? Ryoさん? 待たせちゃいましたか?

Ryo? ううん、大丈夫ですよ( ^ . ^ ) んじゃ、行きましょつか?

居酒屋でネピアと待ち合わせをしていた。

そのあと、中に入って地下へ進み目の前の1つの扉を開く。

そして、中に入ったら何故かコハルとアイカが応接間のソファアに座っていた。



僕とコハルが口論になっていることを何故か知っていたアイカが半ば強引にコハルを清楽へ連れて来たらしい。

ちなみに、コハルはアイカに連れて来られるまではアスナの宿で居候をしていたらしい。

アイカ？ネピアさん、ごめんね？ちよつと時間がかかりそうだから、適当にゆつくりしてて？あと、風呂場も使つていいから

ネピア？side

アイカさんに「適当にゆつくりしてて」とか「風呂場も使つていいから」つて言われたからお礼を言つたあとにお言葉に甘えて、風呂に入ろうと思つたけど・・・

ネピア？うーん・・・風呂場がどこか分からない

と私が悶々としていると横から声が出たので、振り向くと髪を後ろで一本にした女の子とセミロングの髪型をした女の子が心配そうな表情をして見ていた。（もう一人の方はキョトンとした表情で見ていた。）

急に話しかけてごめんね？私は「春華」

????????  
あたしは「美月」

とセミロングの髪型の女の子と髪を後ろで一本にした女の子が名乗つてくれたので、私も名乗つた。

春華？ネピアさんかー、素敵な名前だね！

美月？本当にそうだよねえー（＾＾）いい名前だね！

ネピア？2人の名前も素敵ですよ！

と雑談は10分くらい続いた。

美月？んじや、そろそろお風呂にしよ！ 大体、10人分のスペースがあるし！

春華？・・・美月ちゃん？それはいくらなんでm・・・

美月？んっ！ このタオル身体に巻けば問題ない！

春華？そういうことじゃなくて・・・

美月？んじや、ネピアさん！行こっか？

そのあと、私は美月さんに、風呂場へ連れて行かれた・・・

脱衣場も広いし、木目調の床や壁の色も床に合わせたデザインでとても素敵な所だった。

防具を外して服を脱いだあと、浴室へ入った。

ネピア？・・・（タオル、身体を洗う時に邪魔だから巻いてないけど・・・めつつつつ

ちやつつ!! 恥ずかしい!!”）

春華？ネピアさん？大丈夫？

ネピア？はい・・・ありがとうございます（？口？）

私は恥ずかしさから身体を洗う気力を失っていたけど、流石に前の部分は同性でも触られたくないという気持ちもあったから春華さんに背中だけを流してもらった。

ネピア？・・・（私の胸って春華さんや美月さんと比べるとどうなんだろう？）

という風に考えながら背中以外を黙々と洗ったけど、終わった頃には美月さんと春華さんはいなかった。

ネピア？・・・（胸のことは聞けなかったけど・・・って、はああ・・・何考えているんだろ・・・まあいいや、出よ・・・）

と浴室から出たあと、バスタオルで身体を拭いて事前に買っておいた寝間着（ねまき）に着替える。

そして、防具をストレージにしまったあと応接間に向かった。

一方、応接間では――

アイカ？それで、春華さんから「喧嘩になっている」って聞いたんですけど、何が原因でそうなったんですか？

コハル？攻略組に戻ってきて欲しかったんです。

アスナやキリトはRyoのことを心配していましたし、シリカちゃんは特に「Ryotomotto」といいたい”って思っています。私も前のようにRyoやキリト達と攻略した方が楽しいと思ってます。

Ryo?・・・コハル? 何度も言うけどさあ?自分を「正義」と過信してえ?「悪

”って決めつけて一方的に叩くような奴らとはあ?無つ理!!労力と時間の無駄d・・・

コハル?っ!そこまで、言う必要はないじゃない!

おかしいよ!?

Ryo?おかしい?何がだ!?否がない人間は「否がある人間」に何しても許される権利があるのか!?奴ら(否がない人間)がのさばって生きて、身と心をズタズタにされた否がある人間はどうなる!?要するに『この世界は1つでも相手が「不快」と感じた時点で、淘汰(とうた)されるって仕組みなんだよ』そんな世界・・・

アイカ?・・・ストツプ!もう、止めてっ!

それなら、2人の中で《共通する目的》を決めよ?

そして、アイカの提案をもとにコハルとRyoが考えた結果、「アインクラッドを「一緒に「クリアする」という目的を見つけ出し、今後はそれを忘れないように意識することとで解決することができた。

その後——

Ryo?ネピアさんいわく、オレンジギルドに狙われていたらしくアイカに頼んだんだ。んで、ネピアが僕と2人で話をしたいって言った理由がかくまってほしいってことで話をして今になるってこと

アイカ？ そうなんだ・・・

Ryo？ まっ！ とりあえず、矛盾してて気になることがあるだろうけど、そこは聞かないでほしいってこと、ネピアが仲間になることを伝えたかった。

ネピア？・・・あの・・・Ryoさん！

Ryo？ んあ？

そのあと、ネピアに手を引つ張られて風呂場へ連れて行かれた。

Ryo？ どうしたんだ？ 急に・・・って！ ちよつとっ！？ 何やってんの！？・・・

浴室に着くが否やネピアはストレージを操作して上半身の装備を下着だけにすると

ネピア？・・・Ryoさん・・・私、さつき春華さんと美月さんとで風呂に入ったんで

すけど・・・ちよつと・・・その・・・胸の大きさで・・・気になったんです・・・なので

！

Ryo？ ちよつ！！ ねっっ・・・ア？

とRyoの右手を左胸に置くと、Ryoへ聞いた。

ネピア？ 正直でいいんです・・・わっ・・・

Ryoはとつさに低威力の「気荒波」(きこうは)を放ち、反動で後ろへ下がると

Ryo？ 大方、言いたいことは分かった！ 俺は「あんた自身という『存在』」に一番

興味がある！ 身体ことなんか関係ねえ！ 以上！！

ネピア？ちよつとおくくくくく（T|T）質問に答えてよおく（T|T）  
ちなみに、Ryoはネピアの身体のことを「全然、スタイルいいじゃん」と思っ  
たことは別の話。

## ストーリー編 第1話 『常闇の出会い』

——5月16日 50層のフロアボス『ザ・ラストナンバー』

千手観音を思わせる容姿で神々しいがそれとは別に破格な力を持っていた。

おまけにHPが一定を切れば、もぐらのようなモンスターが出てきてHPを回復されるので実質、不死身だ……

そんなボスと戦って、序盤は優勢だったが、徐々に押されていき、やがてキリトが来るまで防戦一方や自身のHPの確保、あるいは離脱する者が増えると言った状況でアスナも冷静さを失っていた。

だが、キリトが駆けつけた事と自分にとって“大切な存在”が来てくれたことによる喜びで立ち直ったアスナ、そしてアインクラッド解放軍の参謀官のキバオウ率いる小隊の援護が来たことよって、形成逆転……そして最後はキリトとアスナの絶え間ない連撃が止めになって、勝利したのだが——

RYO・春華・影次・美月・深雪は「自分と向き合い、『本当の強さ』を知るために『攻略組』を抜けた——

——あれから3週間と5日が経った6月16日、昭和時代の街の雰囲気を変えず街

“アルゲート”の片隅に万事屋“何でも屋”が開設された——  
 アイカ? Side

(転移門から見て左に赤色の文字の3つの蛍光版の真下(その居酒屋と八百屋の間)が《万事屋(ばんじや)》かなあ?)

そう心の中で呟いて、私はそこへ向かう。

ドアには何かが吊るしてあった。

アイカ? 《万事屋 “ばんじや” ・清楽 “せいらく” 》・・・よかつたあゝ 合つてたゝ

ひとまずの安堵したため、声が出てしまった。

—— ドアを開け、地下へ降りると周りを見渡した。

すると、1つのドアがあったのでドアに近づくと

ゆっくりと深呼吸をし、そしてドアノブをひねって前に押す——

部屋に入ると中が白色の壁にグレーのフローリングになっていた。

木製の長机に突っ伏してる? 3分の青年、“Ryo”とウルフカットの青年“影次”と4人座れる幅がある茶色のレザー仕様のソファアで熟眠している髪を1本にした女の子“美月”は始まりの街でアルゴさんにもらったチラシに載ってた人だった。

だけど・・・



アイカ?・・・何?これ?

あまりにもグダグダしているので帰ろうとしているとセミロング女の子「春華」が私に声をかけてくれた。・・・そして

Ryo?・・・

影次?・・・

春華?ねえ?(—ω—)

美月?(—ω—)スピーzzzz

春華?・・・お客さん来たよ?

Ryo?っ!(ヤッベツ!)申し訳ございませんでした!

とRyoは立ち上がろうとしたがその拍子に机の角に足をぶつけてしまった。

Ryo?!

身悶えてるRyoを尻目に春華が別の部屋に案内した

そこは全体的に木目のデザインで提灯「ちようちん」が何個か天井から吊るされていてメニュー表もあった。

春華?ここに座って?

アイカ?ありがとうございます



アイカ?・・・私・・・怖いんです・・・ギルドの皆が私を恨んでいるんじゃないかって・・・

とアイカさんは声を震わせながら僕へ話した。

—— 6 / 15 22 : 30頃 40層の主街区 ——

この頃、僕は呪祓師（じゅふつし）本部から指令を受け、ある場所へ向かっていた。

Ryo?っ！（このままだと間に合わない！）

指令の内容は「例のギルド」があるギルドを襲撃しているという内容だった。

そうこう考えてるうちに白い館に着いた。

そして、正拳突きของ 要領で放つ「体術スキル・閃打」でドアを破壊して、中に入ったがそこで見たものはあまりにも残酷だった。

3人の男の子と2人の女の子の遺体がそこら中に転がっていた。

おそらく、黒色の制服を着ている女の子の前にいる3人の男が殺したんだろう

??なんだあ?コイツ?

??どこの誰だか知らねーけど、まずはこの女を殺そうぜ?

??そうだなあw

??しっかし、アソコを挟りながら殺した方が最高に面白かったんじゃないか?

??まあ、確かにな?でも「シンプル・イズ・ベスト」がいいんじゃない?

??まあなw毒ナイフで首を切った時の男のガキの反応は良かったぜ？

??女のガキは盛り上がったぜ？胸やら腹を刺した時の感触とか泣きじやくった顔はまさにけっさk・・・

とおぞましい会話を遮るように叫び声が響き渡った。

????  
モウイイ、シャベルナ・・・

と黒い制服の女の子が言い終わるが否や姿が消えると同時に轟音と金属同士がぶつかる音がした。

????  
っ!!

女の子は驚いていた。目の前に僕がいて、オレンジプレイヤーを庇っていたから。

????  
何でっ！止めないd・・・

女の子が僕に退くように言おうとしたが、僕は「鬼圧」きあつ」で、黙らせた。

「鬼圧」は《鬼装武転術》きそうぶてんじゆつ》の技の1つだ。

鬼装武転術は霊力と呪力を「気」に変える特殊な武術で鬼圧は「呪力」を「気」に変え、相手を威圧して動きを止める物だ。

ただし、同等か格上の相手には効き目がない。

だけど、受けた呪いを霊力と呪力で「直接」、切り替える”特殊な能力の「反転之呪い」よりも身体への負荷が掛からないので僕にとっては、上位互換の「力」”特殊な能

力だ。

そして、女の子に身に付けていた白のコートを羽織らせて近くの椅子に座らせたあと……

??つつ!?

??消えt・・・

??チツクシヨ・・・

僕は剣に呪力を纏わせる。

その後、突っただつてるオレンジプレイヤー3人へ一瞬で肉薄すると《下段突進系ソードスキル》「レイジ・スパイク」で倒した。

そして、後から来た春華と影次にオレンジプレイヤーを任せると僕は女の子からここに来るまでの経緯を聞き出した。

アイカ? Side

私は七三分けの髪型の人に自分の名前を言ったあと、この人が来るまでの経緯を話した。

・今朝、私が素材集めに出掛けて不在だったこと

・17:00に「帰りが遅くなる」ことをメッセージで伝えて22:00頃に帰ったら、ギルドメンバーの男の子3人が殺されていたこと

そして、オレンジプレイヤーが3人いてギルドメンバーの女の子2人を守ろうと戦ったけど敵わず、押さえ付けられてギルドメンバーが無惨に殺される所を見ることしかできなかったことを話した。

そこからはもう覚えていないけど、唯一、話を聞いてくれた「Ryo」さんは「優しい人」だということは覚えていた。

Ryo? Side

あの出来事はアイカさんにとっては、トラウマ以外に何物でもないはずだ・・・。けどアイカさんはこう言った。

—— 《私は「皆の分を生きて、前に進みたい」》 ——  
と

Ryo?・・・分かった、これから宜しく!

彼女の覚悟を受け取った僕は仲間として受け入れた。

そしてその日の夜は春華や影次達と日付が変わるまで宴を楽しんだ。

—— だけど、僕らは思い知るだろう。

この先に「さらなる絶望」が待っていることを——

## 第10話 『夏期・合同合宿 1—1』

とあるビーチ——

晴天の空の下、無数に生えているヤシの木

木製の栈橋と砂浜に立ててあるパラソル

栈橋のパラソルの下には円テーブルがあった。

Ryo、コハル、アイカ達の他にも教師を含めた500人前後の人数が砂浜を埋め尽くしていた。

そんな中、《呪祓師・夏期合同強化合宿》の開会式を受けていた。

《夏期合同強化合宿》

『聖華学園』という大規模な学園があるが、*“ある学科”*の行事の1つで、*“呪祓科”*の行事がその「夏期・合同強化合宿」だ。

この学園には、*“普通科”*と、*“呪祓科”*がある。

普通科は初等部から大学部までの学業制度が整っているうえ、大学部は専門学科が非

常に多く、就職率がとても高いのが特徴だ。

呪祓科は「呪祓師」の育成科で魔法や専用の装備を使った実戦訓練に特化しているのが特徴だ。

そして、『夏期・合同強化合宿』は関西支部の本部である「清救寺学院」との実戦訓練で期間は7月の第3月曜日から8月の第3金曜日の間に毎年行われる。

ちなみに、清救寺は真言や”

キリク”という特殊な槍を駆使する呪物祓いの宗派だ。

開会式が終わったと同時に参加者達はそれぞれ自由行動をし始めた。

そして、人混みの少ない所へ移動した白髪のロングヘアに黒がベースの装備をした少女、”アイカ”は白のコートを羽織り、眼鏡をかけた七三分けの青年、”Ryo”を見つけると話しかける。

アイカ？あのー

Ryo？ん？

アイカ？あつ、えつと・・・やっぱり、何でもないです！

とアイカはRyoに何かを言いかけると突然、どこかへ行ってしまった。

Ryo？・・・



唾然とした表情で突っ立っているRyoに対して一方、アイカは――

アイカ？ はあ・・・（私は何がしたかったんだろう・・・自分が分からなくなる・・・）と頭を悩ませていた。

Ryo?・・・そこにいたんだ

アイカ？ Ryoさん・・・

後ろから声があったため、振り返るとRyoがいた。

Ryo? 突然、いなくなるから焦ったよw

とRyoは笑いながら言うと、

Ryo? ところで、何が言いたかったの？

と真剣な表情でアイカに聞いた。

アイカ？ それはもういいです・・・

アイカが何でもないとRyoに言うとRyoはアイカに聞いた。

Ryo?・・・じゃあ、聞くけどさ？ 何で、「ギルドに入ろうと思った」んだ？ 何で、「皆の分まで生きたい」と思ったんだ？

だが、アイカは答えてはくれなかった。

Ryo?・・・引け目を感じているってこともホントなのか？

アイカ？ どうなんでしょうね・・・んー？

とRyoは別のことをアイカに聞いたが結果は同じだった。

Ryo? まあ、アイカさんが『何か』を隠していることさ? . . . ギルドに入った時から薄々、気づいてたんだ? もう《バレてるんだよ》

Ryoがそこまで言うときアイカはしばらく黙っていたが、胸の内を吐き出す勢いで話し始めた。

アイカ? 本当は自分だけ助かって嬉しかったのか? 自分が死ねば、皆は帰って来るか? 何で、私だけ助かったんだ? っていうことを考えてたんです . . .

Ryo? . . .

アイカ? 言い訳しか出てこなくて . . .

Ryo? 言い訳?

アイカ? 素材集めに行ってたから . . . 皆に付いていなかった . . .

Ryo? . . .

アイカ? 最近、ギルドが何件か潰されていることは分かっていたのに . . . 私は結局、自分の手が届くところになかった人達を救えなかったことから、目を逸らしたいだけ . . . 私は最低な人間なんですよ . . .

Ryo? (「情報屋」レインの言う通りだったか . . .)

「他人の情報を取り扱うこと」を専門に活動している「情報屋」があり、その情報

屋を經營する少女がいる。

その少女が「レイン」こと「雨宮 玲香」「あまみや れいか」だ。

今回、レインが調べてくれたお陰でRyoは予め、アイカの「情報」を把握する事ができた。

アイカ? ごめんなさい・・・こんな人間がいても、迷惑ですよね・・・

アイカが話し終わると、Ryoはアイカに一冊の手帳型の日誌を渡す。そして、ゆつくりと話し始めた。

Ryo?・・・「レイン」っていう人から「これを元ギルマスに渡して?」って頼まれたんだ。

アイカは表紙に『星天の思い出』と書かれた黒塗りの冊子を受け取るとページをめくった。

アイカ?・・・

Ryo? ギルドメンバーだった女の子が付けてたんだって?

アイカ? えっ?

Ryoの言葉を聞いたアイカは一瞬ページをめくる手が止まる。

Ryo?・・・ざっとしか見てないけど、文面で分かったよ・・・

アイカは再び、ページをめくり始めた。

Ryo?・・・皆、アイカのことか“大好き”だったんだよ

アイカ?・・・

Ryo?つまり、アイカを“恨んでない”ってことなんだよ・・・

Ryoがそう言った瞬間、アイカは冊子から顔を上げるとRyoの方を見た。

アイカ?・・・本当・・・に?

アイカがRyoへ問いかけると

Ryo? そうだって?・・・それに“皆、アイカに生きてほしい”って思ってる、俺も思ってるさ?

Ryoがそう言った瞬間、アイカの目から涙が伝う。

そして、せき止めていた感情が溢れんばかりに泣いた。

そして、アイカが落ち着くまで、Ryoは見守っていた。

その後、

アイカ? 助けてくれて、ありがとうごさいます・・・(\*――)(\*――)ペコリ

Ryo? いえいえ( ^ω^ )

アイカは落ち着いたあとRyoにお礼を言ったあと、Ryoと明日から行われる“合同練習”について、話していた。

Ryo? 比奈って女の子は・・・っと、ちよつとごめんね？

アイカ? はい

Ryoはそう言ったあと、メッセージウィンドウを開くが・・・

Ryo?! (「例のギルド」の信仰派ギルドだって!?!:場所は40層の主街区か・・・)  
大体の内容を理解したRyoがメッセージウィンドウを閉じる。

アイカ?? どうしましたか?

とアイカがRyoに訪ねるとRyoはアイカに「例のギルド」からの援護で召集が来たことを説明した。

アイカ? 「例のギルド」?

Ryo? 《トワイライト・ワルキューレ》、通称「トワイライト」っていうけど、その「信仰派ギルド」が前にアイカのギルドを襲った奴らだ。

んで、今回は別の信仰派ギルドみたいらしい。

キョトンとしているアイカへ説明したRyoはいつでも受け答えが出来るようにメッセージのメッセージウィンドウを開いた。

すると、メッセージが届く。

内容は「今、信仰派ギルドが逃亡中で逃亡先がRyoとアイカがいる砂浜に着くみた  
いだが、その時間帯が「夜」だ

「ということだった。

アイカ?・・・私も行きます!

突然、アイカが言い出した。

Ryo?・・・相手が相手だ殺す覚悟で行かないとダメだし、前にアイカのギルドを襲った奴らみたいな奴らが・

だが、流石に巻き込めないと判断したRyoはアイカを避難させようとする。

アイカ?大丈夫です!

しかし、アイカの目の奥に宿る強い意思を感じたRyoは同行の許可を出した。

そして、万が一のためにそれぞれの宿へ向かった。

とある館――

くうくう!楽しみだぜえ?夜が待ち遠しいぜえ?

相変わらずの狂人っぷりだな?「フアング」

フアング?言ってくれんじやねえか?「ハルト」

ハルト?俺はコハルを取り戻すためだけに動くだけだ・っ!? 友理奈さんからだ・:

「油断するなよ?」

フアング?へえい

????? あなたがファングさんですね？今日から “あなたの補助” をさせて頂くことになりました、 “ジユラ” と申します。

夜のビーチ——

果てしなく広がる海を照らす満天の星空

砂浜に生えている無数のヤシの木

アイカ？誰！

突然の気配に気づいたアイカが振り返るとそこには緑髪で赤い目をした青年がいた。

ファング？ファングだよお？

すると、ファングはアイカへ名乗った。

ファングは《イノヴェイト・グロリー》というギルドの三大幹部でありながら、ト

ワイライトの幹部も勤めている。

ファング？とところでさあ？白色のコートを着てる “Ryo”

って奴とセミロングで緑色の目の “コハル” って奴、知らねえか？

とファングはアイカへ聞いてきたがアイカは「知らない」と答える。

ファング？んじゃ、こう言えばわかるかあ？その2人と『星天』の生き残りである黒

色のコートの女を “殺しに来た” ってことだあ・・そしてえ？お前のギルドはあ？ト

ワイライトの “信仰派ギルドに潰されたんだよおっ！ww”

フアングがそう言った瞬間、アイカは背の剣を抜き放っていた。

アイカ?…(無くなってしまう私のギルド…)人の死をつ!私の仲間をつ!…  
侮辱したお前を殺す!

フアング?いいねえ?その面…『殺ツテミロヨ?』

アイカは喉が張り裂けんばかりに叫ぶと同時にフアングへ猛攻を仕掛ける。

だが、全て躲されてしまった。

フアング?効かねえよお?さあて… “地獄”を見せようかあ!毒界 “どつかい

”  
っつ!

すると、紫色の霧がアイカとフアングを包み込んだ。

フアング?この結界はどつちかが死んだ時に初めて解除される…さあて?いつまで持つかなあ!?

アイカはフアングの攻撃を捌きながら、隙を突いて攻撃することを繰り返したが徐々に身体の自由が聞かなくなってしまう。

フアング?ヒヤッハーっ!ファイバー、ファイバーっ!!

アイカ?っ!

そして捌けなくなった瞬間、後ろ蹴りを鳩尾に喰らい、膝から崩れ落ちた。

次の瞬間——



アイカ?・・・

フアング?とつととくたばれ・・・っ!

違和感を感じたフアングはとつさに距離をとつたが既に遅かった。

フアング?くつそ・・・があ・・・

アイカは一太刀でフアングの膝を地に付かせた。

フアング? “アイカ” って言ったなあ?・・・『絶対に殺してやる』・・・転移

フアングはアイカにそう告げると転移結晶と呼ばれる青色の結晶を使って、その場を去った。

だが、ここからが本当の死闘だった。

第12話 『夏期・合同合宿 1―2』へ続く

第11話 『夏期・合同強化合宿 1—2』

夜のビーチ

「イノウエイト・グロリー」の幹部であり、「トワイライト」の幹部であるファングとの戦闘を終えたアイカはRyoと合流したが、前方から何かしらの気配を感じたアイカはRyoへ声をかけた。

アイカ?・・・あなた、誰?

視線の先には白銀の鎧を身に纏い、腰にレイピアを携えている少女がいた。

アイカ? 「・・・貴女は?」

ジュラ: 今晩は。私はファングという方のお目付役を務めているジュラと申します。あなた方を抹殺する任務も兼ねておりますので次のお相手は私になります。

少女、もといジュラはそう冷たい声音で言いながらレイピアを抜き放ち、次の瞬間、Ryo達へと肉薄していた。

アイカ? Ryo: 「!!」

Ryo: 「ッ!」

前にいたRyoが受け止めるも、勢いを殺し切れずに後ろに吹き飛ばされた。

アイカ：Ryoさん!!

Ryo：「大丈夫!・・・つつ!アイカっ!後ろだ!!」

アイカ：「!・・・くっ!ハアッ!」

違和感を感じたRyoの呼びかけにより攻撃を受け流すとアイカは懸命に反撃をするが、意図も容易く弾かれてしまった。

ジュラ：「・・・これで終わりです。」

そしてバランスを崩したアイカへ刃が振り下ろされたが、アイカはギリギリで身を捻り、避けた。

アイカ：つぶな!まさか首狙ってくるなんて・・・。

Ryo：「アイカさん、大丈夫!?!」

アイカ：「はい・・・なんとか!」

応える声にも余裕がない。

Ryo：（これは、かなりヤバい状況だな・・・|：(>?、) <：) )

先程から連戦になっているアイカは息が少し荒くなっており、Ryoも素早く、そして重い攻撃を繰り返してくるジュラにかなり押されている。

Ryo: つぐ! (このままじゃ先にこちらが潰れる・・・!)

ジュラ: 「・・・力に目覚めたばかりの貴女はコントロールがまだ上手く出来ていない様ですね。折角、目覚めたのですから成長した姿が見てみたいところですが・・・ここで死んでしまうのが残念です。それでは、さようなら・・・」

冷やかにそう告げたジュラはアイカの首へレイピアを振り下ろす。

Ryo: つ! やめろおおつ!!! (また・・・また・・・結局、"あの時"と同じ・・・) だが、アイカの首に刃が当たるとはなかった・・・アイカがレイピアを素手で受け止めていたからだ。(というよりかは、指に挟んでいた。)

アイカ: 「二度も同じ手を通じるとでも?」

ジュラ: 「素手で・・・。」

ジュラはレイピアを引き戻そうとしたが、アイカがそれを許さず、レイピアごと引つ張りジュラを地面に叩きつけた。

ジュラ? つ!・・・かはっ! (今・・・なに・・・が・・・)

Ryo: (まじかよ・・・ぶん投げた)

アイカは投げた後、間髪いれずに重い踵落としをジュラへ蹴り込んだ。

その瞬間、ジュラは吐血し、ふらついていたが気合いで踏ん張るとアイカの足を掴み・・・

ジュラ：「くっ！調子に乗るな！」

ジュラはアイカを投げたが、投げられたアイカは猫の様に飛んでRyoの方へ来る。  
アイカ：「流石に連続して攻撃を当て続けないと勝ち目はなさそうですね。Ryoさん、連携して斬り込みましょう！」

Ryo：「了解！そうしよう！」

ジュラ：（・・・さっきの踵落として視界がふらつく・・・）

それにしても、力を完全に扱い切れていない今なら簡単に殺せると舐めていたけど、さっきの動きは素人じゃないみたいね？リアルで何か習っていたの？ どちらにせよ早々に決着をつけなければ・・・！）

アイカが動き出し、ジュラへ一気に距離を詰めると・・・

アイカ：「フツ!!」

回し蹴りを放った。

ジュラ：「!!」

ジュラは咄嗟にレイピアの柄で受け止めたが、その瞬間、アイカはジュラの両手を拘束する。

ジュラ「つつ！・・・何の真似を・・・!?」

Ryo：「・・・俺もいることも忘れんなよ？」

ジユラ：「なっ!!? . . . ツ!!」

アイカの蹴りを止めると同時にRyoはジユラの懐へ移動する。

ジユラはその速度に反応できず、Ryoの攻撃を受け止めるところかまともに、斬撃を受けた。

ジユラ：「くっ!! まさか私が失敗するなんてっ . . .」

悔しそうに顔を顰めながら結晶を取り出した。

Ryo：「!待っ 「転移」 . . . クソッ」

その時、グチュリと何かを抉るような音がした。

Ryo? つ!!?

アイカ? つ! . . . い . . . いやああっ!!

とRyoは絶句し、アイカはギルドメンバーを目の前で殺された記憶がフラッシュバックしてその場に倒れ込んでしまった。

ジユラ? つ! . . . 友理 . . . 奈 . . . さm . . .

そしてジユラはたった今、1人の少女によつて『見限られた』 “ころされた”

アイカ? . . . うっ . . . ああ . . . ああああっつ!

あまりの惨劇についてアイカは泣き出してしまった。

すると、黒髪のボブに赤色ベースの装備の少女 “友理奈” はあり得ないことを平然と

告げる。

友理奈？この役立たず2匹が消えても別に問題ないし、あんたは“あの時”から変わってなさげだしね？

Ryo？っ！友理奈ああっ！

と激昂したRyoは短剣で斬りかかる。

友理奈？あはははっ！ムダムダあっ！

と友理奈はRyoの攻撃を嘲笑うかのように全て躲すと懐へ潜り込み、そしてグチュリという何かが抉られる。

Ryo？っ！ごふおあっ！

その瞬間、Ryoは大量に吐血したあと前のめりに倒れた。

アイカ？っ！Ryoさんっ！

とすぐさまRyoへ駆け寄ろうとするがそれよりも早く友理奈がアイカへ距離を詰める。

そして、友理奈の剣がアイカの首へ・・・届くことはなかった。

友理奈？っ！

何者かに友理奈は衝撃波で吹き飛ばされたからだ。

アイカの前に現れた、赤い着物に黒髪のロングヘアの女の子“千藤 比奈”はすぐさ

まアイカへ指示を出す。

比奈？アイカさん！とりあえず簡易結界を張つとくさかい！

と比奈はそこまで言うと言真言を早口で唱えるとすぐに紫色の結晶を懐から取り出して前に翳すと

比奈？その間にRyoさんを担いで、あの中に逃げ込むんや！

正面の異空間に先に入る。

アイカも震えが止まらない手足に鞭打つてRyo方へ向かい、背負うと異空間に入った。

すると、友理奈が起き上がった瞬間に結界が碎けて異空間が閉まった。

とあるギルドホーム

あれから、一時間が経った頃長机がある部屋にコハル、アイカ、比奈が椅子へ腰かけしていた。

アイカ？あ・・あの、何で私のギルドホームに・・

緊迫する状況の中、アイカは声をあげた。

比奈？その事は詳しくは知らひんのやあ・・ごめんなあ・・

アイカの疑問に比奈は答えると続けてこう言った。

「命に別状はなく、メアのお陰で傷は回復したが、まともに動けない状態で精神もズタ



ズタで会話もろくに出来ない”と

次の瞬間、

コハル？何で・・・何で・・・こうなるのっ!?どうして、Ryoがこんな目に・・・  
コハルは泣きだしてしまった。

アイカ？・・・私、ちよつと外の空気吸ってきますね！

とアイカは席から立ち上がると足早に外へ出ていった

ギルドホームの外

アイカは一人、思いにふけていた。

アイカ？（潮の匂いがする・・・海辺の所にしようって決めたの・・・いつだったっけなあ・・・）

Ryo?・・・アイカ・

アイカ?・・・!Ryoさん??

Ryo?うおっ!と・・・あー(――)。こんなところでどうしたんだ?

アイカ?・・・星天”ギルドの皆”のことを考えていました。

とアイカはそう答えたあとRyoに尋ねた。

アイカ?身体の方は大丈夫なんですか?安静にしてって言われてたと思うんですけど?

Ryo? あまり動かなければ大丈夫・・・

Ryoはアイカへそう答えると拳を強く握りしめた。

アイカ? (Ryoさん・・・)

Ryo?・・・どうすればいいんだよ・・・二度と“あの時”や“35層の時”みたいな思いをしたくないっつ!もう、失ってたまるかっつ!

アイカはその問いに応えることが出来なかった。なぜなら、彼女も同じ気持ちだったからだ。

アイカ?・・・

Ryo? コハルは俺にとっつ!大切な存在だった!

それを友理奈は俺をこの次

元に飛ばしたあとキリト達を含めて”惨殺”したんだよ!コハルの親友だっ?

だったら・・・何でっ!コハルを殺したんだよ!?

アイカ:・・・

Ryo? 何で!コハルを瀕死にして見捨てて逃げたんだよっ!

そこまで言うとうとRyoは何もできなかった自分の非力さに嗚咽混じりに泣いた。

アイカ? Ryoさん・・・(私、まだ恩返しできてないのに・・・どうしたら・・・)

Ryo? でも、やりきれないんだよコハルは・・・未だに友理奈を・・・信じてるんだ

よ・・・自分を瀕死にした奴を

そこまで話したRyoは少し落ち着いた様子だった。

アイカ？ そんな・・・どうして・・・

Ryo？ さあ？ 聞いても言葉を濁すし、面倒だし聞かなかつた。

アイカ？ そうなんですわね・・・

Ryo？ アイカさん、このギルホーム、俺たちの本拠地にしないか？

とRyoは突然、アイカへそう提案した。

アイカ？ へ？

とためらうアイカへRyoは話した。

Ryo？ だつてさ？ 形見と言つても使わないともつたいないし、場合によつては、他の人を買われる・・・それは嫌じゃないか？

アイカ：それは嫌です！ ここは私の・・・私達の”の思い出”ギルド”だからっ！ どうしてもそれだけは譲れないんです！

とRyoがアイカへ説明したあとの問いにアイカは声を張り上げた。

Ryo？・・・分かつたよ？（ここにはアイカを含む星天の皆の思いが詰まつてるんだな・・・）

アイカ？ いきなり、大声出してごめんなさい・・・まさかそんなこと言つてくれるな

んて思ってもみませんでした。

と一瞬、取り乱したアイカだが……

アイカ？ ありがとうございます！……是非、使ってくださいっ！

アイカはRyoへお礼を言うと頭を下げた。

こうして、アイカの了承を得たRyoは新たな本拠地を手に入れたのだった。

## 第12話 『夏期・合同強化合宿 2—1』

とあるビーチにて

1日目のトーナメント戦が終わり、Ryoは宿へ戻ろうとしたが距離が遠く、妄想とは思えない程の暑さだったので、新しい拠点の《星天》へ向かった。

Side: Ryo

(それにしても、アイカどうかなあー?)

そう思いながら僕はヤシの木の森の中を進んでいるとアイカの声があった。

コハル:「アイカさん・・・放っておいてください! 貴女に関係ないでしょう!」  
!でも!

貴女はもう私達の仲間なんだから、少しでも力になれば・・・

Ryo:「アイカ、コハル? 2人とも何を・・・」

声があった方へ向かうとアイカと春華、コハルがいた。

春華:「それが・・・」

春華はRyoに状況を説明した。

Ryo:なるほど(結局、ああは言ったものの、まだアイカの中では気持ちの整理ができていない、つてことか)

アイカ:「とにかく、コハルさん、貴女が気にやむことはありません。私の問題です。まだ気持ちの整理ができていないだけなので。

それでは・・・」

アイカはRyoの横をすり抜け、その場を後にしようとしたが、Ryoはアイカの腕を掴んだ。

急に何をと言いたげな怪訝そうな顔を向けられたがこの際気にしていられないと無視して話を続ける。

Ryo:「要するに、アイカは気持ちの整理をつけたといって、そういうことだろ?」

アイカ:「そ、それはそうですけど、「それなら、『戦おう』それに、体動かした方がスッキリするだろ」・・・わ、かりました」

半ばアイカを押し切る形で強引に模擬戦に持ち込んだ。

そして、春華やコハルが見ている中、アイカと向き合う。

春華:「それでは、ルールを説明します!まず、お互いの転晶石が先に砕けた時、戦闘が続けられなくなった時、降参を宣言した時に模擬戦は終了します・・・両者、構えつ

！」

春華のルールの説明が終わり、開始前の掛け声がしたと同時にアイカとRyoは剣を抜く。

ちなみに転晶石「てんしょうせき」とは実際に受けたダメージを肩代わりさせるアイテムのことだ。

春華？それでは・・・模擬戦、開始っ！

春華が初めの合図をすると同時に俺とアイカは動き出した。

Ryo：「っはあー！」

アイカ：「っ！」

Ryoはアイカへ一気に肉薄すると同時に上段からの斬り下ろしを放つと左からの斬り上げ、右からの2連撃突き、

左右からの薙ぎ、突き、と猛攻を仕掛ける。

アイカはRyoの斬撃を紙一重にかわし続けているが突きは何度かかすった。

Ryo：「避けているだけじゃ何も変わらないぞ！」

一方、春華とコハルは

春華：「模擬戦が始まってからアイカさんが河村君に攻撃する感じがしない・・・どうしてだろ・・・」

コハル：「え、えっと、助けなくて大丈夫かな？」

コハルがオロオロしながら戦う2人を見る。

春華：「まあ、2人とも合意の上だし、それに私達は見てるしかないと思う。」

コハル「そ、そっか」

コハルと春華の話が終わった頃

Ryoは攻撃を避け続けるアイカから、距離をとると攻撃の手を止めてアイカへ聞いた。

Ryo：「アイカ、あんたは何考えてんだ！何でコハルにあんな事を言った!?!」

アイカ：「このことは別にコハルさんが知らなくても良いと思ったから。私の気持ちの整理ができていないって！それだけの問題だから、気にしないで欲しかった！心配をかけたくなかった！」

Ryo：「・・・そうかよ・・・っ！」

とRyoは歯を食い縛ると、『獄炎術』を発動してアイカに右下からの斬り上げを放つ。

アイカ？っ！（さつきより、凄い・・・）

アイカは剣で防ぐが威力が強すぎて防ぎ切れず、後方へ10メートル程、吹き飛ばされた。



Ryo? 俺も大概だけどき! すぐに人に頼らずに自分だけで解決しようとするなよ!  
! 余計に心配になるんだろが!!」

アイカ「そんなに抱え込んでませんよ!」

Ryo:「っ!... 抱えてんじやねえかつ! それに! 今の今まで... 相談してきてない  
だろっかつ!!」

Ryoはアイカへ右からの袈裟斬り、左のからの薙ぎ、幹竹割りを放つ。

アイカ:「っ! (っ強い!... ) だからそれはっ...」待ってたのに相談してこ  
ないんだから悩んでないなんて言葉信じられるか!!」うぐっ」

Ryoはアイカに詰め寄るように言葉を捲し立てる。

Ryoは避けるだけで反撃してこなかったアイカの肩を掴んだ。

アイカ:「うわっ!?!」

Ryoが急に掴んだためアイカが素っ頓狂な声をあげた。

そのままRyoはアイカへ膝蹴りを放つが、アイカはそれよりも早くみぞおちへ蹴り  
を叩き込むと続けざまに足刀を放つ。

アイカ:「っは!」

Ryo:「ぐっ!」

アイカの蹴りを受け、Ryoは数メートル飛ばされた。

すると、Ryoの転晶石にヒビが入った。

Ryo:「……やつと……反撃し……たな……模擬戦なんだからもつと避けるだけじゃなく反撃もしろ！確かにアイカ、あんだの中ではまだ折り合いがついてないんだろ。けど、こんな時にこそ人に頼らなきゃ、そうでなきゃあんだが壊れる。」

アイカは唇をグツと噛んで目を伏せていた。

Ryoはそんなアイカから目を離さず、話を続ける。

Ryo:「モコから聞いたんだ。けど、あえて黙ってた。アイカさんが話してくれることを信じてたんだ。頼ってくれるって！一人で悩むなって、約束しただろ!」

アイカはRyoの問いに、言葉に詰まった。

アイカ:「……そ、れは」

Ryo:「……確かに人を守ろうとするのは、その志は良いものだと思う。けど、全員は救えない」

Ryoは肩で息をしながらアイカに再び問う。

Ryo:「アイカさん、どうして俺のギルドに入ることにしたんだ？どうして、死んでいった奴らの分まで、生きようと思ったんだ？」

Ryoはゆっくり、言葉を切りながら言った。

アイカは少し自分の考えをまとめるように沈黙していた。

それをRyoは黙って見つめ、答えを待った。

アイカ：「・・・最初は、そうするしかないと思って、入りました。」

アイカ：「でも、私が、皆と過ごごしていた頃みたいなのに、あの時、“見ず知らずの他人”を・・・」

アイカの言葉を、Ryoは相槌を打ちながら聞く。

Ryo：「うん」

アイカ：「助けようと、一生懸命に駆けつけてくれたRyoさんが本当に、嬉しかった。・・・だから、つい差し伸べられた手を、取ってしまった。・・・でも」

Ryo：「・・・でも？」

アイカ：「本当は、Ryoさんの手を取ることなんて許されていないって後から気づいた。でもその時は皆が笑って許してくれるって、都合よく考えた。」

Ryo：「けど、星天の皆が書いた日誌を見る限りでは、アイカさんはすごく慕われてて、いつも星天の皆の言動に振り回されてるけど、ちゃんと頑張ってるギルマスやってるって、そんな気持ちが字から表れてたよ。」

アイカ「っ、でも私はっ！」

Ryo：「助けられなかったって？」

アイカさんが思っているほど、星天の人達はアイカさんの事を嫌ってないだろ？そん

な事を言うような人達だった？ 皆の事を好きだったんなら、それくらいわかるでしょ？  
アイカさん、あんたはそこまで恨まれるような事をした？

そうじゃないんなら、

星天の皆の死を冒瀆しているのと同じなんじゃないのか？。」

アイカ：「っ！」

アイカはRyoの言葉にハツと息を呑んで、顔をくしやりと歪め、伏せた。

Ryo：「もう一度聞くよ、アイカさんはどうしてここにこようと思った？ 始まりの街や攻略済みの下層で、細々と暮らすっていう道もあつたんじゃないのか。」

アイカ：「・・・それでも、」

Ryo：「死んでいった人の分まで生きようと思ったから？」

アイカ：「・・・はい」

Ryo：「それなら尚更、」

アイカ：「でも！ 償いをしなきゃと思つたから！ 皆のいた星天のギルドホームを守ることも！ 残された私の使命だって・・・」

すると、Ryoはアイカを諭すように聞いた。

Ryo：「でもさ？ それに囚われていたら先に進めない。それでもまだそんな事を続けるなら俺は止めない。どうする？」

アイカ?・・・私は・・・皆と笑顔で過ごしたい!だから・・・  
とアイカは一呼吸置くと

アイカ?私は戦う!“二度と失わないように!”  
と叫ぶが否や、Ryoへハイキックを見舞う。

Ryo?っ!(呪転装がなけりや死んでたな、俺w)

ハイキックをまともに喰らったRyoは右へ吹き飛ばされた。  
しかし、Ryoはゆっくりと身体を起こして立ち上がった。

Ryo?っ!次でっ最後だっ!

と四神の加護(ししんのかご)「転化之怨虎(てんかのえんこ)」と発動する。

アイカ?・・・!(今までで一番強い覇気・・・だけど・・・)

とアイカは小さく息を吐き、構え、「固有呪霊装」《星落(ほしおとし)》を発動した。  
双方が同時に走り出す。

Ryo:「獄炎殲煌術・奥義っ!《獄煌炎》うおおあああ!!!

と武器を捨て、乳白色の炎を両腕に纏った攻撃を繰り出すRyo。

コハル:さ、流石にアイカさんが・・・Ryo・・・

今度こそ止めに入ろうとするコハルを春華が肩に手を置き止める。

アイカ：はっ！っ！・・・はあっ！

アイカはRyoの強烈な攻撃を全て受け切った後、何を思ったか、自分の得物を仮想の空気に置くように手放した。

Ryo：はあっ!?（嘘だろッ!?）

アイカ：っ!!

Ryoが驚いている僅かな隙を逃すはずはなく、アイカは距離を詰め、右ストレートを放つ。

Ryo：うおっ!!

アイカの拳を受け止めようとしたが、バランスを崩した。

それに気づいたアイカは拳を開きRyoを投げ飛ばし、拾っていた剣を拾い上げRyoの首筋に刃を突きつけた。

アイカ：チエックメイト・・・で良いですよね？

ひとまず模擬戦は終わりにしましょう。疲れたし、私も色々吹っ切れることが出来たので。

Ryo：スッキリしたでしょ？

アイカ：そうですね。

（・・・こんなにスッキリしたのはあの時以来かも♪）

Ryo? あー(ゞ)(≧皿≦メ)(ノ) 負けた負けたー・・・けど、トーナメントがあるし、その時に絶対勝つっ！だから、お互いに勝ち上がってまた、戦おう！

アイカ：そうですね！次も勝たせてもらいますよ？

その時のアイカは今までで

一番の自然な笑顔だった。

# 第13話 『夏期・合同強化合宿 2—2 』

ビーチにて

大勢の人数の中でけたたましい解説が響き渡る。

解説者? さてー! いいよいよトーナメント戦最終日ですねっ!? 終わってしまうのが寂しく感じますが泣いても笑っても、これが最後っ!! それでは、選手の入場ですっ!!

と同時に拍手喝采が起こる。

そんな中、解説者の女の子が紹介を始めた。

解説者? まずは、こちらの選手っ!

あらゆる強者を薙ぎ倒し、ここまで勝ち上がってきた黒き流星っ! 《星天》の元・ギルマス、「アイカ」選手ですっ!

とアイカが入場し、フィールドの中央へ進む。

解説者? 続いてはこの選手ですっ! 元・攻略組でありながら呪祓師・《四大騎師》の1人で、圧倒的なスピードと武器を切り替えながら戦うその姿から『殲滅の奇術師』と呼ばれている「Ryo」選手ですっ!



フィールドの中央にRyoが来るとお互いに一礼する。

そのあと、解説者がルールの説明をした。

解説者？それでは、ルールを説明します！

まず、転晶石とポーシヨン、結晶系のアイテムの使用は出来ません！

次にお互いのどちらかが戦闘を続けられなくなった時、もしくは降参を宣言した時に終了となります！尚、能力の使用も可能です。

それでは両者、構えっ！

と2人は無言で剣を抜いた。そして、

解説者？始めっ！

その合図と共にアイカは動き出した。

解説者？アイカ選手っ！先手必勝！真っ先に斬り込んだ！

だが、次の瞬間アイカの一閃は空を斬った。

そして、後ろに気配を感じたアイカは即座に距離を取った。

なぜなら、アイカの背後にRyoが居たからだっただ。

流転流（るてんりゅう）基礎の型・《流 “ながれ” 》だ。

流はその名の通り、相手の勢いを利用して受け流す技で、例えるなら、合気道の入身

転換（にゆうしんてんかん）と同じ原理だ。

解説者？おっと？何を思ったか？アイカ選手、距離を取ったっ!?それにRyo選手は殆ど動く気配がない!?

アイカ？（多分Ryoさんは蹴り技が主な攻撃手段だと思っっているはず・・・だけど、このまま続くとこちらが不利になる・・・それなら「星落」でケリを着けよう・・・）

Ryo?・・・（アイカは蹴り技を混ぜた攻撃が主なスタンスだろう・・・その場合、リーチの長さからいって、接近戦は間違いなく不利!・・・だったら・・・遠距離から仕掛ける!）

とRyoが手を開き、アイカへ向けたその時、無数の火球がアイカへと放たれた。

Ryo?・・・はあっ!!獄炎術・「弾解乱波」だんかいらんは!」

解説者?今度はRyo選手が遠距離攻撃を仕掛けたっ!しかもかなりの量だが、アイカ選手はどう立ち回る!?

アイカはRyoの攻撃を見切りながら、回避に専念するが突然、避けるのをやめた。すると次の瞬間、

アイカ?・・・星落「ほしおとし」

Ryo?っ!ぐあはあっ!

Ryoが突如、吹き飛ばされた。

解説者？ここでアイカ選手の固有呪霊装が発動したあつ！

Ryo? たつく・厄介だ・

だが、Ryoはゆっくりと立ち上がると剣等の武器と鎧を解除すると次の瞬間、アイカの腹部に強烈な激痛が襲った。

アイカ? ・ ・ ・ ごほっげっほ ・ ・ ・ (一体、何が)

うつ伏せに倒れているアイカの前にRyoが立っていた。

解説者？アイカ選手の固有呪霊装は《星落》ほしおとし《》！相手に攻撃をした時や相手の攻撃を受けた時にその時のダメージを倍にして返すものだが!?なぜ、攻撃が通じた!?

Ryo? まだ、やれそうか?

アイカ? ・ ・ ・ 行けますよ?

と笑みを浮かべたアイカは

Ryo? ・ ・ ・ つ!

一瞬の隙を逃さず、Ryoの鳩尾へ蹴りを叩き込んだ。

——その日の夜

Ryo? ・ ・ ・ はあ ・ ・ ・ まだだ ・ ・ ・ こんなんじゃ！ “また失ってしまっ！” それだけ絶対につ！

とRyoは宴会に参加せず、型稽古を黙々とこなしていた。

Ryo?・・・くそっ!体がつ!こんなことで・・・くたばってたまるか・・・

だが、夕食も取らずにやっていたために倒れ込んでしまった。

だが、気配を感じたRyoは叫んでいた。

Ryo?っ!誰だっ!

アイカ?あつ・・・えつと・・・アイカですけど?

すると、振り向いた先にはアイカが立っていた。

Ryo?・・・ごめん、大声出して・・・

アイカ?こんな時間まで修行してるんですか?・・・というか宴会、出なくて良いん

ですか?

アイカがRyoへそう問うとRyoは歯を喰い縛り・・・

Ryo?・・・俺にはそんな時間はない・・・

とRyoが答えると同時にコハルが息を切らしながら、やって来た。

コハル?・・・Ryo!?!ここにいたんだ・・・

とコハルはそう言いながら、ストレージから料理を取り出した。

コハル?・・・Ryo?

だが、気づくとRyoは泣いていた。

Ryo?俺は・・・二度と失いたくない・・・だけど・・・

一方、アイカは近くの木に寄りかかって2人のやりとりを黙って聞いていた。

Ryo?俺は人よりも格闘センスはない・・・能力にかまけすぎて・・・結果はこのザマだつ!こんな、また同じことを繰り返すだけだつ!

コハル?・・・

Ryo?・・・だから、俺は人よりも倍の倍、それ以上に

とRyoは嗚咽を交えながら話していたが、ついには号泣してしまった。

アイカ?・・・

Ryo?なんでだ・・・なんで・・・こんな・・・俺のせいだ・・・俺のせいで呪転皇や浄天は死んだ!コハルや先生達を・・・巻き込んだ!

Ryo?なんで・・・なんだよ・・・

すると、目の前に柔らかい感触とほんのり甘い香り、そして何度も聞いてきた声がした。

コハル?・・・Ryo・・・

その声の主はコハルだった。

コハル?・・・もう・・・無理しないで・・・

とコハルは目尻に涙を浮かべながら震える声でそう言った。

アイカ：・・・（なんか、2人の世界に入ってるな）

とアイカがそう思った次の瞬間

Ryo? つ!

コハル?・・・きやつ!

Ryo? ようやく、分かった・・・

とRyoは突然、コハルを突き飛ばした。

Ryo? 俺は・・・甘えすぎていたんだ・・・

とRyoはそう言いながら、転移結晶を懐から取り出した。

アイカ?・・・!

Ryo?・・・コハル、ごめん・・・それと皆に伝えてくれない?

次の瞬間、Ryoの姿は消えた。

コハル? つ! Ryo! Ryo! ..

アイカ? ..

アイカはため息を吐きながらコハルに近づき、肩に手を置く。

コハル? .. そんな・・・嫌だよお! 嘘つきつ! 一緒に生きて帰るって・・・約束した

のにいい!

アイカ? コハルさん、ひとまず落ち着いて下さい・・・何処に行ったかわからない以

上迂闊に探すことは出来ませんが、《1つだけ》方法があります。

一方、とある場所

Ryo?・・・さあ?来いっ!

Ryoはそう言いながら剣を抜くと、モンスターの群れへ特攻した・・・

翌日、昼間のビーチにて

アイカはコハルとパラソルの下にいた。

コハル?・・・アイカさん、本当に来るんですか?

アイカ?うん、きつと来ますよ!・・・

とそう話していた時に突然、後ろから気配がした。

振り向くとそこにはRyoがいた。

コハル?Ryo! 良かった・・・

アイカ?コハルさん!その人はRyoさんじゃないです!

と違和感を感じたアイカはすぐさまコハルの腕を引き、庇うように前へ出る。

Ryo?・・・良く、気づきましたねえ?

アイカ:誰ですか!貴方は・・・!

Ryo?私は"シーザー"

コハル:Ryoをどうしたの!?

シーザー？見れば分かるでしょう？乗っ取ったんですよ？

そして、アイカとコハルの間にシーザーが答えた次の瞬間、アイカとコハルを一瞬で吹き飛ばした。

コハル？クツ・・・！

アイカ？っ！（強い・・・！）

するとシーザーが左右から水平に両手を振るうと斬撃が放たれた。

シーザー？《ガスト・ソード》っ！

アイカはコハルを守ろうと再び飛び出す。

アイカ／コハル：っ！／うっ！

だが、あまりの威力に2人は吹き飛ばれた。

シーザー？面白いですねえ？何故ですか？嫉妬している相手を庇うとは？

とシーザーはアイカへ訪ねる。

アイカ：嫉妬なんて・・・してない・・・

シーザーの問いにアイカは顔を伏せて答えた。

シーザー？ははははっ！ww貴方は殲奇と緋翠に対して《ふたりだけの世界に入って

るな〜？》と思ったでしょう？

アイカ：それは嫉妬なんかじゃない！



シーザー？それなら、何故《隠れる》必要があつたんですか？

アイカ？・・・お邪魔かと思つただけ・・・

シーザー？さっきの間はなんだったんでしょねえ？

アイカ？さっきから何が言いたいの？

とアイカはシーザーへ聞くと

シーザー？最初の間が空いていたのは何故かと？

アイカ：それを聞いて何になるの？ただ恋バナでもしたいだけならお仲間とどうぞ？

とシーザーへ言つた次の瞬間、

シーザー？決めました・・・今から貴方のお仲間の所へ送つて差し上げましょう？

と満面の笑みでそう言うときアイカの心臓を貫いた。

アイカ？っ！・・・かはあっ！！

コハル？アイカさんっ！

とコハルはアイカへ駆け寄るがアイカは膝をつくとき力なく前のめりに倒れた。

コハル？・・・

シーザー？安心して下さいね？貴方もすぐに逝かせて差し上げますよ？

その後、本物のRyoと黒髪のロングヘアの女の子“ユイ”が異空間からやつて来た。そして、Ryoがシーザーを食い止めている間にユイは瀕死のアイカと戦意を失つ

たコハルを《星天》のギルドハウスへ繋がる異空間へ押し込むと異空間の先にいたメアに託して、Ryoとシーザーへ立ち向かった。

Ryo? 『気装武転術』っ! . . . よくもつアイカとコハルをつ!

Ryoは白色のまだらの気を身に纏うとシーザーへ突っ込む。そして、ソードスキル“レイジ・スパイク”に纏った『呪転波』をゼロ距離で放った。

ユイ? Ryoさん! ダメです! 彼にダメージを与えること

シーザー? おやおや? そんなになつてどうしたんですか?

だが、シーザーは刺された箇所を“気化”させて回避すると同時にユイの頬を叩いて吹き飛ばした。

ユイ? つ! きやつ! . . . うう . . .

Ryo? ユイっ! . . . シーザーあつ!

とぶちぎれたRyoはシーザーへ猛攻を仕掛けるが、同じように“気化”で攻撃を回避され、カウンターを喰らい、後方に大きく吹き飛ばれた。

Ryo? つ! ゴホッ . . . くっ! . . .

シーザー? ムダですよ? 諦めなさい . . .

とシーザーはうづくまつているRyoへそう言う

とユイ? つ! ムダじゃないです! . . . ひゃあつ!?

ユイのレイピアの一撃を気化で回避した。

そして、ユイはRyoへ覆い被さる体勢になったことで赤面した。  
するとRyoはユイを退かすと

Ryo?・・・俺には・・・信頼しあえる“仲間”がいるっ!

シーザーへそう言うのと赤いまだらがかかった気を身に纏うと

Ryo?・・・だから!

シーザーへ一気に距離を詰め、

シーザー?っ!?

ユイ?・・・

Ryo? 「二度と失わねえっ!!」・・・『心荒覇』っ!!

とシーザーへ左右の薙ぎ、腹部に突きをそして、そのまま斬り上げを放つ。

シーザー?っ!かはあっ

3連撃 片手直剣ソードスキル 『サベージ・フレイム』に纏った『心荒覇』をゼロ距離で喰らったシーザーはそのあと、白目を向いて仰向けに倒れた。

## 第14話 『モノの価値と好きの形』

とある海の浜辺に建つ、白色の館

その館から、白のコートに黒い薄手の長ズボンを着用した1人の青年が出てきた。

Ryo? んじゃ、何か作ってサプライズしようかな? . . . (喜んでくれたら、いいなあ . . . )

と青年、"Ryo" はそう呟いたあと、真つ先に釣りへ向かった。

22層の湖にて

ニシダ? おお! Ryoさんじゃないですか!?

とRyoが早速釣りを始めようとしたとき、ニシダさんが声をかけてきた。

小太りの体型に薄手のカフエオレ色の半袖と緑色のベスト、そして黒い薄手の長ズボンを着用した年配の男性だ。

ニシダさんとは一時期、釣りを一緒にやっていたがしばらく会っていなかったので久しぶりに会った。

ニシダ? これから、釣りをやられるんですよね? でしたら、オススメの場所がありま

すがそこでやりますか？

とニシダさんがRyoに提案する。

Ryoがどうしようか悩んでると、赤色の装備をしているセミロングに緑色の目の少女、コハルが声を掛けてきた。

コハル？ Ryo！

Ryo？ コハル？ 何でここに？

コハル？ 気分転換でここに来ただけけど、その時にニシダさんに声をかけられて釣りをしていたの

とRyoの問いにコハルは答えたあと

コハル？ それで、オススメの場所へ今から、ニシダさんに案内してもらえただけだね？ よかったら一緒にどう？

コハルはRyoを誘うとRyoは快く了承してニシダさんの言うオススメの場所でコハルと釣りをする事になったが・・・

コハル？ うーん・・・中々釣れない・・・

Ryo？ つ！これなら！どうだ！

とRyoが勢い良く竿を振ったがために釣り針がコハルの「ブローチ」に引っ掛かり、そのまま湖へ落ちた。

Ryo? コハルっ! ごめんっ!

コハル? うん、大丈夫・・・

とコハルは言ったものの表情は暗く、とても大丈夫そうには見えなかった。

コハル? あのブローチ・・・昔、付けてたのと同じ物だったんだ・・・あれを付けてると初めてで不安なことでも不思議と頑張れる気がしたの・・・

Ryo?・・・

そこまで、聞いたRyoはあるピラを見せると

Ryo? この優勝景品、欲しがってた物だっけ?

コハル? それはそうだけど・・・

Ryo?・・・必ず、プレゼントするから・・・待っていてくれるかな?

コハル?・・・うん

そうして三日後、釣り大会当日

晴天の空の下、巨大な湖の周りには沢山の人がいた。

その中にコハルやアスナ、ユウキがいた。

ニシダ? それでは、これより『第22回 釣り大会』を開催します!

とニシダさんの一声で周囲が盛り上がると、ルール説明が始まった。

要約すると30分の制限時間があり、その時間内に質の良い魚を釣り上げる。

そして釣った魚にはそれぞれ「ポイント」が振られているのだが、そのポイントで競う大会らしい。

ニシダさんの説明が終わると同時に開始の声がかかった。開始から25分が経過した頃、

コハル? やつたあつ! Ryo! 見て! この魚、ピカピカしてるよ!?

ニシダ? おお、中々の大物ですなあ!

ユウキ? うん! 凄くキレイな魚だね!

アスナ? 美味しそうな魚ね?、帰ったら煮付けにでもしようかしら?

コハル? Ryo? そっちは・・・あつ・・・

Ryoの釣果は「サツク・フィッシュ」のみで思うように行かず、焦ったRyoはサツク・フィッシュが入ったバケツをひっくり返してしまった。

結果、バケツの中にあつたサツク・フィッシュはほとんど湖に流れていった。

Ryo?・・・つ! 万事休すか・・・「ダメだよ!」

Ryoが諦めかけたその時に声がかした。

ユウキ? 無駄かもつて思うかもしれないけど、それでも最後までやってみることは無駄じゃないと思うんだ・・・

Ryo?・・・ユウキ・・・

ユウキ？それに・・・ここで諦めたら、きつと後悔すると思う。

とユウキが言うと

アスナ？そうね・・・だからまだ諦めないで？私の勝手なお願いだけどコハルの為にも・・・だって、自分の為に頑張ってくれている人が諦めるのを見るのは辛いと思うから・・・

Ryo？アスナ・・・

コハル？あのね？Ryoがくれるものなら私は何だっていいの。だから、優勝にこだわらずに今は釣りを楽しもう？

Ryo？・・・ありがとう！もう少し粘ってみる！

とアスナ達へ言ったその時だった。

Ryo？っ！一か八かだ！

すると、何を思ったかRyoは釣り針にサク・フィッシュをひっかけると湖へ竿を振った。

Ryo？っ！・・・ビンゴ・・・かつ！

すぐに針にナニかが掛かるが、ナニかの力が強すぎて気を抜けば、竿ごと持ってかれるそんな状況だ。

Ryo？っ！『呪霊刻印符』っ！「身強刻印」しんきようこくいん”



とつさに呪転装を使って身体能力を上げたRyoはそのまま、思い切り引つ張った。すると2階建ての一軒家と同じくらいの高さと幅がある6本足を持つ、オレンジ色の巨大な魚が中へ舞うと地面へ直立した。

次の瞬間、

Ryo?・・・呪転波

巨大な魚の身体を青い一閃が穿つと巨大な魚は力なく地面へ倒れた。

その後に表彰式があつたがヌシを釣り上げたRyoの優勝だった。

そして、表彰式が終わつたあとRyoは景品の“フォルテ・ブローチ”をコハルへ渡した。

Ryo?あのときはごめん・・・

コハル?ううん、いいよ?

それとね・・・はい、これっ!準優勝の景品で貰つたものだけど

とコハルはRyoへ渡す。

Ryo?っ!ありがとう、大事にするよ( ^ ω ^ )

ニシダ?これで一件落着ですな

とニシダさんがそう言った瞬間、ナニかが飛来した。

コハル:な、なに!?

Ryo? つ! “流楼”のキクラゲ・・・

キクラゲ：標的発見、だなあ?

と気味の悪い笑みを浮かべながら近づいてくる痩せた男。

アスナ? 誰なの!?

ユウキ? なんか、気味が悪いよお・・・

キクラゲ：良い女に囲まれて幸せだなあ? お前え

Ryo? つ! 伏せろ!

アスナ? えっ? ちよっ!

ユウキ? わあ!

キクラゲ：避けたか

Ryo?・・・武装色の覇気か・・・いや、そんなことはどうでもいいっ! 「焔炎術」

“武装”っ!

とまだらがかかった金色の炎を身に纏うとキクラゲヘレイジ・スパイクを放つ。

キクラゲ：てめえには俺の実験台になってもらうぜえ!

刹那、とてつもない風圧と共に青白いスパークが迸った。

Ryo? つ! ああああつつつ!

だが、競り負けたRyoはそのまま数m後ろへ吹き飛ばされた後キクラゲの能力によ

る攻撃を喰らった。

Ryo?つかはあ・・・!

キクラゲ：アハハははははあ!!

ニシダ?・・・な・・・なんとということだ・・・あのRyoさんが一瞬で・・・

キクラゲ：まだまだ終わりじゃねえぞお!

Ryo?つ!コハルつ!皆を・・・逃がせ!!

とRyoはありつたけの声で指示を飛ばす。

コハル：わ、わかった!

Ryo?気炎・・・万丈つはああつ!!

とRyoは煌炎術と同時に気炎万丈を発動させてキクラゲを吹き飛ばす。

キクラゲ：なっ!?

Ryo?武装つ!「閃煌」〃レイジ・スパイク〃

と再び、青白いスパークが迸った。

Ryo?うらああつ!

キクラゲ：ぐああ!

剣の甲高い音が響き、キクラゲを吹き飛ばしたRyoは剣を構え直した。

Ryo?・・・仲間に出したお前を・・・許さない・・・

Ryoはそこまで言うて姿を消した。

Ryo? シーザーはアイカを瀕死にして、お前はコハルだけじゃなく他の人達を巻き込んだ・・・

キクラゲ：っ!?

と思いきや、Ryoはキクラゲの背後にいた。

Ryo? そんな「お前達」をぶっ飛ばして、この層をクリアするっ! 「幻殲・・・昇龍」っ!

気配に気づいたキクラゲはすぐに振り返るが同時に黒の一閃がキクラゲを捉えた。

キクラゲ：ぐあっ!!

そして、まともに喰らったキクラゲは鮮血を吹き出しながら海岸に叩きつけると、白目を向いて地面へ倒れた。

そして、Ryoも力なくその場に倒れたが10分後にRyoの意識が戻った。

コハル? Ryoっ! よかった・・・ホントに・・・

その日の夜Ryoはコハル達をビーチへ残してギルドホームへ戻るとアイカが玄関の扉の前に立っていた。

アイカ：・・・

Ryo? ん? どうしたんだ?

声をかけられたアイカはハツと我にかえつたようにRyoの方へ振り返る。

アイカ? ごめんさい、Ryoさん・・・コハルさんを守れなくて・・・シーザーと戦った時、私は自分自身すら守れなかった。

するとアイカは落胆した様子でRyoへ話す。

Ryo? ・・・いえ、僕の方こそアイカさんを守れなかった・・・ごめん・・・けど、アイカさんが助かって良かった(・・・)こうして、立って話せているから

とRyoはそうアイカへ言った後、しばらく複雑な表情をして何かを考えていた。

アイカ? ・・・あの・・・Ryoさん?

とアイカに声をかけられたRyoは我に返った。

Ryo? あつ、ごめん大丈夫・・・ありがとう

アイカ? コハルさんの様子はどうですか? ・・・あれ以来まだ会っていないくて

Ryo? コハルは大丈夫だよ、心配してくれてありがとう

とRyoはアイカへそう告げるとその場を去ろうとした。

アイカ? ・・・Ryoさん、何かあつたんですか? "

Ryo? んあ?

とアイカが突然、Ryoへ聞いた。

その問いに対して、Ryoは

「トーナメントの優勝者がとある信仰派ギルドの殲滅と確保をするということ」  
 「本部からの指示でRyoともう2人が参加するということ」

そして、何か裏があるんじゃないかと疑念を持っていることをアイカへ伝えた。

優勝者は「アイカ」、「コハル」、

「加藤 春華」、「黒崎 影次」、「清水 美月」の5人だ。

そして、今までのボス攻略やオレンジギルドの殲滅と確保、呪物祓いの功績がある為に結果、本部から指示を受けて、Ryoも向かうことが出来るようになった。

アイカ?・・・

Ryo? だけど、今までのオレンジギルドとは違う・・・下手すれば、「死ぬ」。だから・・・

アイカ? : Ryoさん、私は今まで星天の人達がこの世界で生きる希望だった。でも、「今」はRyoさんやコハルさん達がいる。・・・だから、行きます・・・「星天」を守る為に

Ryo? : ...分かった、集合場所があるけど遠いから、ほら! 手っ! これ「紫の結晶」じゃないと集合場所に行けないから

アイカ : 手?

Ryo? : この結晶は次元を歪めることで異空間が出来るけど、少しでも壁に触れたら

そのまま取り込まれてしまうからそうならないように手を繋ぐのっ！さあ！行くよ！

とアイカへ説明を終えると手を差し出す。

アイカ？・・・（手を握るって・・・でもそうしないと異空間に取り込まれるって言うてたし・・・）

うーん、後で殺されないかな？

とRyoとアイカは集合場所へ来るとアイカはその場でうずくまった。

アイカ？・・・ふうー（くくっ、なんか緊張した。・・・？　なんで緊張なんか・・・）  
とアイカが唸っていると春華が話し始めた。

内容は念のため二人一組のパーティーを組んで、ペアで動くというものだ。

基本的に戦闘に長けた人物と組むと言うことで途中から助っ人として参加することになった深雪と比奈も混ざり、ペアはRyoとアイカ、春華と深雪、美月と比奈、影次とコハルということになった。

そしてペアが決まった後、春華がRyoへ耳打ちする。

春華？　「レイドリーダー」さん？　宜しくね

Ryo？　はあ・・・

と近くにいたアイカはキョトンとした表情でRyoへ尋ねた。

アイカ？　大丈夫ですか？

Ryo? ああ、ごめん・・・大丈夫

とRyoはアイカへそう言う

Ryo?・・・これよりっ! 「トワイライト信仰派ギルド」『死の鳥』 デス・バード  
“ の討伐戦を開始するっ! 普段以上に周囲へ注意を向けつつ、迎撃出来るようにするこ  
と! 戦闘前や戦闘中等のその時々々の状況に応じて、不利と感じた場合、撤退も視野に入  
れるように! 以上!

とRyoは指示を飛ばすと一同は夜道の森林を進んだ。



SAOIF 剣魔録 、『アンパンマン』 夜空に輝くふたつの星 前編 』

ある日の夜、とある森林――

Ryo：恐らく、この先の別荘に奴らがいる！注意し――

コハル：っ！Ryo！上からなに――

Ryoとコハルの警告の言葉を遮るかのように6人の男女が逃げ道を塞ぐように立っていた。

春華：っ！何……？

影次：あかん、力が……

突如、針が刺さった感覚と共に強烈な睡魔と倦怠感がRyo達を襲うとそのまま意識を刈り取った。

とあるギルドホームの一室

友理奈：絶対にコハルを私の物にするっ！ハルト、モトヤス！行くわよ！

友理奈：こいつら以外は、のだれ死んでもらうわ……戻って来たときには多少減って

くれるといいけどね——)

???

Ryo: (ここ……は?)

目を覚ましたRyoは辺りを見渡す。

青々とした広い草原、容赦なく照りつける日差しそして——

Ryo: ……? そういえば、なんか重いな——つてはあ!?! 何で、服の感触が!?

水色と薄紅色の髪に髪と同じ色の薄生地ワンピースを着た姉妹と思わしき双子の女の子が折り重なるような状態で寝息を立てていた。

すると、小さくうめき声を上げながら水色の髪の女の子が起き上がった。

???: キララ? ん? (。・ω・。)

Ryo: ( (^\_^;) ヤホー

???: ……わあ! ごつごめんなさい! キララ! 起きてっ! キララ!

と水色の髪の女の子は僕の顔を見たときに青ざめて薄紅色の女の子を必死に揺さぶって起こそうとしたが起きる気配がまるでない。

Ryo: ( (^\_^;) 良いよ、別に気にしなくてもたださ?)

降りてくれん?

水色の髪の女の子に言ったら、頬を赤らめて僕の上から降りたあと、Ryoに深々と

頭を下げた。

そうして、しばらくたつてようやく薄紅色の髪の子が起き上がった。

??? : キララ!

Ryo : とりあえず……チョットシツレイ

と寝ぼけ眼な薄紅色の髪の子の両脇に手を通すとそのまま隣に降ろした。

話を聞けば案の定、双子の姉妹だったらしく、薄紅色の髪の子がキララで妹、水色の髪の子はキララでキララの姉だとわかった。

キララ : えつとー(――)。名前は?

とキララに聞かれて一瞬、慌てたけど2人に名乗った。

キラリ : 私達の杖が見当たらない……すみません、一緒に探してもらえますか?

そのあと、キラリ達の杖が見当たらなくなり、一緒に探した。

それから5分後に杖が無事に見つかりと2人はRyoへお礼を言った。だが、Ryoの背筋にゾクリと嫌な気配を感じた次の瞬間――

Ryo : つ!

キラリ・キララ : きゃあつ!

金色の花弁を模したものが斬撃となって飛んできた。

とつさに2人を地面へ伏せて、斬撃を躲すとRyoはゆつくりと顔を上げた。そこに

は、金色の鎧に白銀の剣、白髪のロングヘアに青色の瞳を持つ19歳くらいの少女が立っている。

???：その子達から離れて！

Ryo：うおっ！んだよお！いきなり……

と少女が容赦ない連撃をRyoへ放つ。Ryoはなんとか躲すがバランスを崩してしまふ。Ryoへ直撃しようとしたその時、1人の青年が剣を少女の剣を弾いた。

???：リナ、この人はそんな人じゃない！

と少女「リナ」はどうやら、彼の一言で落ち着いたらしく、Ryoへ頭を下げてきた。  
???：「Ryo」？大丈夫かい？

と金髪のシヨートヘアに青色の服を着用した緑色の目の青年がRyoへそういった。

Ryo：ごめん……：僕のことを知ってるっぽいけど、何て言うの名前

リナ：メルトよ？覚えてないの？

と青年の代わりにリナが名前を覚えてくれたけど、やっぱり見覚えがない。

Ryo：っ！そういえば！アイカと皆は!?

周りにアイカ達が居ないのに気づいたRyoは辺りを見渡すがいる気配がまるでしない。そう落ち込んでみると、誰かにトントンと肩を叩かれた。

Ryo：ん？

と金髪のショートヘアに青色の服を着用した緑色の目の青年が僕へそういった。

Ryo? ごめん・・・僕のことを知ってるほいけど、何て言うの名前

リナ? メルトよ? 覚えてないの?

と青年の代わりにリナが名前を覚えてくれたけど、やっぱり見覚えがない。

Ryo? つ! そう言えば! アイカは!

隣や周りにアイカ達が居ないのに気づいたRyoは辺りを見渡すがいる気配がまるでしなかった。そう思い、落胆していると誰かにトントンと肩を叩かれた。

アイカ: Ryoさん、ですよ?

Ryoは振り向くと黒のコートにスカートを身に纏った白髪の少女、*「アイカ」*がいた。

そのあと、アイカは何故か疑問系で聞いてきたがRyoの答えを聞くとアイカは胸を撫で下ろした。

アイカ: 良かった・・・えーと、その人達は?

すると、Ryoへ尋ねた。

Ryo? さんと、ピンクの髪の女の子がキララで水色の女の子がキラリ

Ryoがそこまで答えると

メルト: 僕はメルト

リナ：私はリナです（ ^ω^ ）

アイカ：なるほど。アイカです。よろしくお願ひします。

とリナとメルトが名乗るとアイカも名乗った。

Ryo？　そういうえば、アイカ？　コハル達と連絡取れそう？

突然、Ryoはアイカへ尋ねた。Ryoの勢いに一瞬、たじろいだアイカだったが

アイカ：メッセージも送ったけど、未だに音沙汰がないですね・・・

アイカがRyoへそう伝えるとメルトが「街に向かえば、会えるかもしれない行つてみないかい？」と提案した。

リナ：確かに・・・このまま何もしないよりかはマシだし、行ってみようよ！

キララ、キラリと別れたRyo達は街へ向かった。そして歩いて30分くらい経った時だ――

メルト：見て!?! 街が見えてきたよ!?!

そう言つて、メルトが指を指した。その先には、時計塔を中心にいくつもの一軒家が建ち並んでいた。

すると突然、アイカが声をあげた。

アイカ：Ryoさん！あれつて、コハルさんじゃないですか？

Ryo？・・・念のために僕が確認に行くアイカさんを疑つてる訳じゃないけど、幻

術を使つてるかもしれないし……

Ryoはそこで言葉を区切ると

Ryo?・・・ここで待つて、大丈夫な場合はメッセージ飛ばすから

Ryoはアイカへそう伝えると歩き始めた。その時――

複数の気配が自分達の方に向かって来るのを感じたRyoは咄嗟にその方向へ向くが否や剣を抜く。

だが、

向かつて来た気配の正体はウサギやカバ等の獣人の子供達だった。パツと見て小学2年くらいの子だろうと思つていと巨大な地響きがした為に思わず体勢が崩れる。

???：ハツヒフツへホー!

と声があるが否や、獣人の子供達は「ばいきんまん」と声の主の名前を口に出す。

アイカ：ばいきんまん?

Ryo?っ!アイカさん達は子供達の避難誘導っ!俺はこいつを食い止める!

とRyoは指示を飛ばすとリナとメルトは子供達を避難させる。だが、アイカはその場に立っている。

アイカ:(なんだろ?・・・この感じ・・・Ryoさんがいなくなることを考えたら・・・)

Ryo?アイカさん!

50階建てのビルと同じくらいの体躯、顔を模した球体、その上に4本の角を生やすメタリックシルバーのロボットはアームをアイカめがけて横なぎに振るう。

Ryo?っ!・・・がっはっ!

Ryoはアイカとロボットの間に割って入るとケースでアームをいなすが、力負けで後ろへ吹き飛ばされた。

アイカ：Ryoさん!

ばいきんまん：ガハハっ!どおだっ!思い知ったかつ!?!これぞ俺様の最高傑作、だんだん”の力だあ!ざまあ見ろおw俺様に歯向かうとこうなるのだ!

アイカ：・・・つさない・・・許さないっ!何も知らないくせにつ!Ryoさんをバカにしないでっ!

ばいきんまん：ふんっ!俺様に歯向かう奴がいけないんだよおだw生意気なお前はこうしてやる!

とだだんだんのアームがアイカを掴む。

アイカ：・・・っ!嫌っ!離してっ!

その時、無数の風圧と共に体温を感じたアイカは視線を向ける。すると、悲痛な表情をしたRyoがいた。

アイカ：Ryo・・・さん・・・下ろして?



Ryo? あっ(。・ω・。)ごめん

そう言つて、Ryoは地面に降りるとアイカを下ろした。瞬間――

アイカ：っ！

ばいきんまん：なっ！

ばいきんまんとアイカは背筋が凍るようなおぞましい気配に思わず、萎縮した。なぜなら、Ryoの両腕は血管が無数に浮き出ている上に眉間に深々とシワを寄せて眉をこれでもかと吊り上げたRyoが立っていた。

ばいきんまん：っ！バカな最先端の技術で作つただだんだんだぞ!? 普段とは比べ物にならないくらいに頑丈なのに・・・なんで『斬れている』んだ!?

とばいきんまんは喚き散らす。

Ryo? アイカさん、この剣、勝手に使つてごめん・・・だけど、もう少し借りても良い?

と申し訳なさそうな表情でそう言つたRyoを見て、アイカはキョトンとしたが

アイカ：えっ? はい・・・

アイカがそう答えるとRyoは怒気をはらんだ声でばいきんまんへ告げた。

Ryo? 俺の仲間に手を出したらどうなるかをその身をもつて味わえ!

すると突然、だだんだんが右へ大きく吹き飛んだ。

ばいきんまん：のわああっ！

だが、ばいきんまんをだだんだんを起き上がらせるとアームをRyoへ振り下ろす。

アイカ：っ！はあ！

アイカはすぐさま、間に入って蹴りを放つがびくともしなかった。

アイカ：っ！？

Ryo？ ソードスキル『フレイム・ウエーブ』っ！ 『レイジ・スパイク』っ！

と突きと炎を纏った斬り上げを放ち、相殺すると

Ryo？ アイカ、剣、ありがとう！・・・次で決める！行こう！

アイカ：はいっ！

アイカへ剣を返したRyoは闇を纏った斬り上げの『アサシネイト・ウエーブ』、炎を纏った横一文字の『ジムーン・スラッシュ』、そして突きの『レイジ・スパイク』とソードスキルの連撃で押しきるともう一度、『アサシネイト・ウエーブ』を放つその瞬間――

Ryo？ “スイッチ”っ！

アイカ：スイッチっ！

Ryoはアイカと場所を入れ替わると槍のソードスキルで援護し、アイカは三種類程のソードスキルを叩き込んだ。

アイカ：Ryoさん、お願いします！ “スイッチ”っ！

Ryo?了解!

アイカのいた所と入れ替わると渾身の一撃を放った。

Ryo? ソードスキル・・・『アサシネイト・ウエーブ バースト』っ!

ばいきんまんはだだんだんのアームで防御の体勢をとるとゼロ距離で放たれたスパークを纏った闇の斬撃を防いだが、4つの斬撃がだだんだんに命中する。

ばいきんまん：何っ・・・のわああっっ! バイバイキーン!

その威力に耐えきれず、ソードスキルのダメージが蓄積されたのもあってか爆散して、その風圧でばいきんまんは遠くへ吹っ飛んだ。

## SAOIF～剣魔録～『アンパンマン 夜空に輝くふたつの星～中編～』

Ryo?・・・さて、恐らくは『黄昏の戦乙女』 “トワイライト・ワルキューレ”のギルマスの仕業と見て間違いないと思う。

森林の中へ移動したあと、Ryoは話を切り出した。

コハル：・・・Ryo、本当にこれトワイライトワルキューレの仕業なの？

Ryo? 間違いないっ！十中八九、あいつの仕業だ！実際に僕はそれで・・・

春華：・・・河村君・・・

春華の悲痛な声で我に返ったRyoが「ごめん」と言うときアイカが話し出した。

アイカ：・・・まあ、今のところ友好的で味方とも敵とも言い切れませんし・・・

コハル：でも敵だったらいつ、攻撃してきてもおかしくないよね？

影次：っ!?何が、“友好的関係”やっ！コハルを瀕死にした奴やぞ!?

美月：黒崎くん？ちよつと、デヨカ？

影次：っ!?なんやて！離せっ！

すると影次が突然、怒声を上げたがそれと同時に美月は影次を別の場所へと連れ出した。

Ryo? コハル、アイカ、分かっているだろうけど奴らはラフコフよりも質の悪い奴らだ。

アイカ：はい、わかってます。今は友好的だからといって、はいそうですかと信用できるところがない。

Ryo? そう、友好的とは程遠いうえにメアを見捨てたりコハルを一度殺した挙げ句、瀕死にするなんて尚更だ

とRyoは若干怒気をはらんだ声でそう言った。

Ryo：別次元で一度、殺したといっても狙いはコハルだからなあ・・・

アイカ：内から壊すにしても、1人になった時にその人の弱点を突いたり、間接的にやると思うんですけど・・・

Ryo?・・・いわゆる“精神攻撃”か

アイカ：はい

春華：河村君の言うこともあるけど、物理的なことも当てはまるはず

春華：河村君が反転の呪いを暴走させたとはいっても全然、通じた感じしなかったから実力は充分にあると思うの

Ryo? あれは、要するに邪魔な僕を殺す為の力だろうな

アイカ：まあ確かに、コハルさんを手に入れるのに一番の障害になってくるのはRy  
oさんですからね(――)。)

Ryo? ジュラとフアングを殺したのもそれに関係してるかもしれない

比奈：それに、弱そうなギルドを信仰派のギルドを使って、河村君をおびき寄せたん  
やろなあ(――)。

と比奈がそう言った瞬間、強烈な爆発音が轟いた。

リナ：っ！パン工場がやられてるよ!?

メルト：ついさつき、アンパンマン達が出ていって少しあとだよ!?

と同時にリナとメルトがやって来て、Ryo達に状況の説明をした。

Ryo? っ！あの、クソビツチっ！皆、ここで待つてくれ!

説明を聞いたRyoはすぐさまそこへ向かう。すると巨大な黒影が佇んでいた。

その横に茶髪のシヨートヘアの少年もいた。

ハルト：俺はハルトだ。そして、“クトヨアラ”は友理奈さんの使い魔だ・・・つま  
り、君達の居場所が分かったってことだ・・・クトヨアラ、そいつを始末しろ!

ハルトは剣を抜き、切っ先をRyoに向けるとクトヨアラに命令した。だがその時、  
漆黒の斬撃がクトヨアラを真っ二つにするとそのまま、クトヨアラは消滅した。

アイカ：悪いけど、Ryoさんを殺すなんてさせないから！

Ryo? アイカっ!?! っ、ここに!?

アイカ：いや、嫌な予感がして・・・

Ryo? アイカ、ありがと・・・

アイカ：いえ

ハルト：！コハル!? コハルだよな!?

コハル：え? えつと・・・

ハルト：友理奈さんがコハルを必要としてる！だから・・・頼む！ “幼なじみ” だろ

?

アイカ：コハルさん、相手にしないでください

と次の瞬間

Ryo? つ!・・・ “友理奈”・・・

Ryoは拳をキツく握りしめると赤と黒のドレスを身に纏った少女の名を口にした。

コハル：友理奈・・・

友理奈：あつ! コハルちゃん\ (。▽。)/ 元気して・・・た

Ryo? 『ウセロ』

とRyoがそう言った瞬間、辺り一面が尋常じゃない殺気に包まれた。

メルト：足が、震える・・・

リナ：・・・アイカさんとコハルは凄いよ・・・

コハル：私はすぐくなんかないよ

リナ：だって、これ“霸王色の覇気”だよ？それでまともに立っていられる人はいないから

アイカ：・・・それをいうならリナさんも凄いなと思いますけど

Ryo?・・・

友理奈：気味悪っ！何っ!?あんた達デキテンの？

Ryo?ダメレ・・・

友理奈はRyoの剣撃の猛攻に押されて防戦一方だった。

ハルト：友理奈さん！

Ryo?・・・“シネ”

と友理奈へ止めを刺そうとした時だった。

突如、無数の突きの衝撃波がRyoを吹き飛ばす。

Ryo?っ！クッソっ！

友理奈：あー（――）。めんどくせ・・・おとなしく渡せよっ!!

今度はRyoが追い詰められる番だった。



友理奈：とつとと！くたばれ！この、クソ野郎っ！

Ryo?つかっはっ！

Ryoは最後の突きを喰らい、パン工場へ吹き飛ぶ。

そして、吐血したあと白目を向いたまま動かなくなった。

リナ：Ryo・・・

メルト：・・・そんな

友理奈：・・・さあぐてとっ！行くわよ、コハル

と言うが否や、友理奈はコハルの懐に潜り込むとみぞおちへ一発入れた。

コハル：うっ！

友理奈：んじや、あとの雑魚掃除頼むわね？

ハルト：分かった

アイカ：・・・っ

と友理奈がその場を去ろうとしたその時、漆黒の斬撃が友理奈を襲う。だが、ウザそうに友理奈は斬り払った。

友理奈：何？あんたもデキテンの？そんなきしよい奴に情を持つとかw

メルト：っ！うおおっ！

リナ：メルトっ！ダメ・・・

友理奈：つたく、雑魚が・・・粹ってんじゃねーよっ！

メルト：かつは・・・

リナ：・・・そんな・・・嫌・・・

とメルトを刺し殺した友理奈はリナへ歩みだす。

リナ：嫌・・・来ない・・・で

リナが震える声で、言いかけた時、グサリと妙な音がする

友理奈：あー！めんどろー！もう疲れたし、帰ろー！

ハルト：・・・そうだな

すると、アイカの中でナニかが切れた――

アイカ：ふざけるな・・・二人を殺して、コハルさんを無理やり攫って、執着してる

のはどっち？

友理奈：ああ!? 『今、なんつった?』

と友理奈は尋常じゃない殺気をアイカへ向けると

アイカ：意外と低レベルな煽りにもすぐにキレルんだね・・・アイカ：こんな奴に二

人がやられるなんて馬鹿馬鹿しくなってくるわ・・・

友理奈：まあ、良いわ・・・気絶してるクソ野郎、てめえを殺したら・・・

D

友理奈：どんな面すんだろおなあ!?

すると、一瞬でアイカの懐へ潜り込むが否やみぞおちに突きを放つだが、アイカに届いたはずの突きの波動が自分に直撃した。

友理奈：クソ！なんの小細工使った!?

アイカ：・・・

友理奈：ああ！かったりいなあつ！

と友理奈がアイカへ渾身の突きを放つと青黒い稲妻が辺り一面に迸った。

アイカ：グツ!!

友理奈：っ！いつまでも・・・粘んなつ雑魚がつ！

とアイカを吹き飛ばす。

友理奈：半端者同士のコンビ、良く似合ってわw

そしてなんの躊躇なく、ボロボロのアイカへ止めを刺すと

友理奈はその場を去っていった。

それから、30分後アイカは目を覚ますとうなだれているRyoが隣にいた。

Ryo?・・・アイカ・・・どこか痛くないか？一応、応急措置はしたけど

アイカ：問題ありません、コハルさんは

Ryo?大丈夫だ・・・コハルは今度こそ・・・クツソ・・・んでだよ!

アイカは思わず、開きかけた口を閉じた。

なぜなら、Ryoは顔を酷く歪め、両目からは涙という涙をとどめなく流していたからだ。

Ryo?・・・俺は・・・弱い!・・・何一つ!守れなかった!・・・

アイカ:・・・

Ryo?・・・自分が憎いつ!・・・ひたすらに憎い!何も守れなかった自分が憎い!努力しても何も出来ない自分が憎い・・・

アイカは黙ってRyoの言葉を聞いていることしかできなかった。自分がRyoよりも弱いのはわかりきっていたからだ。

そして、しばらくするとアンパンマン達が戻って来た。

アンパンマン:二人とも大丈夫?険しい顔してるけど・・・

Ryo?・・・

そこへ春華がやって来たがRyoは無言で立ち上がるとリナとメルトの冷たくなつた身体を抱えようとしたがその瞬間、2人の亡骸は光の粒子となって天へ消えた。

春華:・・・河村君、アイカさん・・・

Ryo?・・・

Ryoはリナとメルトの使っていた白銀の剣と氷のような色の薔薇の装飾が施され

た剣を無言で拾い上げたあと、どこか行こうとした。

春華：っ！ちよつと！待って！

Ryo?・・・春華、アイカ達を頼む

春華の静止を効かず、Ryoはそれだけ伝えると紫色の結晶を掲げたあと、消えた。

アイカ：・・・

アイカはリナとメルトの消えた場所をしばらく見つめた。

春華：・・・私も行くけど、アイカさんはどうするの？

紫色の結晶を取り出すとアイカへ聞いた。だが返答はない。

春華：・・・分かった・・・もう行くね？

そう言ったあと、春華の姿が消えたその時

アイカ・・・っ！

突然、後ろに気配を感じたアイカは振り返った。すると、そこには長い白髪に白い道着を纏った男性がいた。

翔来：儂は翔来（しょうらい）じゃ・・・お主とRyoとの違いは「目の前の存在や状況を受け入れ、前に進む努力をする」ことじゃよ？

アイカ：・・・どういふことですか？

翔来：要はお主は、未だに「Ryo」という人間を知る努力、リナとメルトの死を受

け入れ前に進む努力を怠つてるといふことじゃ・・・

アイカ：・・・私は・・・

Ryo?・・・さて、恐らくは『黄昏の戦乙女』“トワイライト・ワルキューレ”のギルマスの仕業と見て間違いないと思う。

コハル：・・・Ryo、本当にこれトワイライトワルキューレの仕業なの？

Ryo?間違いないっ！十中八九、あいつの仕業だ！実際に僕はそれで・・・

春華：・・・河村君・・・

春華の悲痛な声で我に返ったRyoは一言、謝った。

アイカ：・・・まあ、今のところ友好的で味方とも敵とも言い切れませんし・・・

コハル：でも敵だったらいつ、攻撃してきてもおかしくないよね？

影次：っ!?何が、“友好的関係”やっ！コハルを瀕死にした奴やぞ!?

美月：黒崎くん？ちよつと、デヨカ？

影次：っ!?なんやて！離せっ！

すると影次が突然、怒声を上げたが、同時に美月は影次を連れ出した。

Ryo?コハル、アイカ、分かっているだろうけど奴らはラフコフよりも質の悪い奴らだ。

アイカ：はい、わかってます。今は友好的だからといって、はいそうですかと信用できるところがない。

Ryo? そう、友好的とは程遠いうえにメアを見捨てたりコハルを一度殺した挙げ句、瀕死にするなんて尚更だ

とRyoは若干怒気をはらんだ声でそう言った。

Ryo：別次元で一度、殺したといっても狙いはコハルだからなあ・・・

アイカ：内から壊すにしても、1人になった時にその人の弱点を突いたり、間接的にやると思うんですけど・・・

Ryo?・・・いわゆる“精神攻撃”か

アイカ：はい

春華：河村君の言うこともあるけど、物理的なことも当てはまるはず

春華：河村君が反転の呪いを暴走させたとはいっても全然、通じた感じしなかったから実力は充分にあると思うの

Ryo? あれは、要するに邪魔な僕を殺す為の力だろうな

アイカ：まあ確かに、コハルさんを手に入れるのに一番の障害になってくるのはRyoさんですからね（――ω――）。

Ryo? ジュラとフアングを殺したのもそれに関係してるかもしれない

比奈：それに、弱そうなギルドを信仰派のギルドを使って、河村君をおびき寄せたんやろなあゝ（――ω――）

と比奈がそう言った瞬間、強烈な爆発音が轟いた。

リナ：っ！パン工場がやられてるよ!?

メルト：ついさつき、アンパンマン達が出ていって少しあとだよ!?

と同時にリナとメルトがやって来て、Ryo達に状況の説明をした。

Ryo?っ！あの、クソビッチっ！皆、ここで待ってくれ!

説明を聞いたRyoはすぐさまそこへ向かう。すると巨大な黒影が佇んでいた。

その横に茶髪のシヨートヘアの少年もいた。

ハルト：俺はハルトだ。そして、“クトヨアラ”は友理奈さんの使い魔だ・・・つまり、君達の居場所が分かったってことだ・・・クトヨアラ、そいつを始末しろ!

ハルトは剣を抜き、切っ先をRyoに向けてとクトヨアラに命令した。だがその時、漆黒の斬撃がクトヨアラを真っ二つにするとそのまま、クトヨアラは消滅した。

アイカ：悪いけど、Ryoさんを殺すなんてさせないから!

Ryo?アイカっ!?!んで、ここに!?!

アイカ：いや、嫌な予感がして・・・

Ryo?アイカ、ありがと・・・



アイカ：いえ

ハルト：！コハル!?コハルだよな!?

コハル：え？えつと・・・

ハルト：友理奈さんがコハルを必要としてる！だから・・・頼む！“幼なじみ”だろ

？

アイカ：コハルさん、相手にしないでください

と次の瞬間

Ryo?っ!・・・“友理奈”・・・

Ryoは拳をキツく握りしめると赤と黒のドレスを身に纏った少女の名を口にした。

コハル：友理奈・・・

友理奈：あつ!コハルちゃん(。▽。)/元氣して・・・た

Ryo?『ウセロ』

とRyoがそう言った瞬間、辺り一面が尋常じやない殺気に包まれた。

メルト：足が、震える・・・

リナ：・・・アイカさんとコハルは凄いよ・・・

コハル：私はすぐくなくないよ

リナ：だって、これ“霸王色の覇氣”だよ?それでまともに立っていられる人はいな

いから

アイカ：・・・それをいうならリナさんも凄いですけど

Ryo?・・・

友理奈：気味悪っ！何っ!?あんた達デキテんの？

Ryo?ダメレ・・・

友理奈はRyoの剣撃の猛攻に押されて防戦一方だった。

ハルト：友理奈さん！

Ryo?・・・“シネ”

と友理奈へ止めを刺そうとした時だった。

突如、無数の突きの衝撃波がRyoを吹き飛ばす。

Ryo?っ！クッソっ！

友理奈：あー（――）。めんどくせ・・・おとなしく渡せよっ!?

今度はRyoが追い詰められる番だった。

友理奈：とつと！くたばれ！この、クソ野郎っ！

Ryo?っかっはっ！

Ryoは最後の突きを喰らい、パン工場へ吹き飛ばす。

そして、吐血したあと白目を向いたまま動かなくなった。

リナ：R y o . . .

メルト：. . . . そんな

友理奈：. . . . さあゝてとっ！行くわよ、コハル

と言うが否や、友理奈はコハルの懐に潜り込むとみぞおちへ一発入れた。

コハル：うっ！

友理奈：んじや、あとの雑魚掃除頼むわね？

ハルト：分かった

アイカ：. . . . つ

と友理奈がその場を去ろうとしたその時、漆黒の斬撃が友理奈を襲う。だが、ウザそうに友理奈は斬り払った。

友理奈：何？あんたもデキテンの？そんなきしよい奴に情を持つとかw

メルト：っ！うおおっっ！

リナ：メルトっ！ダメ. . .

友理奈：つたく、雑魚が. . . 粹ってんじやねーよっ！

メルト：かっは. . .

リナ：. . . . そんな. . . 嫌. . .

とメルトを刺し殺した友理奈はリナへ歩みだす。

リナ：嫌・・・来ない・・・で

リナが震える声で、言いかけた時、グサリと妙な音がする

友理奈：あー！めんどろ！もう疲れたし、帰ろ！

ハルト：・・・そうだな

すると、アイカの中でナニかが切れた――

アイカ：ふざけるな・・・二人を殺して、コハルさんを無理やり攫って、執着してるのはどっち？

友理奈：ああ!? 『今、なんつった?』

と友理奈は尋常じゃない殺気をアイカへ向けると

アイカ：意外と低レベルな煽りにもすぐにキレルんだね・・・アイカ：こんな奴に二人がやられるなんて馬鹿馬鹿しくなってくるわ・・・

友理奈：まあ、良いわ・・・気絶してるクソ野郎、てめえを殺したら・・・

D

友理奈：どんな面すんだろおなあ!?

すると、一瞬でアイカの懐へ潜り込むが否やみぞおちに突きを放つだが、アイカに届いたはずの突きの波動が自分に直撃した。

友理奈：クソ！なんの小細工使った!?

アイカ：・・・

友理奈：ああ！かったりいなあつ！

と友理奈がアイカへ渾身の突きを放つと青黒い稲妻が辺り一面に迸った。

アイカ：グッ!!

友理奈：っ！いつまでも・・・粘んなつ雑魚がつ！

とアイカを吹き飛ばす。

友理奈：半端者同士のコンビ、良く似合ってわw

そしてなんの躊躇なく、ボロボロのアイカへ止めを刺すと

友理奈はその場を去っていった。

それから、30分後アイカは目を覚ますとうなだれているRyoが隣にいた。

Ryo?・・・アイカ・・・どこか痛くないか？一応、応急措置はしたけど

アイカ：問題ありません、コハルさんは

Ryo?大丈夫だ・・・コハルは今度こそ・・・クツソ・・・んでだよ！

アイカは思わず、開きかけた口を閉じた。

なぜなら、Ryoは顔を酷く歪め、両目からは涙という涙をとどめなく流していたからだ。

Ryo?・・・俺は・・・弱い!・・・何一つ!守れなかった!・・・

アイカ：・・・

Ryo?・・・自分が憎いっ!・・・ひたすらに憎い!何も守れなかった自分が憎い!努力しても何も出来ない自分が憎い・・・

アイカは黙ってRyoの言葉を聞いていることしかできなかった。自分がRyoよりも弱いのはわかりきっていたからだ。

そして、しばらくするとアンパンマン達が戻って来た。

アンパンマン：二人とも大丈夫?険しい顔してるけど・・・

Ryo?・・・

そこへ春華がやって来たがRyoは無言で立ち上がるとリナとメルトの冷たくなつた身体を抱えようとしたがその瞬間、2人の亡骸は光の粒子となって天へ消えた。

春華：・・・河村君、アイカさん・・・

Ryo?・・・

Ryoはリナとメルトの使っていた白銀の剣と氷のような色の薔薇の装飾が施された剣を無言で拾い上げたあと、どこか行こうとした。

春華：っ!ちよつと!待って!

Ryo?・・・春華、アイカ達を頼む

春華の静止を効かず、Ryoはそれだけ伝えると紫色の結晶を掲げたあと、消えた。

アイカ：・・・

アイカはリナとメルトの消えた場所をしばらく見つめた。

春華：・・・私も行くけど、アイカさんはどうするの？

紫色の結晶を取り出すとアイカへ聞いた。だが返答はない。

春華：・・・分かった・・・もう行くね？

そう言ったあと、春華の姿が消えたその時

アイカ・・・っ！

突然、後ろに気配を感じたアイカは振り返った。すると、そこには長い白髪に白い道着を纏った男性がいた。

翔来：儂は翔来（しょうらい）じゃ・・・お主とRyoとの違いは「目の前の存在や状況を受け入れ、前に進む努力をする」ことじゃよ？

アイカ：・・・どういうことですか？

翔来：要はお主は、未だに「Ryo」という人間を知る努力、リナとメルトの死を受け入れ前に進む努力を怠ってるということじゃ・・・

アイカ：・・・私は・・・

Ryo?・・・さて、恐らくは『黄昏の戦乙女』“トワイライト・ワルキューレ”の

ギルマスの仕業と見て間違いないと思う。

コハル：・・・Ryo、本当にこれトワイライトワルキューレの仕業なの？

Ryo？間違いないっ！十中八九、あいつの仕業だ！実際に僕はそれで・・・

春華：・・・河村君・・・

春華の悲痛な声で我に返ったRyoは一言、謝った。

アイカ：・・・まあ、今のところ友好的で味方とも敵とも言い切れませんし・・・

コハル：でも敵だったらいっ、攻撃してきてもおかしくないよね？

影次：っ!?何が、“友好的関係”やっ！コハルを瀕死にした奴やぞ!?

美月：黒崎くーん？ちよつと、デヨカ？

影次：っ!?なんやて！離せっ！

すると影次が突然、怒声を上げたが、同時に美月は影次を連れ出した。

Ryo？コハル、アイカ、分かっているだろうけど奴らはラフコフよりも質の悪い奴らだ。

アイカ：はい、わかってます。今は友好的だからといって、はいそうですかと信用できるところがない。

Ryo？そう、友好的とは程遠いうえにメアを見捨てたりコハルを一度殺した挙げて、瀕死にするなんて尚更だ



とRyoは若干怒気をはらんだ声でそう言った。

Ryo：別次元で一度、殺したといっても狙いはコハルだからなあ・・・

アイカ：内から壊すにしても、1人になった時にその人の弱点を突いたり、間接的にやると思うんですけど・・・

Ryo?・・・いわゆる“精神攻撃”か

アイカ：はい

春華：河村君の言うこともあるけど、物理的なことも当てはまるはず

春華：河村君が反転の呪いを暴走させたとはいつでも全然、通じた感じしなかったから実力は充分にあると思うの

Ryo?あれは、要するに邪魔な僕を殺す為の力だろうな

アイカ：まあ確かに、コハルさんを手に入れるのに一番の障害になってくるのはRyoさんですからね（――ω――）

Ryo?ジユラとフアングを殺したのもそれに関係してるかもしれない

比奈：それに、弱そうなギルドを信仰派のギルドを使って、河村君をおびき寄せたんやろなあ（――ω――）

と比奈がそう言った瞬間、強烈な爆発音が轟いた。

リナ：っ！パン工場がやられてるよ!?

メルト：ついさつき、アンパンマン達が出ていつって少しあとだよ!?  
と同時にリナとメルトがやって来て、Ryo達に状況の説明をした。

Ryo? つ! ああ、クソビッチっ! 皆、ここで待ってくれ!

説明を聞いたRyoはすぐさまそこへ向かう。すると巨大な黒影が佇んでいた。  
その横に茶髪のショートヘアの少年もいた。

ハルト：俺はハルトだ。そして、“クトヨアラ”は友理奈さんの使い魔だ・・・つまり、君達の居場所が分かったってことだ・・・クトヨアラ、そいつを始末しろ!

ハルトは剣を抜き、切っ先をRyoに向けてとクトヨアラに命令した。だがその時、漆黒の斬撃がクトヨアラを真つ二つにするとそのまま、クトヨアラは消滅した。

アイカ：悪いけど、Ryoさんを殺すなんてさせないから!

Ryo? アイカっ! んで、ここに!?

アイカ：いや、嫌な予感がして・・・

Ryo? アイカ、ありがと・・・

アイカ：いえ

ハルト：! コハル!? コハルだよな!?

コハル：え? えつと・・・

ハルト：友理奈さんがコハルを必要としてる! だから・・・頼む!“幼なじみ”だろ

?

アイカ：コハルさん、相手にしないでください

と次の瞬間

Ryo? つ! . . . “友理奈” . . .

Ryoは拳をキツく握りしめると赤と黒のドレスを身に纏った少女の名を口にしました。

コハル：友理奈 . . .

友理奈：あつ! コハルちゃん\ (。▽。)/ 元気して . . . た

Ryo? 『ウセロ』

とRyoがそう言った瞬間、辺り一面が尋常じゃない殺気に包まれた。

メルト：足が、震える . . .

リナ： . . . アイカさんとコハルは凄いよ . . .

コハル：私はすぐくなんかないよ

リナ：だって、これ“霸王色の覇気”だよ? それでまともに立ってられる人はいな

いから

アイカ： . . . それをいうならリナさんも凄いのと思いますけど

Ryo? . . .

友理奈：気味悪つ! 何つ!? あんた達デキテンの?

Ryo? ダマレ・・・

友理奈はRyoの剣撃の猛攻に押されて防戦一方だった。

ハルト：友理奈さん！

Ryo?・・・”シネ”

と友理奈へ止めを刺そうとした時だった。

突如、無数の突きの衝撃波がRyoを吹き飛ばす。

Ryo? つ！クツソつ！

友理奈：あー（――ω――）めんどくせ・・・おとなしく渡せよっ!?

今度はRyoが追い詰められる番だった。

友理奈：とつとと！くたばれ！この、クソ野郎っ！

Ryo? つかっはっ！

Ryoは最後の突きを喰らい、パン工場へ吹き飛ぶ。

そして、吐血したあと白目を向いたまま動かなくなった。

リナ：Ryo・・・

メルト：・・・そんな

友理奈：・・・さあてとつ！行くわよ、コハル

と言うが否や、友理奈はコハルの懐に潜り込むとみぞおちへ一発入れた。

コハル：うっ！

友理奈：んじゃ、あとの雑魚掃除頼むわね？

ハルト：分かった

アイカ：・・・っ

と友理奈がその場を去ろうとしたその時、漆黒の斬撃が友理奈を襲う。だが、ウザそうに友理奈は斬り払った。

友理奈：何？あんたもデキテンの？そんなきしよい奴に情を持つとかw

メルト：っ！うおおっ！

リナ：メルトっ！ダメ・・・

友理奈：つたく、雑魚が・・・粹ってんじゃねーよっ！

メルト：かつは・・・

リナ：・・・そんな・・・嫌・・・

とメルトを刺し殺した友理奈はリナへ歩みだす。

リナ：嫌・・・来ない・・・で

リナが震える声で、言いかけた時、グサリと妙な音がする

友理奈：あー！めんどろー！もう疲れたし、帰ろー！

ハルト：・・・そうだな

すると、アイカの中でナニかが切れた――  
アイカ：ふざけるな・・・二人を殺して、コハルさんを無理やり攫って、執着してるのはどっち？

友理奈：ああ! 『今、なんつった?』

と友理奈は尋常じゃない殺気をアイカへ向けると

アイカ：意外と低レベルな煽りにもすぐにキレルんだね・・・アイカ：こんな奴に二人がやられるなんて馬鹿馬鹿しくなってくるわ・・・

友理奈：まあ、良いわ・・・気絶してるクソ野郎、てめえを殺したら・・・

D

友理奈：どんな面すんだろおなあ!?

すると、一瞬でアイカの懐へ潜り込むが否やみぞおちに突きを放つだが、アイカに届いたはずの突きの波動が自分に直撃した。

友理奈：クソ! なんの小細工使った!?

アイカ：・・・

友理奈：ああ! かつたりいなあつ!

と友理奈がアイカへ渾身の突きを放つと青黒い稲妻が辺り一面に迸った。

アイカ：グッ!!

友理奈：っ！いつまでも・・・粘んなっ雑魚がっ！  
とアイカを吹き飛ばす。

友理奈：半端者同士のコンビ、良く似合ってわw

そしてなんの躊躇なく、ボロボロのアイカへ止めを刺すと

友理奈はその場を去っていった。

それから、30分後アイカは目を覚ますとうなだれているRyoが隣にいた。

Ryo?・・・アイカ・・・どこか痛くないか？一応、応急措置はしたけど

アイカ：問題ありません、コハルさんは

Ryo?大丈夫だ・・・コハルは今度こそ・・・クツソ・・・んでだよ！

アイカは思わず、開きかけた口を閉じた。

なぜなら、Ryoは顔を酷く歪め、両目からは涙という涙をとどめなく流していたからだ。

Ryo?・・・俺は・・・弱い!・・・何一つっ！守れなかった!・・・

アイカ:・・・

Ryo?・・・自分が憎いつ!・・・ひたすらに憎い!何も守れなかった自分が憎い!努力しても何も出来ない自分が憎い!・・・

アイカは黙ってRyoの言葉を聞いていることしかできなかつた。自分がRyoよ

りも弱いのはわかりきっていたからだ。

そして、しばらくするとアンパンマン達が戻って来た。

アンパンマン：二人とも大丈夫？ 険しい顔してるけど・・・

Ryo?・・・

そこへ春華がやって来たがRyoは無言で立ち上がるとリナとメルトの冷たくなった身体を抱えようとしたがその瞬間、2人の亡骸は光の粒子となって天へ消えた。

春華：・・・河村君、アイカさん・・・

Ryo?・・・

Ryoはリナとメルトの使っていた白銀の剣と氷のような色の薔薇の装飾が施された剣を無言で拾い上げたあと、どこか行こうとした。

春華：っ！ちよつと！待って！

Ryo?・・・春華、アイカ達を頼む

春華の静止を効かず、Ryoはそれだけ伝えると紫色の結晶を掲げたあと、消えた。

アイカ：・・・

アイカはリナとメルトの消えた場所をしばらく見つめた。

春華：・・・私も行くけど、アイカさんはどうするの？

紫色の結晶を取り出すとアイカへ聞いた。だが返答はない。



春華：・・・分かった・・・もう行くね？

そう言ったあと、春華の姿が消えたその時

アイカ・・・っ！

突然、後ろに気配を感じたアイカは振り返った。すると、そこには長い白髪に白い道着を纏った男性がいた。

翔来：儂は翔来（しょうらい）じゃ・・・お主とRyoとの違いは「目の前の存在や状況を受け入れ、前に進む努力をする」ことじゃよ？

アイカ：・・・どういうことですか？

翔来：要はお主は、未だに「Ryo」という人間を知る努力、リナとメルトの死を受け入れ前に進む努力を怠ってるということじゃ・・・

アイカ：・・・私は・・・

30分経った頃にRyoとアイカが戻って来た。同じタイミングでアンパンマンがやって来た。

Ryo?・・・っ！クソっ！

アンパンマン：・・・大丈夫？怪我したりしてない？

Ryo?・・・アンパンマンか・・・全然、大丈夫じゃねえよ・・・あのピッチ、何を仕掛けるか分かったもんじゃないから余計に焦ってる・・・あと、コハルはどこにい

るんですか？

Ryoが言い終わると白衣にコック帽の小太りの中年男性、*“ジャムおじさん”*がRyoとアイカへコハルは2階の部屋で安静にしていると伝えた後、2人を部屋へ案内した。

そして、部屋の前に来るとジャムおじさんがノックする

ジャムおじさん：入っても良いかい？

コハル：どうぞ

部屋の中へ入るとRyoはコハルのベットへ向かう。Ryoは身体への違和感がな  
いかを聞いた。アイカも不安そうな表情をしつつ、コハルの身を案じた言葉をかけた。

コハル：2人とも、心配してくれてありがとう（・・）

Ryo：2人は僕に取って大事な存在だから心配するよ？・・（それに・・もつと・・  
もつと、強くないとっ！）

アイカ：Ryoさん？顔、険しいけど、大丈夫？

Ryo？・・大丈夫な訳がない・・今回のことを繰り返さないように・・

ジャムおじさん：焦っても、何も変わらないよ（――）

Ryoは焦っていた。リナとメルトやコハルを守れなかったことの自責の念、無力な

力を恨んでか余計に焦り、眉間に深いシワを刻む。

ジャムおじさん・焦っても何も変わらないよ（ーωー。）大事なものは〃同じことを繰り返さないように努力すること〃そして、周りを頼ることだよ（ーωー。）

Ryoは啞然としていた。胸の内を見透かされたような感覚だったからだ。

Ryo?・・・そうですよね・・・アドバイス、ありがとうございます

だが、アドバイスをしたジャムおじさんの声音と視線からは自分という存在と向き合う〃それ〃と似ていた為かRyoはジャムおじさんへ礼を言った。その時、街の方から爆発音が響いた。

## SAOIF～剣魔録～『アンパンマン 夜空に輝くふたつの星～後編～』

ばいきんまん：ハツヒフツへホー！

その正体はあり得ないほどの巨大を持つ神官のロボットだった。そして、ロボットからの声はばいきんまんだった。

アンパンマン：！ばいきんまんっ!?

ばいきんまん：今日こそ、お前を倒してやる！

次の瞬間、アンパンマンへ右のアームが迫るが左へ躲すと左のアーム、そして両腕の掌底突きが炸裂した。しかし、余波でさらに街はめちやくちやになっただうえにRyO達は吹き飛ばされていた。

アンパンマン：ばいきんまんっ！止めるんだっ！

ばいきんまん：やーなこったっ！これでも喰らえ！

両腕を開くとそのまま、回転した。アンパンマンは距離を取ろうとしたが、余波で破壊された家の壁へ吹き飛んだ。

アンパンマン：・・・ダメだ・・・顔が歪ん・・・で

そして、アンパンマンは気を失ってしまった。たった2発で戦闘不能にする圧倒的な力を前にRyoは手足の震えが止まらなかつた。

Ryo? (怖いのは、皆、一緒だっ!なら・・・) アイカさん、コハル、影次は前衛につ! 春華、美月、深雪は後方支援につ! 俺とユイ、比奈さんは遊撃だっ! 前衛に疲れが見えたらその時点で前衛と代わる!

だが、Ryoは指示を飛ばしつつも己を鼓舞して実行する。

春華：はああっ!

美月：っ!

深雪：・・・

Ryo? っ! 迂闊に近づけない!

ばいきんまん：ホレホレどーした?

だが、近づこうとすれば回転攻撃が距離を取れば掌底突きが来る為か明らかに防戦一方だった。

ばいきんまん：ホレホレどーした?

アイカ：っ! 一点に範囲を絞って攻撃を与えましょう!

影次：くっ! だめや! それやと逆に巻き込まれて全員、お陀仏や!

Ryo? つ！アイカを信じろ！陣形を替える！アイカと俺、コハル、影次は足をつ！  
比奈さんと春華は遊撃つ！残りのメンバーは腕をつ！

コハル：わかった！やろう！

Ryo? この場合は、アスラと同じような立ち回り方でやれば問題ない！行くぞ！

アイカの提案で何かに気づいたRyoは指示を飛ばし、剣を振るった。そのあとはRyo達の攻撃が順調にダメージを蓄積させ、ばいきんまんを劣勢に追い込んでいく。

ばいきんまん：バカな！この俺様が・・・

春華：一気に決めよ！コハル！〃スイツチ〃

春華は片手直剣ソードスキル『グレイシャー・プロント』で動けなくするとコハルへ叫ぶ。

コハル：うん！〃スイツチ〃

位置を入れ替わったコハルは即座に短剣3連撃ソードスキル『フォトン・ファング』を放つとアイカへ叫んだ。

コハル：アイカさん！〃スイツチ〃！

アイカ：了解です！〃スイツチ〃

コハルと入れ替わったアイカは片手直剣の全体単発ソードスキル『スラツシユ・アサシネイト』を放つ。そして、叫んだ。

コハルと入れ替わったアイカは片手直剣の全体単発ソードスキル『スラツシユ・アサシネイト』を放つ。そして、叫んだ。

Ryoはアイカと入れ替わると片手直剣の全体単発ソードスキル『スラツシユ・アサシネイト』を放つが続けて3連撃ソードスキル『バックドラフト』を放った。

ばいきんまん：ええいつ！ちよこまかとつ！

ばいきんまんは焦ってRyoへ攻撃をしようとするがRyoが側面か後ろに移動する為か中々、当たらない。

Ryoはさらに連続で片手直剣3連撃ソードスキル『ブルーローズ・スラツシユ』、2連撃ソードスキル『くろす・ねざー』、単発全体ソードスキル『ジムーン・スラツシユ』3連撃ソードスキル『バックレイ・スラスト』と放つ。

ばいきんまん：だあつ！もう頭に来たあつ！

コハル：！

アイカ：そんなこと、させない！

とばいきんまんはアイカ達へ攻撃したが間一髪、アイカが『星落』を使って防いだ。しかし、そのタイミングでアイカの愛剣はあ真つ二つに折れた。

アイカ：っ！

アイカは一瞬、驚いたが思考を切り替えると背後にいたコハルを抱えて飛び退く。だが、頭上から巨大な影が迫って来る。

ばいきんまん：ムダムダア！そのままペしやんこになっちゃえく！

アイカ：っ！

Ryo？っ！俺から大事な存在を奪うんじやねえよっ！バカヤロー！

間一髪の所でRyoが『スラッシュ・アサシネイト・バースト』で相殺した。アイカとコハルの前には両腕に青筋が無数に浮かび、眉間に深くシワを刻んだRyoがいた。

Ryo？・・・俺から“大切な仲間”を奪おうとしたためえをぜってーに・・・許さねえ！

ばいきんまん：ふん！お前に何が出来るんだ？

Ryo？『努力する』ことだけだ！コハルとアイカを“守り抜く！”為にっ！“支えられるように”っ！

コハル：Ryo・・・

Ryo？そのためにも！俺は“今以上に強くなるっ”！はああっ！

春華：あれは・・・！

気合いと共に白銀の膨大な気を放出するとそこには白髪に紫色の目を持つ人物がが紫色のスパークを迸らせながら立っていた。



比奈：獸神・源装・・・

獸神：源装は莫大な呪力を全て“気”に収束させることつまり、負の感情に強い“想い”が合わさったことで、誕生したものだ。霊力も同じ道理で発動できる。

ばいきんまん：クソっ！何でだ！何で・・・のわあっ！

Ryo？それは俺をキレさせたから・・・だっ！

ばいきんまんは操縦幹を必死に動かし、Ryoへ攻撃をしようとするが、Ryoの姿を捉えることが出来ず焦っていたために頭上へ一撃を喰らってしまう。

深雪：アイカさん、コハルさん、先輩見えませんか？

比奈：当たり前や、あれは化け物クラスやでなく（――ω――）

その一撃を皮切りに赤黒い炎を纏った剣で両手足をたった横一文字の2発で斬り落とすとRyoは胴体へ移動する。

Ryo？吹き飛べっ！『神駕・獄炎剣波』（しんか・ごくえんけんは）

そして、Ryoは白銀のスパークを迸らせた赤黒い炎を纏った『レイジ・スパイク』を胴体へ叩き込んだ。

ばいきんまん：バイバイキーン

そして今までのとは桁違いの威力に耐えきれなくなったロボットが爆発したあと、その爆風でばいきんまんは吹き飛んだ。

Ryo? ようや・・・く・・・だ

ばいきんまんが吹き飛ぶと同時にRyoは地面へ落下する。アイカは咄嗟に影妖精の羽根で飛ぶとRyoを抱えた。

アイカ：・・・

——とある洞窟

ハルト：・・・友理奈さん、モトヤス、もう止めないか? やっぱり、コハルとは話し合つて・・・

友理奈：何言つてんの? ハルト

モトヤス：ハルト、今更、「裏切る」つもりかい?

友理奈：・・・

ハルト：・・・

モトヤス：もう、後戻り出来ないんだぞ?

ハルト：・・・これ以上、コハルを傷つけたくないんだ!・・・まさか、こんなことになるなんて・・・思つてもいなかった・・・

友理奈：私がコハルを傷つけてるっていうの?

???：その通りだ

友理奈：!・・・誰

ラファエル：私はラファエルお前達を「処刑する」者だ。

長い水色の髪をなびかせた白と青のコートとズボンの男性、ラファエルが淡々と告げる。

友理奈：・・・は？

ハルト：！逃げよう！この人には勝てない！

モトヤス：ハルト、お前要らねーわw友理奈さん、殺していい？

友理奈：ええ。

モトヤス：じゃあなっ！w

と次の瞬間、モトヤスの足は氷付けになっていた。

モトヤス：があっ！足があっ！

ラファエル：はあく・・・醜いことこの上ないねえ（ーwー）・・・どうした？来な

いのか？メスが

友理奈はピクリと眉を寄せると、剣を抜き襲いかかるがあっさりと躲された。

友理奈：なっ!?!

ラファエル：遅い

そして、コンマ数秒で友理奈の背後を取ったラファエルは友理奈へ告げた。

ラファエル：ああ、そうだ！ちよつとしたゲームをしよう！

友理奈：・・・ゲーム？

ラファエル：簡単さ？君の命か氷付けになつて彼の命か選ぶんだよ？

友理奈：・・・もちろん、私を選ぶわよ

ラファエル：そうか（――）。では・・・

その瞬間、辺りに鮮血が舞った。

ハルト：！（逃げないと・・・）

友理奈：ごめんさいね？モトヤス。私にとつては貴方もコハルを手に入れるための道具でしかなかったの

モトヤス：そん・・・な・・・

友理奈は淡々と告げたあと、どこかへ転移し、ハルトは“助けを求めするために”転移した。

ラファエル：君たち下等生物がのうのと生きるなんて、私にとつては拷問そのものだ

アイカ：・・・

Ryo？アイカさん、その剣の欠片2つ渡してもらつてもいい？

突然、Ryoはアイカへそう言うと言つたと剣の欠片を受け取つた。

アイカ：何をするつもりですか？

R y o? . . .

R y oはストレージから武器生産の道具をオブジェクト化してリナとメルトの剣をわざと破壊したあと、その欠片を台の上へ置いた。

R y o? これでも、リズの所で武器の生産を学んでいるんだ . . . 今から、  
“作る”  
けど要望あるかい？ 出来るだけ、そのようにするから

アイカ： . . . あの剣と同じものを作って欲しいの . . . 形だけでも . . . いいから  
と震える声で R y o に伝えると

アイカ：あの剣は、私の誕生日の時に星天の皆から貰った物なの . . . 思い出の詰まった . . . 大事な剣なの！

R y o? . . .

アイカ：だから、お願い . . . 形だけでも . . .

R y o? 分かった

R y oはそう言って台に触れ、システムウインドウを表示させるとそれを操作していった。操作が終わるとハンマーで先程の欠片をインゴットへ順に溶け込ませていく。

R y o? これで、最後だ

そして、インゴットを重ねたあと、アイカの剣の欠片を溶け込ませていくと剣の形になった。

Ryo? ふいー( ; D ( ) ガクガクブルブル緊張したー( . ω . )  
 台の上にはアイカの剣と同じものがあつた。

アイカ：・・・(本当にそっくりに作つてある・・・)

Ryo? さて、試しに振つてごらん?

アイカ：あつ、うん

とアイカが剣を取つた時だつた。

アイカ：ふえっ!?

剣が思つたよりも重く、剣の重さで倒れてしまつた。

Ryo?・・・アイカさん、貸して見て?

Ryoは剣を何度か振つたあと特殊な剣の素材が3つもあるからか装備条件が出て  
 るということアイカに告げる。そして剣に触れてシステムウインドウを開いた。

そこには、以下の条件が書かれていた。

・『攻守、いずれか3000を越えている』

・『スキルレベルがアビリティ含めてオール80』

・『プレイヤーレベルが130』

・上記を全て満たした時に使用可能

アイカ：レベル130っ!?

Ryo? (なんじゃ、このスペックっ!? インペリアルの10倍はあるぞっ!?) ゴメン、アイカさん (T | T) 何か、とんでもなく化け物クラスの剣を作っちゃった・・・

アイカ：いえ、Ryoさんは私の希望を叶えてくれましたし

アイカ：まあ、凄いい剣になりましたね・・・リナさんやメルトさんの剣、本当に使っちゃって良かったんですか？

Ryo? 形見を誰かに奪われるくらいなら、こうした方がマシだ！

アイカ：そうかなあ？

Ryo?・・・それにしても、レベルのかさ増しであの黒のバトルドレスは必須だな  
アイカ：ふえっ！あのドレスっ!? ちよつとそれは・・・(あれは、露出する部分があるから、着たくないけど) 分かった。っ！あっち向いてっ!?

アイカが装備し直したあと、Ryoは斬馬刀を渡した。

Ryo? もう一本あるから、気にせず使って？

アイカ：ありがとうございます！ ( ^ ω ^ )

Ryo?・・・それにしても帰ったら、早速レベリングだなあこれw

アイカ：そうですね、頑張りますっ！

Ryo? ざつと、2・3ヶ月ぐらいで130いくから、一緒に頑張ろう!?

アイカ：はいっ！ ( ^ ω ^ )

そして、Ryoが武具生産の道具を片付け終わった時だった。

Ryo?!

ラファエル：凄いねえ（――）。（――）

Ryo? ラファエルっ！

ラファエル：光栄だね（――）。では……

ラファエルが背の剣を抜く。水晶を加工したような薔薇の装飾の剣をRyo達へ向けたその瞬間、無数の氷柱が降り注いだ。

Ryo? させるかっ！ 四神之加護 “獄炎術・炎転壁” っ！

とRyoはラファエルの氷柱を炎のカーテンで相殺した。

ラファエル：伊達じゃないね？ 攻略組は……だけど！これはどうかなあ!?

Ryo? っ!?!? あはっ！

咄嗟にラファエルの振るった一撃を斬馬刀で防ぐRyoだが勢いが強すぎて後ろへ吹き飛んだ。

アイカ：っ!?!

Ryo? たった、一撃で……これだけの……強すぎるっ！

ラファエル：次は、黒いドレスのお嬢ちゃんかな？

Ryo?! ……やめ……ろ……アイカに……手を出すなあっ！



R y o?!

ラファエルが再び振った一撃からアイカを庇ったR y oはそのまま、前のめりに倒れた。その光景にアイカは顔を青ざめる。

アイカ：R y o・・・さん？・・・そんな・・・いやあぁt・・・

ラファエル：少しだけ眠ってねえ？

ラファエルはアイカに悲しむ余地を与えず、手刀を打ち込む。その時、アンパンマンの声が響き渡った。

アンパンマン：やめるんだ！

ラファエル：研究の邪魔しないでもらえるかい!?

アイカ：R y oさんっ！起きてっ！ねえ・・・て・・・やだよ・・・一緒にレベリング頑張ろうって言ったじゃないですかっ!?!気づいてるんですよ!?! “私が剣を使えるように” 責任を持つてるくらいっ!?! だから・・・目を・・・開けて下さい・・・

R y o?・・・アイカ？

アイカ：R y oさんっ・・・良かったあ・・・

と安堵したためか泣き出すアイカ。それをR y oは待ったあと、アイカの目元をハンカチで拭った。

R y o?ちよつと失礼

アイカ：ふえっ!? Ryoさんっ？

Ryo?心配させてゴメン・・・

アンパンマン：うわああっ！

Ryo?アンパンマンっ！

その時、どこからかアンパンマンが勢いよく落下してきた。

ラファエル：雑魚は引っ込んでなさい・・・邪魔です

Ryo?上空か・・・アイカ、ここで待ってて？

アイカ：つちよつと！Ryoさんっ!?どこに行くんですか？

アイカにそう言い残すとRyoは白竜の翼を広げてラファエルと同じ高さまで飛んだ。

Ryo?これ以上はさせない！アイカやコハル達は

とRyoは剣を抜き、ラファエルへ切っ先を向けたあと

Ryo?俺が意地でも守り抜くっ！

ラファエルへ叫ぶと同時に突っ込んで行く。左右の袈裟、逆袈裟、突きを繰り出すのが、全くと言って良いほど効いてなかった。

ラファエル：ムダだ！何をやっても！

すると再び、無数の氷柱が降り注ぐ。Ryoは剣で弾こうとするが、ほとんど刺さっ

てしまった。

ラファエル：諦めなさい・・・君にはそこまでが限界だ・・・

Ryo?・・・

すると、アイカはなにかを伝えるためにRyoへ叫んだ。

アイカ：ムダなんかじゃないっ！Ryoは私に向き合おうとしてくれた！どれだけ辛くても！手をさしのべてくれたっ！だから、「優しさ」を知らない奴なんかには負けないで！

一方、春華達は街で呪物の相手をしていた。

春華：(河村君なら、大丈夫・・・きつと、倒してくれる！)

影次：(河村君、俺な？なんか楽しみなんや！これからも皆でおれることが楽しみで、堪らなくワクワクするんや！せやから、絶対に倒してな!?)

深雪：(先輩っ！私、まだ先輩になにもお返し出来てないです・・・ですから、死ぬなんて絶対に許しませんよっ!?)

美月：(・・・影次君のこと好きだけど、でも・・・河村君がいた方がもつと楽しいから、お願い・・・絶対に死なないで!?)

コハル：(Ryo、私ね？とても不安なの?・・・でも・・・Ryoが一番不安だよね？でも、大丈夫だから「私が側にいるから」っ!)

Ryo? 『エンハンス・アーマメント』

Ryoはアイカに渡した剣と同じものを天へ掲げ、とあるワードを唱えた。すると、無数の光が四方八方から集まって刀身を覆った。

ラファエル：いい加減、認めろ！このっ！弱小者がっ！

ラファエルは怒りに任せて剣を振り下ろすが金の半透明の結界に弾かれる。

Ryo? 弱小者はお前だ・・・人という存在から目を背けて、向き合う努力を何一つしないお前に勝てる見込みはないっ！

ラファエル：バカな！あり得ない！こんな下等生物にいいっ!!!

Ryoはラファエルにそう言い放つと巨剣の光の刃を振り下ろす。するとラファエルは最期まで見下したあと断末魔を上げて、消滅した。

あれから2ヶ月後、Ryo達は街の復興工事の手伝いが終わったあとアンパンマン達にお礼を言つてアインクラッドへ帰還した。

## SAOIF 剣魔録 第15話

アインクラッドへ帰還してから、2ヶ月後――

Ryo? ここが「セムルブルグ」か

コハル：綺麗な所だね（・・・）《街開き》してから早速、『61層は住みたくなくなる所！』って噂になつてるのも分かるよ（――ω――）

夕陽に照らされたギリシャ風の街に港や海とデートスポットにピッタリの場所だった。

Ryo? 確かに、綺麗だなあ（――ω――）

コハル：Ryo、主街区にも行つてみようよ！（≡∇≡\*）ノ

コハルはそう言ったあと、Ryoの手を引っ張つて、主街区に向かおうとしたとき、浜辺の方から金属同士がぶつかる音がした。

コハル：Ryo!?! これって・・・

Ryo? そうだな！ 行こう！

と2人は音のする浜辺へ向かった。

??? : セレーネ様っ! お逃げ下さい!

と長袖の黒いワンピースに銀の胸当てをした使用人らしき女性は清楚なロングヘアの少女に告げると黒いフードコートの襲撃者3人へ剣を向けた。

Ryo? 気装武転術・清閃っ!

襲撃者A : なんだあ!?

襲撃者B : この俺達が一瞬で・・・

襲撃者C : 逃げるぞ!・・・

突然、青い閃光がその3人を吹き飛ばした。そして、攻撃をした相手がRyoだと理解した瞬間、襲撃者達は逃げようとする。

春華 : 河村君っ! コハルっ! 大丈夫!?

美月 : お姉さん達も大丈夫? (。・ω・。) ハイ, ニガサナイヨー

だが、ちようど良いタイミングで来た春華と美月が手早く取り押さえた。そして――

??? : さて、突然ですが第一章はここまでですm(。ーωー。) mこの先の出来事は別の話に載ってるかもしれませんよ? (。・ω・。) ではっ! またの機会にお会いしましょう

＼(。▽。)／

??? : ウマクイッタナ、

友理奈：やつぱり、貴方達じゃないとね♪今日は宴会ね（。▽。）／邪魔者はいなくなつたし、これで“研究”が続けられるわ♪ついでに新しいギルドでも作りましょうか？

——虚無之狂詞曲“ラプソディア・オブ・ヴァニテイ”

Ryo?・・・コハル!大丈夫か!

アイカ：Ryoさん!?良かったあ（—ω—）コハルさんは無事です・・・それより、何でここにいるんだろ?私、47層でレベリングしてたはず・・・

Ryo?・・・（全くだ、コハルとセレーネさんはさつきまでいた）

???：どうやら、お困りですね?

Ryo?センキッ!

アイカ：知ってるんですか?

Ryo?前に一時的なパーティー組んだことがあつてな

殲鬼：さて、コハルさん、アイカさん、Ryoさん、貴方達のサポートを俺ちゃんもメアさんでやらせていただきます（。▽。）／“ユイ”さんも暫くしたら来ますから  
m（。—ω—。）m

コハル：Ryo!?!良かったあ（T T T）もう、ダメかと思つたよ（T T T）